日本醫史學雜誌

第18巻　第1号

昭和47年3月31日発行

特集　堀内文書の研究

堀内文書にみる蘭学者の生活と思想
　第一回杉田玄白の手紙から……小川　鼎三…(1)
堀内文書に見られるオランダ語について……大鳥蘭三郎…(11)
米沢藩々医，堀内家とその周辺……堀内　淳一…(17)
堀内文書よりみた江戸時代後期の医療（第一報）…大塚　恭男…(29)
堀内文書関係年譜……酒井　シヅ…(39)

原　著

弘前における渋江抽斎の遺族と伊沢棠軒
　—伊沢蘭軒覚之書（二）—……松木　明…(51)
Japanische Medizin und Deutschland……Teizo OGAWA…(92)

資　料

堀内文書の研究（五）……片桐　一男…(55)
戸塚静海より兄柳斎宛の書簡の紹介……戸塚　芳男…(61)

例会記事……(67)

昭和46年度医史学関係文献目録（一）……(68)

雑　報……(74)

通　巻　第1387号

日　本　医　史　学　会

東京都文京区本郷2～1～1
順天堂大学医学部医史学研究室内
振替口座・東京15250番
電話（813）3111　内線　544

醫學の寶玉
復元シリーズ

創業100年
36000
金原出版

弊社創業百年記念事業として、
わが国医学の宝玉を完全復元して、御鑑賞に供します。

第三回作品発売中

総監修　東京大学名誉教授　緒方富雄

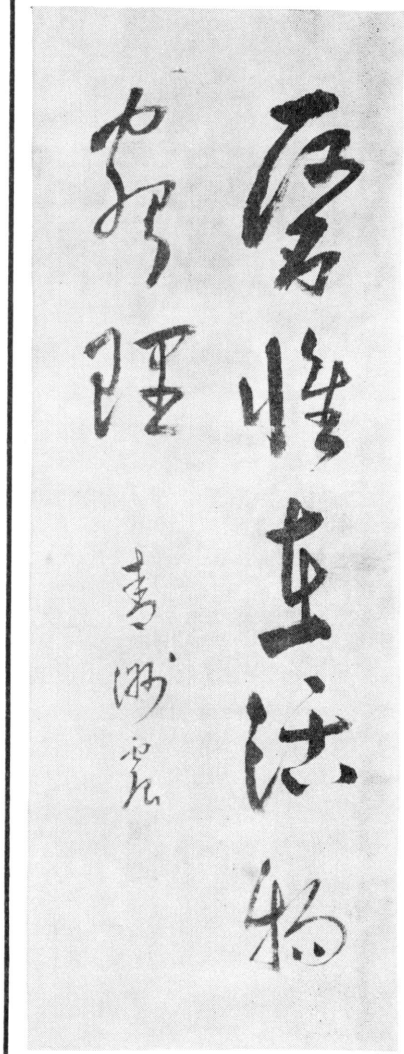
華岡青洲　書

医惟在活物窮理

青洲震

巧芸版・絹本軸装（115×42.5cm）
桐箱入・緒方富雄先生箱書
限定五〇〇部
定価四〇、〇〇〇円（送料他五〇〇円）

●次回頒布
日展審査員　長谷川義起　作
杉田玄白翁ブロンズ像（高さ35cm）



●解説

緒方富雄

「活物」とは「生体」のこと「窮理」とは「探究」研究」のことである。「活物窮理」とは生体について研究・探究することである。

世界にさきがけて、一八〇五年以来全身麻酔下に乳癌その他の大手術によい成績をあげ、世界の近代外科の先駆となった華岡青洲（一七六〇―一八三五）は、「活物窮理」を外科医としての生命をかけた信条とした。

いまなら当然のこととおもえるが、その知見のとぼしかった当時、青洲が先入観を排して、これを強く主張したのは、たいした見識である。青洲の画期的な成功の秘訣もここにあったというべきであろう。

質と量との差こそあれ、青洲の「医惟在活物窮理」は、今日でもあじわうべき名言である。

青洲は書家としてもその名が高く、ことにその草書は自由自在で見事である。ここに複製した一幅もその一つである。原品は絹本であって、絹本でなければ出ない味をたえているので、原品にある大きな染みを製版の過程で取り除いて仕上げた。また落款にある震は、青洲の名である。（二代華岡青洲氏蔵）また三代随賢を称した。

発行　金原出版株式会社
医学文化保存事業部
TEL 03(811)七一六一(代表)

日本医史学雑誌・第十八巻
第一号・昭和四十七年三月　昭和四十七年二月一日受付

▽▽特集：堀内文書の研究

堀内文書にみる蘭学者の生活と思想

——第一回杉田玄白の手紙から——

小川鼎三

はじめに

ここに堀内文書というのは米沢藩上杉氏に医をもって代々仕えた堀内家に残った江戸後半期（一部は明治に及ぶ）の書状など三百余点と軸物十八点を指すのであって、その目録は片桐一男氏が本誌第十六巻三号（昭和四五年九月）に発表した。この文書の所有者は東京医科歯科大学の放射線科の堀内淳一博士である。私ども数人（大鳥蘭三郎、片桐一男、堀内淳一、大塚恭男、酒井シヅ、小川）は研究班をつくり、文部省の綜合研究費を得て、その解読と内容の検討につとめ、昭和四五年度からほぼ定期的に会合を重ねてきた。結果の一部はすでに本誌の資料編に片桐一男氏が整理し、若干の説明を付して載せた（第十六巻四号、第十七巻二号、四号）。

本研究班の仕事はまだ全体の半ばにも達しないが、すでに読み得た所から興味ある点を拾ってみる。

堀内家の系譜から

日本で初めて刊行された西洋小児科書が堀内素堂（一八〇一—五四）の「幼々精義」であることはよく知られている。

素堂の諱は忠寛、字は君栗また忠竜、のち忠亮という。素堂は号である。素堂の孫にあたる堀内亮一氏（堀内淳一博士の祖父）が昭和七年に内容の充実した伝記「堀内素堂」を公けにされた。堀内家の家系がその中で示されている。ここではその大要を特に名君上杉鷹山（一七五一―一八二二）および江戸の蘭学者たちとの関係においてみる。堀内家の初代忠明は初め信州に住んだ武士で上杉景勝の臣となり、関ケ原の前哨戦で板谷峠を守って戦死したという。上杉氏はこの天下分け目の戦いで会津百二十万石から米沢三十万石に移封され、さらに寛文四年（一六六六）上杉家の血統が絶えようとして、吉良義央の子が迎えられ上杉綱憲として米沢藩主となったとき、知行の半分をとり上げられ、十五万石となった。米沢藩の困窮と苦悩おもうべしである。

系譜をみると堀内家第五代の直董（忠哲）が同藩の飯田忠林にオランダ流外科を学び、初めて医者として上杉氏に仕えた。その後は代々医をもって藩主の側近に侍したようである。直董の孫、堀内易庵（忠智）は安永年間の末から上杉鷹山の侍医を勤め、鷹山が天明五年に隠居した後もそのお側医であった。鷹山は隠居後も三の丸餐霞館に住んで永く政務をみたことは周知のごとくである。天明七年に鷹山の実父秋月種美（たねよし）（日向高鍋藩主）が江戸で重病に陥ったとき、易庵が米沢から派遣された。そのとき藩の重臣香坂右仲が江戸の易庵に書き送った多数の手紙が残っている（文書一号―一一号）。そして秋月種美がその九月に没すると、十一月には鷹山の養父上杉重定が病気との報に接し、易庵は鷹山のお伴をして大急ぎで米沢に帰ったのである。易庵が藩医として鷹山らの信任が厚かったことが推測できる。

易庵の子で家督を継いだ堀内忠明（忠意、初め林哲、号壷天）は寛政元年から二カ年間江戸詰であったので、その間に杉田玄白、大槻玄沢に学んだ。当時は玄沢の芝蘭堂が始まったばかりで蘭学界が大きい発展にふみだした時機にあたる。忠明は江戸で蘭学者との交友が広く、彼にあてた江戸の学者たちの手紙が甚だ多数残っている。今回述べる杉田玄白の書状も、忠明に宛てたものである。忠明は寛政四年米沢に帰り、その年逝くなった父の跡をついで、鷹山の侍医となった。その寛政四年八月に江戸の本草学者佐藤平三郎（中陵）が米沢に招かれ、翌寛政五年十一月に好生堂と称する医学校が初

めて設けられた。米沢藩の医学が興隆に向った時といえる。

忠明の子、堀内忠寛が本項の初めにあげた素堂である。彼は初め米沢で蘭方医高橋桂山に学び、後にその女を妻とするが、文政三年廿才のとき江戸詰となり、玄白の実子杉田立卿の門に入り、また青池林宗にも学び、儒学を古賀穀堂にうけた。幅ひろい教養を身につけて、詩文や書道にも甚だ長じていた。鷹山亡きあとであり、藩主上杉斉定の侍医を勤め江戸と米沢が彼の主な活躍の場所であった。著書は刊本「幼々精義」（二輯合せて七巻、一八四三―四八年）の他に未刊の医書や随筆（日渉園随筆奇々雅記など）の類が多数あった。

素堂の子、堀内忠淳（忠廸、のち忠亮、号適斎）は三四才の若さで没したが、「医家必携」（三巻、一八五七）を刊行している。堀内家歴代の墓は米沢の館山寺にある。江戸後期に米沢が奥羽において蘭学の主な中心地をなしたのには堀内家の存在が大きく影響したとおもう。

杉田玄白の手紙（目録の第十八号と第廿号）

堀内文書の第十八号は江戸の玄白から米沢の堀内忠意にあてた手紙で、別筆で付記してある「文化庚午」（七年）により一八一〇年、玄白七八才の筆と考えられ、日付は四月十六日である。同年の七月には石川大浪が玄白の像を描き、その画が「形影夜話」の巻頭を飾るのである。玄白は文化四年に家督を養子の伯元に譲り、隠居して三年後の手紙である。

「老拙こと、只今は世事どもは伯元立卿両人に任懸け、療治も心に向き次第に致し、余年を楽しみ居り申し候、歯は残らず落ち尽し候ゆえ、何も給候者も之なく、今年際り〳〵と存じ、花紅葉を老人二三輩懇意の者申し合せ、油断なく見歩き行き申す事に候。当春も見に参り候処、腰折をよみ出し申し候。日記同前少し計り別紙認め御目に懸け候……」

日記同前の腰折を書いたという別紙はいま見当らない。この手紙をうけとった忠意（壷天）の年令は不明だが、玄白よりずっと若かったにちがいない。後に述べる他の手紙がそれを示している。その忠意がこの手紙の翌年閏二月廿八日に没

する。当年七八才の玄白は今年限り〳〵の生命と思いながら、親しい友人と花見などを「油断なく」して歌をよみ余生を楽んでいた。世事どもは養子の伯元と実子の立卿にまかせてある。しかし診療も気の向いたとき少しは自分でやる。悠々自適の生活だが、歯が全部脱け落ちたのには困ったとある。

その歯に関して鷄斎日録の文化元年七月廿四日の所に「入歯出来」の四字がある。玄白七二才のときである。そして文化十三年八四才のときに書いた耄耋独語には下地を黄楊で作った入歯がどんなに工合の悪いものであるかを縷々述べている。「すでに入歯を作りて用ひし事ありしに……」と過去形に書いているから、一時用いただけで、晩年は入歯を用いなかったのであろう。

次は堀内文書第廿号の手紙でやはり玄白が忠意にあてて十二月十一日の日付で書いたもので、内容からして寛政九年（一七九七）とおもう。そうすると玄白は六五才であり前の手紙より十三年も若い。この手紙は昭和七年の刊本「堀内素堂」に全文発表されているが、ここではその要所をとり、少しく読みやすくしてみた。また解読の文字を改めた所もある。まず後半から始める。

「さて今時は御聞及も下され候はん、老拙事も不慮に去月明、比隣より失火にて相延び、弊屋に及申し候て御存じの小詩仙堂を初め、一時灰塵と相成候。寔に以て箸一方無之と申候類焼に候得共、幸に蘭書の分は土蔵納め候故恙なく候。其外愛翫の物より珍薬類は皆焼失いたし候。和漢書籍も恙なきは希、半は全きは少々御座候。一通りよりは長寿にて都下に住み候故、自然と奢の付き候ゆえ天より許さざる所と一つは怖れ候。一つは楽も能程いたし候故、身の恥を残し申さず幸と存候得ば、おしく存じ申さず候……」

この手紙は玄白の居宅が寛政九年十一月廿二日に神田佐久間町から起きた大火で類焼したことを米沢に住む忠意に知らせたのである。丸焼けだが、土蔵に納めてあった蘭書は助かった。一番の宝物だから蘭書の助かったのは実に良かった。玄白がその以前から自分の書斎のある居宅（の一部か）を小詩仙堂と呼んでいたことも知られる。従って鷄斎日録の寛政十

一年七月廿八日の所に小詩仙堂柱立とあるのは自分の書斎の復興建築が始まったことを意味する。決して小詩仙堂がこの時に創立されたのではない。火事で箸の片方も持ち出せぬような丸焼けになったのを一つは天の罰であると怖れ、しかし身の恥を残さずにすむので、焼失を惜しいと思わぬと述懐するのである。

そのあとに「小詩仙堂罹災、因りて賦す」と題して漢詩二篇を書いているが、右の述懐と同じ趣旨で、一つは「造物が能く老を憐れみて、此の身を軽くしてくれた」、いま一つは「風流の生活が祝融の妬みを買った」の意とおもう。刊本「堀内素堂」の第八ページにあるこの詩の最後の一字は烟でなく、畑であろうと私は考える。

この手紙の前半では堀内忠意が米沢から野鴨を贈ったことのお礼の文が「奥羽両国の鳥は格別の風味にて賞味いたし、枯腸を潤し怡悦少からず忝く存じ奉り候」とある。続いて

「さて労瘵（肺病を指すか）の病客尿血の所、精不熟なる故との御説面白き事に候。右に付き猿を御観蔵にて弥御発明の段御申越面白き事に御座候。左も有るべきの義と存じ候。とかく医者は医者臭き程に平日好て心頭に忘れずば、自然と古人未発の所も出来申す事御座候。未だ春秋に富み候御身分、折角御心懸け成らるべく候」とある。忠意が猿を解剖して調べたことを賞めて、あなたはまだ若いのだから大いに勉強しなさいと激励している。「医者は医者のにおいがする程にいつも医事を好んで心頭に忘れないように」というのは形影夜話の中にも同じ趣旨の文がある。

いま鶴斎日録の寛政九年十一月廿二日の分をみると（その前の日記が断絶していないので、「箸一方無之と申候類焼」とあるのは文字どおりには解されない、少くとも日記は持ち出している）「西北風強、佐久間町朝五ツ時（午前八時）頃出火、薬研堀へ飛火し、夫より新大橋向へ飛、木場にて夜九ツ（午後十二時）頃留。十右衛門妻七月にて大橋より落、腹破死」とある。自宅が焼けたことは何も書いてなくて、妊婦（知人か）が橋から落ちて腹が破れて（?）死んだという医事を書いたのは医者臭い玄白の面目が躍如としている。その大火で彼の家が焼失したことは日録では翌々日の廿四日に万年町の「三左衛門殿長屋へ仮宅引移」っていること、廿六日に火事のために藩の金を借りていること、その年の終りに一

年の収入を書く所で「当年災前不相分」とあることでも歴然としている。収入を記したメモまで焼けたか、或いは紛失した。

堀内忠意に「小詩仙堂罹災、因りて賦す」と題して二つの詩を並べて書き送ったのが十二月十一日で、その少し前の十二月二日に「災後謾成」と題して別の一詩を作っている。大鳥蘭三郎氏が最近に本誌第十七巻二号（昭和四六年九月）に発表したものを参考し日録の分と合せると

灰塵遠接東海雲、街陌縦横路不レ分、
天定人間春色近、携レ尊将レ問野梅薫。

となり、前の二詩とは甚だちがった趣きである。この詩の前半は荒寥たる焼け跡風景であるが、後半は、天定まり春が近づいた。尊（さかだる）を携えて将に野梅の薫を問わんとす、というので、家の丸焼けが天の罰だとか、いや天の恵みだ等という深刻な問題とほぼ同時に、焼け跡に立っても、近づく春を楽しもうとする六五才の玄白の余裕ある気持が現われている。

「武江年表」（嘉永二、三年刊）では右の大火が寛政九年十月廿二日となっているのは誤りであろう。

堀内文書にはいま一つ火事に関連した玄白の手紙（第廿八号）があり、十二月廿五日付で杉田伯元と玄白の連名（伯元の筆蹟とおもう）で、米沢の堀内忠意と内村洞翁の両人が火事見舞として白銀一枚を送ったことに対する礼状である。冒頭に「先月廿一日の貴翰」とあり、それが火事見舞の手紙と思われるので、「先月」は十一月だから寛政九年の火事のあととは考えられない、これは寛政五年十月廿五日の江戸大火で三ツ又に近い玄白の家が焼けた時のものであろう。鶴斎日録（昭和十九年刊）は寛政五年九月から同七年五月までが欠けているので、その火事のとき玄白がどう振舞ったか分らない。

武江年表には「十月廿五日、湯島松平雲州侯御別館より出火、神田辺、本町、石町、堺町、葺屋町芝居、日本橋辺まで

類焼す」とある。火事は江戸の名物であり、玄白は生涯に少くとも四度（宝暦十年と同十二年、寛政五年と同九年）家が焼けたと思われる。

宛名の一人、内村洞翁（直則、覚端）は米沢の藩医で、「天明八年中治広公に御供、翌年（寛政元）四月中杉田玄白え寄宿仕り候」という書類が発表されている（米沢医界のあゆみ、昭和三八年刊）。また鸚斎日録の寛政元年九月廿四日に覚端が江戸を発ち帰郷するので玄白が詩を作り与えている。寛政五年十月の火事のとき米沢では堀内忠意と内村洞翁の二人が玄白の門人として見舞の状を発したと考えられる。

玄白のいま一つの手紙（目録の第十九号）

堀内忠意にあてて八月廿八日の夜に書きあげたという甚だ長文の手紙で、終りに近く「会津御人数へ北地へ参候御見物の由……」とあるのは文化五年、会津藩の将兵が宗谷、唐太、利尻、松前方面に派遣されたことを指すとおもう、玄白は七六才であり、その前年に家督を伯元にゆずり隠居の身となっていた。書状の始まりは「本月十五日早便滞り無く相達し……」で忠意の発した手紙が至急便であったことがわかる。米沢藩主上杉治広、隠居の実力者上杉鷹山の病気についての問合せであり、玄白は老軀に鞭うって長々と巻き紙三メートル七〇センチに認めた。終りに「此度の御状ハ返事早クと被仰下候ゆえ、早々拙案灯下にて相認め、老筆落字乱書能々御照察御看過下さる可く候……」と断わり書きしている。行燈のそばで大急ぎに書いたものという。もし一気呵成にこの長文を認めたとすれば七六才の玄白の脳力も体力も大したものである。

内容を詳述しないが、まず君侯すなわち在府中の上杉治広を玄白が診察したことの報告である。足の親指の根もとが腫れて紫色を呈し、刺すような痛みがある。腹部の調子もよくないというので、玄白は西洋の液体病理説によって症状の説明に努めている。血液が凝滞し、その「御凝血の味ひ苛烈に相成り、和蘭にて申し候神経へ少し浸入仕り候ゆえ御刺痛遊

ばされ候事と存じ奉り候」とある。江戸詰の米沢藩医たちとも相談して治療に当っている。衝心というような危険がないだろうかとの御心配を承ったが、自分はまあその心配はいらぬとおもう。しかし万一にも増悪して治し難い腫物に変ったりしないかと自分は気づかっている。右のことを鷹山侯にお伝え下さい。

つぎに老侯すなわち米沢に住む上杉鷹山の去る六月中旬から始まったという膝の病気を侍医堀内忠意の報告から推察しようとするわけである。「人々の膝と申し候者は膝蓋の直下に脂を入れ候膜嚢数多これあり候、其嚢内へ悪水を貯して数々同様に相成候と自ら鶴膝の状に相成候。之を鶴膝風(と)名じ候」と、まず膝の解剖学を述べて、そこに脂肪を入れる嚢が多数あるという。鶴膝風は漢方の用語でリウマチなどの関節疾患を指すようである。

玄白はまたその患部で水液すなわちリンパの流れが悪くなっている。そこを毒虫が咬んだのだろう。さらに老人では下行の気が薄いのだという。

「其気を御膝蓋の脂嚢相妨げ候故ますます水液御流行悪く相成候て御腫出候事哉と存じ奉り候、尤も水は血と違い其質薄き者ゆえ聚り易く消し易き者に候て、御腫出没候義と恐察仕り候」

そこで忠意たちが鷹山にカンフル(Camphora 樟脳)ブランドヱン(Brandewijn 火酒、強い酒)、バシリコン(Basilicum 薬用植物めぼうき)を差し上げたのは下行の火気を延ばし及ぼすので、一端は回復した。しかし再発したのはやはり膝下の所が正常でないからで、こんどは温泉に浴して桂枝附子の入った薬を服用して全快されたとのことで恐悦至極です。しかし万一また起ったときはどうするかとのお尋ねに対して、自分は老人は下行の気が薄いことを重要視して、温めるための蒸薬がよろしい、カルクワーテル(石灰水)にカリ石鹸などを用いるのが良いとおもう。

その後に続く文句がたいへん重要である。

「去りながら十思一見の仮如の通り直に拝診申さず候上、愚老の義度々拝診候ても真実の所は相分らず候義、殊に御容体書ばかりにては猶更の事に御座候。去りながら御尋ねに就き愚案申し述べざるも如何ゆえ御懇意に任せ申し入れ候」鷹

山はこのとき五八才であった。この文は、つまり玄白は直接に診なければ何もいえない。そのうえ実際には度々みても自分は本当の事が分らないのだ。容体書だけでは何も云えぬというのである。

そのあとでは話が急にくつろいで、蘭の植え方を玄白が細かく教える。玄白じしんが園芸少くとも蘭の栽培に大きい興味をもち、自らやっていたことがわかる。他人から聞いたり、本など読んだ一夜漬けではこの「蘭植様の事」は書けないとおもう。

なお一つ玄白の手紙（第廿五号）

堀内忠意にあてた八月廿日付のもので、内容から文化元年（一八〇四）とおもう、そうすれば玄白は七二才である。文中に「日々天気ハ晴不申。今様成事七十年来覚不申事のみ御座候、其地も同様と奉存候」とある。この手紙の終りに

「御同国酒田之大変扨々可嘆の事に御座候、酒田の民如何なる罪御座候哉、又大水の沙汰承申候、実説にも御座候哉、乍去此度の様成大変も百年の内ニハ一度も二度も有之事と相見可申候。老拙覚候ても浅間抜（天明三年）、薩州霧島（安永八年の桜島の誤りか）の焼、先年の肥州天草の変、其地に在候てハ驚候得ども、天より見申候て差有事とも不被存候。木曽山中或美濃国より石蛤石螺の類掘出候事有之候得は、今の辺海ニてありし事も有之候事と被存候、可恐怖事に御座候。只不朽者ハ名と徳とニ御座候。無御油断御出精可相成候……」とある。

右文中の「酒田の大変」は文化元年六月四日の羽前、羽後の大地震とそれに伴っておきた洪水を指すとおもう。象潟（きさがた）の大崩れである。重田鉄夫「荘内史料」（大正元年刊）によれば領内の田畑損耗は七万四千余石で、内四万七千余石が地震のため、二万六千余石が地震に伴った出水のためとある。また酒田の総家数八百二軒のうち潰家が三七八軒、大痛が四二八軒、酒田の土蔵五百六十棟のうち棟潰が一七八、大痛が三八二棟という。

「先年の肥州天草の変」とあるのは寛政四年の一月から四月にかけて起きた島原領温泉岳の噴火と地震、眉山の崩壊によ

る大水害を指すのであろう。従ってこの手紙は文化元年のもので、その中でとくに面白いのは木曽の山中や美濃の国から貝類の化石が掘り出された。だからこの辺りも昔は海だったのだろう。火山の爆発や地震洪水などの天変地異による世の中の移り変りは実に恐ろしいことだ。ただ不朽なのは名と徳とである。それゆえあなたも「御油断なく御出精」してほしいという論議の進め方である。

（昭和四七年一月二九日、日本医史学会例会で演説した）

研究余滴

解体新書に引用された本

解体新書に参考にした書目はその凡例で出ていることから、これまで多くの人により報告されてきた。しかし、本文に引用された本はそれより少く、しかもそこに挙げていない中国の書物がある。引用文のでてくるのは巻の二からであり、「翼按ずるに……」の書出しで始る。いわゆる洋書からの引用はカスパル、ブランカール、ヘスリンギウバ、アンブルの四人であり、後二者はわずか一カ所だけである。カスパルがそれより少し多く、ブランカールが最も最い。しかも、内容が整つており、彼の解剖書がターヘル・アナトミアに次いでよく読みこなされたと推定する。本の名は nieuwe hervoomde anatomie である。この本はその後も日本でよく読まれ、医範提綱の附図の扉絵に彼の肖像がある。

中国のものは眼目篇と耳篇に、方以智の「物理小識」からの引用文をみる。また、ここに「夢溪筆談」と「涿斎問覧」からの引用文もあるが、これらはいずれも「物理小識」に引用されたものをひいている。

その他、ヨンストンの動物図譜、ドドニュスの植物図譜を参照している。

（酒井シヅ）

ターヘル・アナトミアの出版事情

解体新書の原本がクルムスの解剖書の第三版の蘭訳本であり、一七三四年に出版されたことはよく知られている。

クルムスはその初めのものを一七二二年に、自分の講義を聞く学生のために出版した。それ故に、各項目はきわめて簡潔な記述であり、また挿図の符号と各項目の符号が一致している。これが表題がターヘルなる所以である。図はすべて銅版である。それで改訂する毎に図まで作り直すことは困難であったらしい。それを短的に示したのが第三版の第二十一図である。ここでは胸管が鎖骨下静脈に入る角度が誤ったため、この部分の正確な図を添えている。解体新書の附図はその正誤図をともにうつしている。また、本文を読むうちに、符号の一部が欠番となったり、順序の乱れているところがあり、また、別の種類の記号のついた項目もある。これらは図の訂正がきかないため、本文の訂正した個所が歴然と残ってしまったのである。解体新書ではそれに忠実に従い、アルファベットに当るいろはの一部を欠番にしている。また記号も原著の通りに写しているが、巻の一では＋と＋は避けて、別の符号を使っている。

（酒井シヅ）

日本医史学雑誌・第十八巻
第一号・昭和四十七年三月　昭和四十七年二月一日受付

▽▽特集：堀内文書の研究

堀内文書に見られるオランダ語について

大鳥蘭三郎

私は前々から日本へ伝えられたオランダ語の消長についてすくなからず関心を寄せていたが、この程同僚諸氏と共に堀内文書を調べる機会を得たので、同文書中にある多くの蘭学者の手紙の中に散見するオランダ語（外来語）について調査し考察したところを報告したい。

堀内文書の大多数を占める蘭学者の書簡の中に出て来るオランダ語（外来語）について調べたが、それ等はただ一つの例を除けばすべてオランダ語の単語を発音にしたがって片カナで書き表わしたものである。

それらの片カナがオランダ語の原綴をすぐ思い出させるものも多いが、そうでない場合もまたすくなくない。なかにはいまだになんとも考えつかぬこともあり、そのような場合には△印をつけておいた。

人名、薬名を挙げていることも多く、オランダ語とは言い得ないものもあるが、ここでは特に差別しないことにした。

ただ一つの例外というのは、文書番号一九〇号の竹内玄同の手紙にあるオランダ語そのままを書写したものであり、それについては該当箇所で説明を加えた。

これらのカナ書きで示されているところを文書番号順に差出人別にしてつぎのような表を作り、カナ書に相当する原綴をあげ、その日本語の訳名を附した。

表 1

文書番号	差出人氏名	オランダ語（カナ書き）（外来語）	原綴	日本名
21	杉田 玄白	カンフル	kamfer	樟脳
		ブラントエン	brandewijn	精（アルコール溶液）
		カルクワーテル	kalkwater	石灰水
25	杉田 玄白	テレメンテイナ	terpentijn	テルペンチン（樹脂の一種）
30	杉田 玄白	カンケル	kanker	癌腫
31	堀内 忠明 忠意	エンフラストハチリコム	emplast basillicon (emslastrum basillicum)	ロージン硬膏
		カンフラ	kamfer	樟脳
		テリアーカ	theriaca	テリアーク
39	大槻 玄沢	セール ヘワチク	seer gewaszich	甚だ丈夫な
		ヘール レッケル	veel lekkel	大変甘き
		スタルキ ワートル	sterk water	硝酸
52	森島 中良	ソッヒルマート	sublimaat	昇汞
		ハルサモ コパイハ	balsam copaiba	決明科植物 copaifera officinalis の樹脂バルサム
90	坪井 信道	コンス	Consbruch	人名 G. W. C. Consbruch (1764–1837) ドイツの医者
93	坪井 信道	シュール	zuur	胸やけ
〃	〃	レウマチセ	rheumatisch	リウマチ様の
〃	〃	シンキンフ	zinking	カタール
〃	〃	ガステリセ	gastrisch	胃炎の
〃	〃	ウォルム	worm	蟲，回蟲
〃	〃	ガルコールツ	gal koorts	胆汁熱
〃	〃	レウマチーセコールツ	rhematische koorts	リウマチ熱
〃	〃	ローデロープ	roode loop	赤痢
〃	〃	インゲワンデン	ingewanden	腸
〃	〃	コーデヒュール	koude vuur	壊疽
〃	〃	スレーペンデ	sleepende	慢性
〃	〃	フリュクテロース	vruchteloos	無効の
〃	〃	シキューター	cicuta	毒芹
94	坪井 信道	プリッケルバールステ	prikkelbaarste	甚だ敏感の
	〃	フルメールデレン	vermeerderen	増やす
	〃	ワーレズワッカ	waare zwak	真に弱き

文書番号	差出人氏名	オランダ語（カナ書き）（外来語）	原綴	日本名
94	坪井　信道	△モスギナ浸剤		
97	〃	カルハノ	galvano	直流通電療法
98	〃	チキタリス	digitalis	ジギタリス
		ソイケル	suiker	糖
99	〃	アルニカ花	arnica 花	揮発油樹脂等の原料そのチンキ剤は外傷に用うる消毒刺激剤
104	〃	ブレウクバンド	breukband	脱腸帯
107	〃	ギフト	gift	毒
	〃	カローメル	kalomel	甘汞
	〃	△ホックホウトハルスケレモル		
	〃	センナ葉	seneblad	センナ葉（主成分は瀉下性配糖体）
109	〃	△フルキュルデン		
	〃	△ポトアースベレンス		
111	坪井　芳州	ヤッハン文典	japan	日本文典
	〃	コスト	kost	値段
	〃	ブリッキ	blik	ブリキ
115	杉田　成卿	ヒュヘランドキンデルプーテル	Hufeland kinderpoeder	フーフェランド小児散薬
125	大槻　俊斎	フレウクバンド	breukband	脱腸帯
126	〃	プロトヨヂレチュム		沃度原液
	〃	単ヨヂム	単 jodium	単純ヨジム
128	青木　研蔵	ヒュヘランド	Hufeland	フヘランド(1762—1836)，人名，ドイツの内科医
		フルタール	vertaal	翻訳
		チフスキュンデ	typhuskunde	神経熱学
135	林　洞海	ヒュヘランド	Hufeland	（前掲）
		レッテル	letter	文字
		ポック	pok	天然痘
136	〃	失鳩答エキス	extractum cicuta	毒芹エキス
	〃	ヘラトナエキス	extractum belladonnae	ベラドンナエキス

文書番号	差出人氏名	オランダ語（カナ書き）（外来語）	原綴	日本名
138	林洞海	サビナ	Sabina	杜松属の植物 Juniperus Sabina の葉および枝梢で，サビナ油oleum sabina の原植物，通経剤また吐剤
	〃	シキュータ	cicuta	毒芹
139	〃	カンクル	kanker	癌腫
	〃	オペラチー	operatie	手術
	〃	ワートル	Wather	人名
147	桑田立斎	アルエン	aloe	アロエ
	〃	カンフル	kamfer	樟脳
	〃	アルム	arm	腕
	〃	ワスサルフ	was zalf	臘軟膏
	〃	シビリマート	sublimaat	昇汞
	〃	アロエン	aloe	アロエ
150	大木忠意	貌僂屈帯	breuk band	ヘルニア帯
153	吉村二洲	シキーダ熱	cicuta 熱	毒芹熱
170	坪井信良	△アベセリングアルレーン	allen	
		カランセイン	kransje	仲間
171	坪井信友	セールゲハール	seer gevaar	甚だ危険な
		△セーデウェイゲハール	gevaar	危険な
175	大槻俊斎	ワイツ	Waitz	(1756-1830) 人名ドイツの医者
182	竹内玄同	ホイドシーキ	huidziek	皮膚病
		インスラーン	inslaan	傾向
184	〃	ヒホコンデリー	hypochonderie	ヒポコンデリー
		ヘイステリー	hysterie	ヒステリー
186	〃	ヲーストスコヲンゾヲン	oost schoon zoon	東養子
190	竹内玄同	ブレンキ	Plenck	オーストリーの医者人名 Joseph Jacob von P. (1738-1803)
	〃		naaste oorzaak	最も直接の原因
	〃		eene slijmachtige	粘液性の

文書番号	差出人氏名	オランダ語（カナ書き）（外来語）	原綴	日本名
190	竹内　玄同		zuchtachtige	腫状の
	〃		kropzurige	瘤状の
	〃		opvulling	充満
	〃		van de baarmoeder	子宮の
	〃		opwekkende oorzaak	刺激性原因
	〃		verkoeling	冷え
	〃		stopping van de maanden	月経停止
	〃		droefheid	罹患
	〃	ヒヲシヤム	hyoscyam	ヒオスチアム
	〃	ヲヒュム	opium	阿片
	〃	ヲヒュムカロメル	opium kalomel	阿片甘汞
	〃	コンセルフ	conserva	糖剤
191	竹内　玄同	マクネシア	magnesia	マグネシア
		ラード	raad	忠告，助言
		シュール	zuur	胸焼け
194	箕作　秋坪	レール	leer	けいこ
196	手塚　艮斎	イペー	Ipij	人名
	〃	ワートル	Wather	人名
197	〃	フルタール	vertaal	翻訳
198	〃	ローセ	Roose	ドイツの医学者人名 Theodor G. A. R. (1771-1803)
199	〃	エペー	Ipij	人名
		ブルージング	bloeding	出血
		エットルアフチヘ	etterachtige	膿様の
		ロンクコノッペルセーリヘ	longknobbelselige	肺結核様の
235	堀内　忠亮	ヒヲス	hyoscyam	ヒオスチアム
		メンタ	mentha	薄荷
		△ヘルラト		
		マクネシ	magnesia	マクネシア
		キリステール	klisteer	灌腸
239	高橋　玄勝	メルクリユス	mercuris	水銀
		ステレキハートル	sterk water	硝酸
		△トリシス		
		シユル	chijl	乳糜

文書番号	差出人氏名	オランダ語（カナ書き）（外来語）	原綴	日本名
241	伊東　玄朴	シカットバーレブック	schatbaare boek	宝典
		ワイツ	August Christian Waitz	(1756-1830) 人名 ドイツの医者
		ケールキリングスキリマト	keerklings klimaat	熱帯気候
		ニーウェブック	nieuwe boek	新本

考按

一、堀内文書中の多くの蘭学者たちの日本文の書翰に見える片仮名書きのオランダ語（外来語）についてしらべ、それぞれのオランダ語に日本訳名を附した。それ等の中には薬名・人名あるいは医療器具名を示していることが少なくないが、また蘭学者たちがおそらく日常使用していたであろうオランダ語を片仮名書きで表わしていることが多く見られる。これはちょうど現在多くの日本人が英語またはその他の外国語を日本文の手紙のなかにカナ書きで表示しているところとよく似ている。

二、薬名を示しているものとしてはオランダ語にもとずいているものもあるが、それよりも学名によっている例が多いことが分明する。このことから蘭学者の間では薬名を学名で呼ぶのがむしろ通常となっていたと考えるのがふさわしいと思われる。

三、オランダ語を片仮名で書き表わしている例は蘭学者としてよく知られている人々の手紙の中に見られるが、文書番号二三九号の高橋玄勝は米沢藩の藩医者であり、長崎で吉雄定次郎に蘭方を学んだ人である。

四、文書番号一八六の竹内玄同の手紙の中に記されているヲーストスコヲンゾヲンを字義通りに翻訳すれば東養子であるが、これを伊東養子のことではないかと推定した。この推定にはあながち理由のないことでない。それはこの手紙の筆者竹内玄同と伊東玄朴との間柄であり、伊東玄朴には実子がなく、みな養子ばかりであったということである。それに養子などということはどちらかと言えば余りあらわにはしないのがならわしのようで伊東をただの東で暗に表わしたのではないかと考えた。

日本医史学雑誌・第十八巻
第一号・昭和四十七年三月　昭和四十七年二月一日受付

▽▽特集：堀内文書の研究

米沢藩々医、堀内家とその周辺

堀内淳一

医家以前の堀内家

堀内家（ほりのうち）が米沢藩主上杉氏に藩医として代々仕えるようになったのは一七一四年（正徳四年）、忠哲直董の代からである。それ以前の判明する限りの始祖は堀内権兵衛忠明で武田氏に仕え信州堀の内村に在ったが、上杉景勝の時代から上杉家に仕え知行百五十石、足軽五十人を預り板谷の押を命ぜられた。

慶長五年（一六〇〇年）五月、関ケ原戦に先立って徳川家康は上杉景勝を討つべく、まづ伊達正宗ら奥州勢を上杉攻めに当らせたがその劈頭に板谷を死守した権兵衛忠明は五月五日、討死したという（註一）。周知の如く関ケ原役後、慶長六年八月十七日、上杉景勝は会津百二十万石から米沢三十万石に減封されたが、堀内家もその際に米沢に居を移したものと思われる。権兵衛忠明の戦死後、嫡子仁右衛門等直、次男弥兵衛とも若輩のため知行は当分借上げとなり僅かの扶持を与えられるようになり、後年三人扶持八石を仁右衛門等直に下されたが家督相続の年月日や勤務期間は不明で明暦三年（一六五七）一月十七日歿している。

以下、米沢藩先祖書によると仁右衛門嫡子の治部等栄は上杉綱勝（藩祖謙信より四代目）の代、明暦三年五月に家督を継いで組外御扶持方組へ召入れられ御細工頭を永年勤めて天和二年（一六八二）七月二十六日死亡した。更にその嫡子善

左衛門森栄は綱憲（五代）の代、天和二年十月、家督相続し一人半扶持四石を与えられ元禄十二年（一六九九）七月、板谷口御番所に十年間勤めた後、御兵具御蔵役を三、四年勤め隠居を願い出た（註一）。

註一、米沢藩先祖書には「慶長六年板谷口江仙台勢押寄申段……同年五月五日右之勢押懸之節討死仕申候……」とあるが関ヶ原戦等との関係から五年の誤りと思われる。

註二、「堀内素堂」昭・七（杏林舎）の系図によると善左衛門直栄（正徳元年十月二日歿）とあるが系図が焼失した為、確認出来ない。

武家より医家へ

権兵衛忠明から五代目の忠哲直董（俗名、仁右衛門）は善左衛門森栄の実子、権之助が早世したので吉憲（六代）の世、正徳二年（一七一二）に女婿として家督を相続し、組外仲間を一両年勤めた。彼は元御細工頭、金沢彦六の弟で若年から飯田忠林（正貞後に幽閑と改む）の門弟として阿蘭陀流の外科を十二、三年間修行、伝受されたので正徳四年（一七一四）願の上、外様御外科役を命ぜられた。この時から堀内家は武家から医家として幕末に至るまで代々、藩医を勤めることになる。

直董は正徳六年（一七一六）の江戸御供登りを始めとして江戸御番に転ずること四度に及んだ。この間、享保七年（一七二二）、藩主として宗憲が跡目を継いだが幼年のため御目附が置かれ、享保十年、江戸より国政を監する為米沢に下向する本多兵部（近江守正庸・平蔵）附きとして米沢に逗留中、その家来大勢の病用を滞りなく勤めたりした。享保十九年（一七三四）、五十九才で隠居した。元文四年（一七三九）十一月三日歿す。

医家として二代目の忠意直生は忠哲の嫡子で父隠居の享保十九年三月、家督相続し元文二年（一七三七）、藩主宗房（八代）の御供登を命ぜられ一年間御番医を勤め、翌年御供して下った。

尚、堀内家系図（堀内素堂、昭七、杏林舎）では忠意直生について延享二年（一七四五）「御中間御番医被仰付、身立

替、宝暦二年二月一日歿と記されている。

堀内文書に関連する四代と勤書

三代忠智（易庵）から四代忠明（忠意）、五代忠淳（忠竜）、六代忠寛（忠亮）までの四代が主として今回研究の対象となる堀内文書に関係のある人物である。また米沢藩の記録である先祖書には医家として二代目忠意直生まで記載があるが、忠智（易庵）以降忠寛までは勤書の内、外様法躰、外様外科に「御中之間御番医師中天明五年十月以来代々勤方書上」として記されている。次に掲げるのが勤書の内容である。

忠意直生嫡子
堀内易庵忠智
初、忠意

右者天明五年九月中迄は勤方者同十月中治憲公御側医ニ而書上申候

一　天明七年五月十八日　秋月長門守種美君御病中為御伺江戸急登被仰付同年十一月十五日　治憲公御看病御下之節御供下仕候

一　寛政四年八月廿一日迄十二箇年相勤病死仕候

易庵忠智嫡子
堀内忠意忠明
初、林哲

一　寛政四年十一月十七日遺跡相続被仰付五人御扶持五石被成下治憲公御薬御用被付候

一　同八年正月廿一日
　同公御側医被仰付相勤候
一　享和二年八月中　於克様江戸御登之節御附添登被付相勤候
一　文化八年正月六日御側医拾六箇年相勤候付御加扶持三人御扶持被成下候
一　同年閏二月廿三日病死仕候
　部屋住中勤方
一　天明七年六月中父忠智江戸留守中
　治憲公御薬御用被仰付相勤候
一　寛政元年四月中江戸御留守御番転登被仰付詰越共ニ弐箇年相勤候

忠意忠明嫡子
堀内忠竜忠寛
初、忠公

一　文化八年六月十一日遺跡相続被仰付五人御扶持五石被成下組並之御奉公仕罷在申候

三代、易庵忠智

初め父と同じ忠意と称した。天明五年（一七八五）十月、十代治憲（後の鷹山）の御側医を拝命した。この年二月、治憲は三十五才の若さで治広（九代重定の三男）に家督を譲って隠居、城本丸南の隠殿（餐霞館）に移り、政治をみるようになっていた。易庵は命により天明七年（一七八七）五月、治憲の実父である日向高鍋藩の秋月長門守種美の病気診察のため江戸に上り、九月二十五日長門守死去まで枕頭に接した。この間、時時刻刻移り変る病状其の他を国許に具に報告す

る為に早飛脚が江戸米沢間を頻回に往復したと思われる。斯る状況は今回の堀内文書の内、江戸に居る易庵に宛てた国許の侍頭、香坂右仲（註三）よりの書簡計十一通（六月二十三日より八月十二日まで）に米沢よりの指令や治憲発駕の時期の打合せなどが書かれて居り、窺い知る事が出来よう。

秋月長門守の死後、同年十一月、治憲の養父重定の病篤きの報に接し治憲に供奉し帰国した。勤書によれば寛政四年（一七九三）八月二十一日病死する迄十二年間勤めたとある。戒名、易山幽庵居士、城北館山寺（現、米沢市館山五丁目二）に葬られた。

易庵忠智には一人の姉、二人の弟があった。姉は御番医上村玄立嫡子玄拙（後の上村玄立孝斉、重定御側医）に嫁し、弟、治部蔵（註四）は草刈元民良郷の死跡を相続（宝暦七年七月）した草刈道格良興で重定公御奥御薬御用を勤めた。好生堂会頭、草刈道庵の父でもある。尚、易庵末弟万蔵は早世している。

註三、香坂右仲、昌諄、上杉藩士で「侍頭井組中」に属す。天明七年八月、治憲が実父秋月長門守看病に江戸在府中、家老代を命ぜられた。

註四、易庵弟、治部蔵は系図による名称で勤書には元民良郷嫡子、実ハ同列、堀内忠意直生次男、草刈道格良興、初、次郎蔵とある。

四代、忠意忠明（始、林哲、号、壺天）

父易庵が存命中、まだ部屋住中勤の頃、前述の天明七年、易庵が秋月長門守看病に江戸在府中、治憲の御薬御用を命ぜられ、また寛政元年（一七九〇）四月には江戸御留守御番を二年間勤めている。父死去により寛政四年（一七九三）十一月十七日、遺跡を相続し五人扶持五石、治憲の御薬御用となった。更に寛政八年（一七九七）正月二十一日、治憲御側医（外科）に任命された。また勤書にある通り享和二年（一八〇二）、相模勝熙（九代藩主重定の長男で畠山氏を継ぐ、その長男宮松は後の十二代斉定）の女於克（日野資英に嫁す）に供して江戸に出府している。

天下の名君と唱われた治憲（鷹山）は隠退後も数多くの治世、業蹟を残したが、その一つに医学が挙げられるのは周知

の事である。即ち江戸から本草学の大家、佐藤平三郎を招き薬草園を開拓したり、寛政五年十一月には自ら好生堂と名付けた医学館を創設、医師の講習に資したのであった。また侍医及び秀才の医師を当時漸く世に認められんとした蘭方医学の碩学、杉田玄白の下に学ばせたり、藩の財政窮迫を告げるにも拘らず高価なオランダ製の外科器械を購入するなどして医学振興に尽力した。忠明も鷹山の意を帯して江戸に於て杉田玄白に師事し、蘭方医術を学ぶと共に大槻玄沢、司馬江漢、森島中良など当時の蘭学者とも親交を深めるようになったのである。また江戸の痘瘡医津江柏寿（註五）とも親しかったようである。忠明が江戸留学後に米沢から上杉鷹山の病状や治療法を中心として師の杉田玄白及び大槻玄沢に意見を求めた往復書簡数通は当時の蘭学界の水準を推測するに足る資料で注目に値する事は既に片桐氏が堀内文書目録稿（医史学雑誌十六巻第三号）で述べられた通りである。この他、玄白の書簡には江戸の流行病や自宅の火事、また玄白の処世哲学などを書き記したり師弟間の暖い交流が窺い知られる。

忠明の門人には赤井専五郎宗峻、宇津木運蔵久富、斎藤万太郎祐方、寺嶋式次、小池忠伯、佐藤秀蔵林庸、小田切清左衛門秀政、佐藤長吉、脇本友右衛門、高橋忠碩、村山元孝、小池忠叔、宇津木良助、相沢惣助等がある。

門人の育成に当っては厳しい門人戒令が定められていた。その一部を掲げると

「膠婦女之疾、必待看視之人。若側無人、則不肯近其状蓐、所以避其嫌疑也。苟奉其職業之間不可有宜淫湛於女色之行、斯医家之所厳誡也。

右吾家之所厳誡也。遊於我門之徒、謹誓之於天地神明、冀莫渝斯誓矣。

寛政庚申初夏　　堀内忠明謹記　印」

また文化元年のものは

門人戒令

一、薬製之義、別而貞寧懇篤に心を用可申事。病人取扱無如在、深切に誠を尽し可申事。

一、昼夜に限らず出入賓客に対し、貴賤となく無礼是なく、質素律義に取扱、茶たはこ送迎等に至迄心を尽し可申事。
医事之暇有之時は、文学入情可為専要、諸会業広く参会可致事。
朝夕座敷之掃除心を可用事。
一、私用には仮初に出候節も家内之者へ断候而可罷出事。
一、世上之噂咄、男女みたり成儀等、心を用ひ可申事。
一、朝夕賄之事一汁一菜家内大勢に候得ば、自分自分支度可致事。
家之不為に相成候事によらず心を尽し可申候事
一、門の内外見苦敷事候はば召仕へ心を付可申候事。

文化元年八月　　壷天主人

忠明は文化八年（一八一一）正月六日、御側医を十六年間勤めた功により三人扶持加増になったが、同年閏二月二十三日病歿した。戒名は壷天院清亮忠明居士、館山寺に葬られた。

忠明には七人の子があったが、長女及び長男は先妻（寛政十二年五月十八日没）の子供で次男忠寛（素堂）以下五人が後妻、志賀氏（安政二年三月十二日没）の子供と思われる。

長女は忠明の叔父に当る次郎蔵即ち草刈道格の嫡子道庵に嫁している。長男（杏亮）と三男は早世、次男忠寛の妹三人は上から運（御側医筆頭、有壁道穏に嫁す）、駒（藩士、山崎重治妻）で末妹・梅は上村内記に嫁したが夫を失い昌寿院に仕え老女八十瀬として江戸桜田邸（上杉家上屋敷）に勤めた。

註五、津江柏寿は寛政七年十一月、痘瘡大流行の際に治憲の招きで米沢に下向、広く治療に当った。

五代、忠竜忠寛（素堂）

幼名、忠公、忠竜は字で後に忠亮と改めた。素堂と号し花仙、花僊などの名もある。香雨は俳名である。忠意忠明の次男（長男杏亮は早世）として元篭町（註六）に生れ、父死亡の文化八年（一八一一）、十一才で遺跡相続し、五人扶持五石を与えられた。その頃忠寛は藩の学館興譲館で神保綱忠（号蘭室、細井平州に師事す）に教えを受けたようである。母志賀氏は父の死後、貧しい家計の中を内職などで子供らを養育していたが、忠寛の篤学、非凡なのをみて十六才の文化十三年、藩主の侍医で江戸、長崎にて蘭方医学を学んだ高橋玄勝（桂山）の下に預け医学を修めさせた。桂山も忠寛を深く慈しみ後年、娘たか（後、貞）を娶らせている。また忠寛の江戸遊学に就て藩の有力者を動かし、藩主（十二代斉定）もまた忠寛の父祖の功を思召してか、文政三年（一八二〇）、二十才の若さで江戸詰を命じた。

江戸では桜田邸に起居し杉田立卿（玄白晩年の子）の門下として蘭学を学ぶ一方、当時医家であり且、天文学、窮理学に通じていた青池林宗や儒学者、古賀穀堂にも師事するようになった。江戸遊学、満二年の文政五年（一八二二）二月、藩命により帰国、十二代斉定の侍医を拝命した。時に忠寛は弱冠二十二才で異例の抜擢というべきか、如何に嘱望されていたかが推測出来る。因みに二十二才の若さで侍医に任命されたのは忠寛の前に嵩科松伯があるのみである。尚、同年三月十二日に七十二才で死去した鷹山は病中にも拘らず、御礼に参内した忠寛を傍に召して懇々と慢心を戒め、且つ励ましの教訓を与えた事が忠寛の著わす日渉園随筆中、「翹楚続貂」に記されている。

同年五月、藩主に陪従して再び江戸に赴いたが、元来、藩医たる者は其の家族と共に江戸に移る事を許されていたにも拘らず、母志賀氏は災の多い繁都に移り住む事を喜ばなかったので、忠寛は単身江戸に住み、妻を国許に残して母に孝養せしめた。彼自身は藩主の許しを得て毎年、帰省し母に侍養する機会を得たのであった。忠寛はまた義を重んじ、人侠厚かった事が次の挿話から想像出来る。江戸での交友、高野長英が後年（弘化二年）獄舎焼失により一旦放たれたまま米沢に潜行して秘かに忠寛を訪ねた事があった。この時、忠寛は長らく自宅の土蔵に匿い、妹運女をして誰にも知らす事なく

世話を申し付けた。而し漸く探索の手が延び自宅にも逗留させる事が許されぬ状態となったので、長英を容易に手が入り難い三里程離れた天領地内で医業を開く門人、高橋家膳の下に落したという事である。

忠寛が江戸に出て親交のあった人々はいづれも当時、知名の学者達であった。主なものを挙げると前述の杉田立卿、青池林宗、古賀穀堂の恩師を始めとして坪井信道、高野長英、小関三英、戸塚静海、伊東玄朴、箕作阮甫、竹内玄洞、林洞海、大槻盤渓、大槻俊斎、鈴木春山、織田貫斎、川本幸民、三宅艮斎、桂川甫周、青木周弼、青木研造、桑田立斎、緒方洪庵、安井息軒、佐久間象山、野田笛浦、広瀬旭荘、塩谷宕陰等がある。これらの人々の文書の内、焼失を免れたものが現在、堀内文書として整理、解読されつつあり、江戸の蘭学界を観察する上に役立っている。忠寛は此等の人々との交流により医学の奥義を究めたのみならず、見聞を弘め世界の大勢を認識するようになったのである。

忠寛の名声が高まると共に彼を慕って教えを仰ぐもの百余名に及び、後世知名の学者が多く輩出した。この内、坪井信友は誠軒坪井信道の子で信道は忠寛と最も親しかったので我が子を忠寛に託し、忠寛もまた嫡子忠廸（忠淳）を信道に託したのである。

忠寛の著書は非常に多かったというが多くは散逸してしまったのは遺憾である。また短命のため出版にまで及んだ書も極く少い。特筆すべきは天保十四年（一八四三）出版の「幼々精義」七巻でフーフェランド（扶歇蘭度）の著書をオランダのサクセ（薩窟設）が蘭訳したものを和訳したもので我国で初めての西洋小児科医書として意味がある（註七）。この他、保嬰輯要、保嬰瑣言（嘉永五年）、幼々一言（文政十一年）、骨譜（文政十一年）などの著書がある。

天保十年（一八三九）二月二日、斉定死去により夫人昌寿院の御側医に転じた忠寛は嘉永六年夏、病み帰養を命じられ静養したが、翌嘉永七年（一八五四）三月十八日に没した。時に五十四才、花仙院殿蘊度素堂居士が戒名で館山寺に葬られた。尚、昭和三年十一月、在世中、西洋医学の開発に尽力した功により従五位を追贈されている。

忠寛の妻貞はその後、嫡子忠寛にも先立たれたが八十四才の高令を保って明治二十三年十二月三十一日、次男亮之輔の

任地豊橋で病没した（真竜院珍貞妙宝大姉）。忠寛には二男二女があり嫡子忠淳、次男忠世（亮之輔）、長女綾（藩士上村儀一妻）、次女牧（藩士大竹某妻）である。

註六、堀内家は藩政後、東京に移るまで米沢・元籠町に在った。初まりは明かでないが弘化三年（一八四六）十一月の上杉御城下見取図には元籠町に外様法体、堀内忠良と記されている。現在の米沢市中央二丁目四番地附近。

註七、幼々精義は天保十四年刊の他、弘化二年版のものもある。

六代、忠亮忠淳

忠寛嫡子忠淳は天保二年（一八三一）生れ、幼名忠廸、字は忠亮、適斎と号した。前に記したように父の親友、坪井信道の下に預けられ、その教育を受けた。坪井信道より忠寛に宛てた書状（堀内文書第一〇八号）に信道が、忠寛の息子なので来客の玄関取次ぎを免除したり食事も台所で世話しようとした処、万事、塾則通りに一般の塾生同様に扱うように本人からたっての望みなので意の如くした由と記した文がある。儒学も父の友人、広瀬旭荘について学び詩文をよくした。著書として医家必携（安政四年）、扶歇蘭度氏小児病内科篇などがあり、特に医家必携は諸種薬物の効用、用量、処方例などを書いたもので藪医必携と俗称され重宝がられたという。不幸にも短命で元治元年（一八六四）六月二十九日、三十四才で病没した。戒名、賢光院学雄適斎居士。妻孝との間に一男四女があり、内三女が早世、残る長女くには大槻徳寿に嫁し、嫡子勝次郎（亮一）は幼少のため、忠寛弟忠世（亮之輔）が順養子となり慶応元年八月二十八日遺跡を相続した。

藩政以後

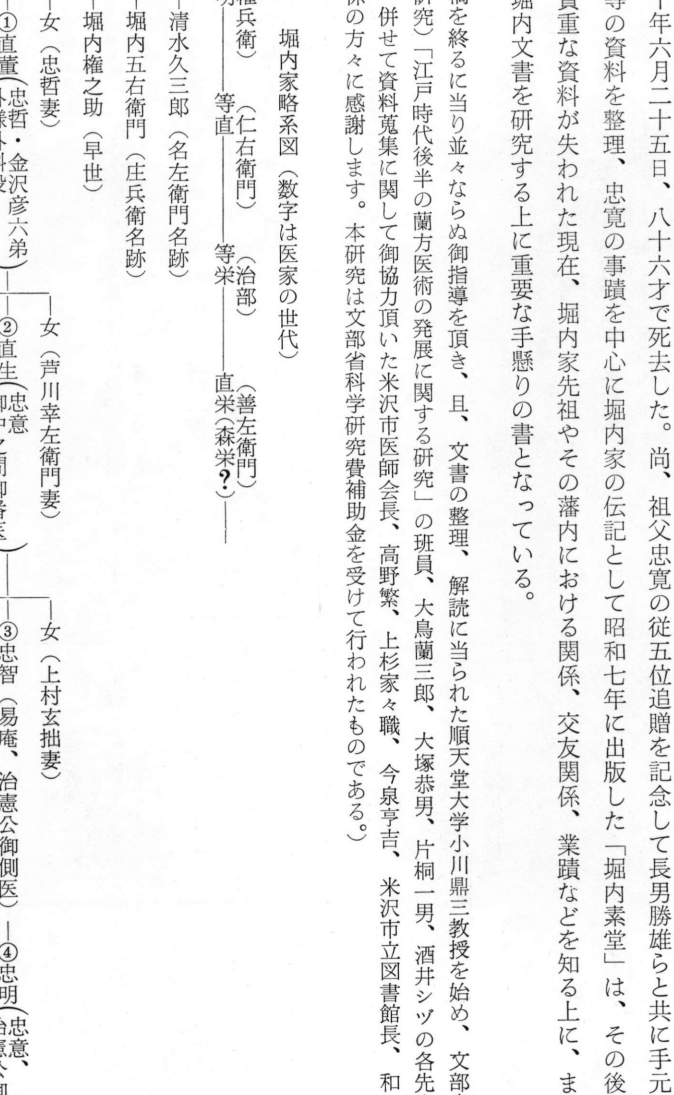
六代忠寛以後、即ち藩政以降の事は堀内文書とは直接の関連はないが附記すると、忠淳弟亮之輔は明治初年、東京大学東校を経て陸軍軍医となり西南の役などに出征、明治二十年、陸軍一等軍医となり明治二十九年三月十一日病没した。

忠淳の嫡子、分家亮一は幼名勝次郎、万延元年十月十日、米沢元篭町に生れ、二才で母、四才で父忠寛に先立たれた為、祖母貞の厳格な養育を受けて成長した。苦学しつつ宮城県立中学校を経て東京帝国大学医科大学別科を明治二十年卒

業、翌年二月開業免状を交付され、医科大学第二医院介補として修行後、二十二年十二月、東京府下千住町に開業、藩の医学校の名に因み好生堂医院と称した。晩年は医業のかたわら幼稚園、女学校、中学校設立など教育方面にも尽力し昭和二十年六月二十五日、八十六才で死去した。尚、祖父忠寛の従五位追贈を記念して長男勝雄らと共に手元に残る文書、遺稿等の資料を整理、忠寛の事蹟を中心に堀内家の伝記として昭和七年に出版した「堀内素堂」は、その後戦災により多くの貴重な資料が失われた現在、堀内家先祖やその藩内における関係、交友関係、業蹟などを知る上に、また今回、整理中の堀内文書を研究する上に重要な手懸りの書となっている。

（稿を終るに当り並々ならぬ御指導を頂き、且、文書の整理、解読に当られた順天堂大学小川鼎三教授を始め、文部省科学研究費（綜合研究）「江戸時代後半の蘭方医術の発展に関する研究」の班員、大鳥蘭三郎、大塚恭男、片桐一男、酒井シヅの各先生に謝意を表します。併せて資料蒐集に関して御協力頂いた米沢市医師会長、高野繁、上杉家々職、今泉亨吉、米沢市立図書館長、和田文益の各氏及び関係の方々に感謝します。本研究は文部省科学研究費補助金を受けて行われたものである。）

堀内家略系図（数字は医家の世代）



- 女（草刈道庵妻）
- 杏亮（早世）
- ⑤忠寛（忠龍、素堂、斉定公御側医）
  - 男（早世）
  - 女運（有壁道穏妻）
  - 女駒（山崎重治妻）
  - 女梅（上村内記妻、後、老女、八十瀬）
  - 亮（済生学舎に学び開業、大正七年十二月十五日没）
- ⑥忠淳（忠亮、適斎）
  - 忠世（亮之輔、嫡子亮一、幼年のため忠淳順養子となる）
    - 女綾（上村儀一妻）
    - 女牧（大竹某妻）
  - 女くに（大槻徳寿妻）
  - 女（早世）
  - 女（早世）
  - 女（早世）
  - ⑦亮一（勝次郎、明治二十一年東大別科卒、開業、昭和二十年六月二十五日没）
    - 女貞（享年十五）
    - 女敬（享年二十）
    - 亮三（早世）
    - ⑧勝雄（東大医学部大正十四年卒、開業、昭和四十四年八月十五日没）
      - 忠雄（慶大医学部・昭和三年卒、開業、昭和四十三年一月十八日没）
      - 女進（医師、中尾直妻）
      - 信雄（享年十七）
      - 女キヨ（早世）
      - 正明
      - 武
      - ⑨淳一（昭和三十年・日本医大卒、東京医歯大講師）
        - 好子（医師川崎昌妻）

参考資料

- 堀内亮一：「堀内素堂」昭和七年、杏林舎
- 米沢大年表　昭和十九年、米沢市役所
- 米沢医界のあゆみ、昭和三十八年、米沢市医師会
- 米沢藩先祖書及び勤書
- 片桐一男　堀内文書の研究・日本医史学雑誌十六巻四号（昭四五）同(二)　十七巻二号（昭四六）、同(三)　十六巻四号（昭四六）

日本医史学雑誌・第十八巻
第一号・昭和四十七年三月　昭和四十七年二月一日受付

▽▽特集：堀内文書の研究

堀内文書よりみた江戸時代後期の医療（第一報）

大塚恭男

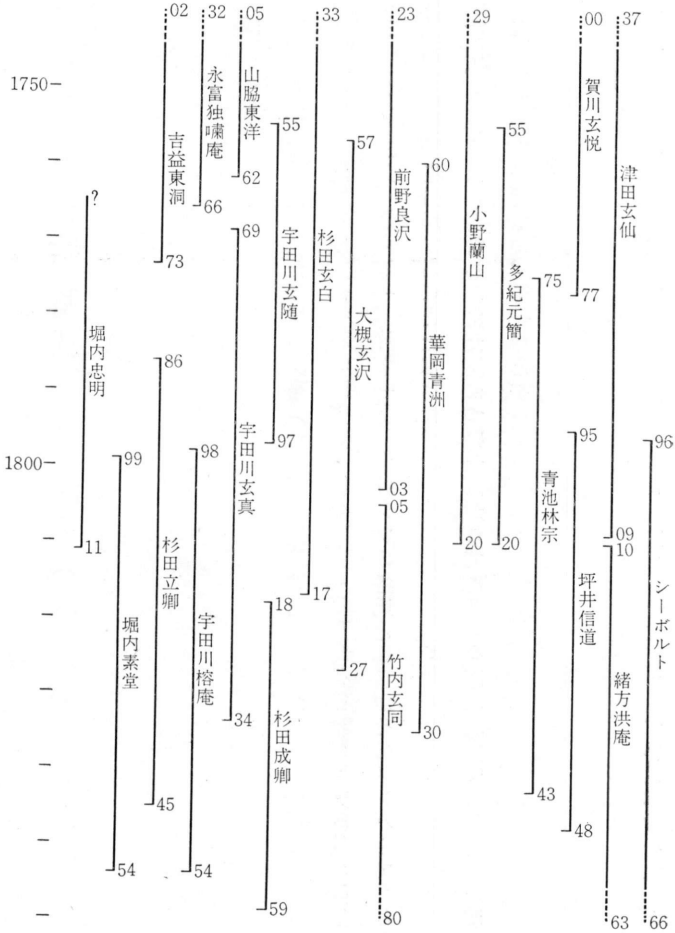
はじめに

米沢の蘭医の名家、堀内家に伝えられた多数の文書（以下、堀内文書と略称）が当主淳一氏の御好意で研究の便に供せられることとなり、昭和四五・四六年度文部省科学研究費・綜合研究「江戸時代後半の蘭方医術の発展に関する研究」が発足した。小川鼎三、大鳥蘭三郎、堀内淳一、片桐一男、酒井シヅの各氏と筆者がそのメンバーであるが、筆者は主として、そのうちの薬物治療の部分を分担することとなった。

研究は、現在進行中、というよりもむしろまだ緒についたばかりである。今回は堀内家四代忠意忠明（以下堀内忠明）関係の資料の一部について考察を行ない、第一報とする。

堀内忠明とその時代

忠明の生年は詳かでない。その生涯については堀内亮一編『堀内素堂』に記されているが、それによると、天明七年（一七八七）父易庵の江戸留守居中、上杉治憲公御薬御用を命ぜられたとあるから、少くともその年には成人に達していたであろうと思われる。寛政元年（一七八九）には江戸御留守番を仰付られ、二年間勤めた。寛政四年（一七九二）に易


1750
1800
堀内忠明
?
11
堀内素堂
99
54
吉益東洞
02
73
杉田立卿
86
45
永富独嘯庵
32
66
宇田川榕庵
98
54
山脇東洋
05
62
宇田川玄随
55
97
宇田川玄真
69
34
杉田玄白
33
17
杉田成卿
18
59
大槻玄沢
57
27
前野良沢
23
03
竹内玄同
05
80
華岡青洲
60
30
小野蘭山
29
20
多紀元簡
55
20
青池林宗
75
43
賀川玄悦
00
77
坪井信道
95
48
津田玄仙
37
09
緒方洪庵
10
63
シーボルト
96
66

第 1 図

庵が没し、家督を相続し、治憲公御薬御用となり、同八年（一七九六）には公の御側外科医となる。没年は文化八年（一八一一）である。

別掲した図に示したように、忠明の時代は蘭学の勃興期にあたる。この点、蘭学がすでに強固な地歩を固めた後に成人期を迎えた素堂とはいろいろな点で異っている。

忠明の「門人戒令」

忠明が寛政十二年（一八〇〇）につくった「門人戒令」がのこっている。興味あることには、この戒令は吉益東洞の天命説の影響を強く受けている。天命説は東洞の医論集『医断』の中にみえる。

忠明の「門人戒令」は云う。

「夫れ死生命あり。もとより司命の及ぶところにあらざるなり。然りといえども、その疾みて、起つべくして起ち得ざるもの往々これあり（当然治るべき病気で治らずに死ぬことがしばしばある）。けだし、人事を尽くしてその起つべきをして必ず起つを得せしむるものはすなわち医の所業なり。その仁術を称うる者、あに虚ならんや。いやしくもその後を志す者、嗚乎勉めざらんや。もしあるいは其の方剤を誤らば則ちその疾い癒えざるのみ。あるいはその未だ必しも死すべからざる者をして、その疾に死せずして、その薬に死せしむるに至る。嗚乎恐れざらんや。後略（原漢文）」

東洞の「死生」（『医断』中）は云う。

「死生は命なり。天より之を作す。それ唯天よりこれを作す。医いずくんぞ能く之を死生せんや。故に仁も（命を）延すこと能わず。勇も奪うこと能わず。智も測ること能わず。医も救うこと能わず。ただ疾病に因りて死を致すは命に非ざる也。毒薬の能く治する所のみ。けだし死生は医のあずからざる所也。疾病は医のまさに治すべき所也。故に（東洞）先生曰く（『医断』は門人の編になるためかく云う）。人事を尽して天命を待つと。いやしくも人事を尽さずして、あに命に委

ぬることを得んや。是の故に術の明らかならず、方のあたらずして死をいたす者は命にあらざるなり。後略。（原漢文）」

この両者をくらべれば、その影響は歴然としている。天命説は当時の医学界を賛否両論に二分したほどの反響をよんだ学説であった。いまその詳説はさけるが、一言にして云えば、これは疾病の予後を云々することを否定する考えである。東洞に云わせれば「予後とは、医師があらかじめその責任を回避する方弁」であった。たしかに、そういう一面は否定できない。一方、反対派に云わせれば、「天命説こそ過失によって人を死なせた時の逃口上」なのであった。これにも無論一理はある。

しかし、今は天命説を批判するのが目的ではないので、ここでは、単に堀内忠明がその医療の大方針として東洞の医説を範にとった事実を指摘するにとどめておきたい。

ただし、東洞と忠明の共通点はあくまでも医の目的に関してであって、その方法に関しては、二人はそれぞれ別の道を歩んだのであった。周知のように、東洞は張仲景の古方を最も尊崇し、古方派の総帥として活躍したのであり、忠明は漢方に理解をもちつつも治療医学の新しい可能性を求めて蘭学に近づいたのである。

杉田玄白との往復書簡

忠明と杉田玄白との間に交わされた往復書簡が二通ある。これらは忠明が質問事項を記した書簡を玄白あてに発送し、同じ書簡の行間に玄白が自らの所見を朱で記して返送する、という形式である。

その一つは十月廿三日付の忠明発、十二月朔日付の玄白発という書簡である。ここではこの書簡中の一部の例について紹介する。

（1）テレメンテーナ

諸種の松属の植物の樹幹の皮部を切傷して得た精油樹脂で Terebinthina の名で広く使われた蘭方の薬である。この書

翰は、テレメンテーナの輸入品が品薄であるところから、その代替品を国産植物に求めることをめぐっての話である。

この点については、八月廿八日付の杉田玄白より忠明にあてた手紙が別にあり、さらにこれに先立って忠明から玄白にあてた手紙があることが推定される。しかし、忠明から玄白にあてた書簡は残っていない。八月廿八日付の書簡の中で、玄白は、本草家土岐新甫*が奥羽地方へ採薬行に旅立ったことを述べ、新甫の人物を忠明に紹介し、接触を持つようにすすめている。そしてこれに関聯して、蝦夷地でトド、米沢辺でツガと呼ばれる杜松に似た植物の樹脂がテレメンテーナの代用となり得ることを述べ、その利尿作用について示唆している。いまとりあげている往復書簡中で忠明は、テレメンテーナは香木で深山に多生しており、いくらでも採取可能なこと、またこれから得た薬を永病の患者に試験的に使ったところ尿利がついたことを玄白に報告している。また秋田に居る土岐新甫についてもふれ、来春米沢へ来ると云ってきたので楽しみにしている旨を書き送っている。玄白は忠明の尿利がついたという治験例に対して、「面白い」と感想を述べである。

（2）胸部腫瘍の一例

五七才女子。以前から肘の所に腫瘍があり、漸時進行中だったが、このたび胸肋部に石のように硬い腫瘍ができ、強い痛みを訴えた。患者には梅毒の既往がある。そこで白効散、大熱牡皮湯を服用させ、乳岩膏を外用したところ痛みは止ったが、全身に細い発疹を生じた。また潰瘍部は肉骨が露出し、鎖骨及び左右乳房中に硬結がある。この例の治療法についての意見を求めている。これに対して玄白は、梅毒からカンケルになることのあることを指摘し、この事を考慮した治療をするようすすめている。

（3）乳房腫瘍の一例

妊娠中の婦人の右の乳房が腫れたが、表面の皮膚の色は変らず、中には大小合わせて十ケほどの硬結を触れる。左の乳房に比べると右の方が約五倍も大きく、硬結に触れると陰痛がある。うなじや背がひどくこっている。こういう「正体不明」の病気についての治療法教示方を求めている。これに対して玄白は、その婦人が分娩をすませたら自然に治るので、

それまでは治りにくい、と述べている。

大槻玄沢との往復書簡

杉田玄白に対するそれと全く同じ形式の往復書簡は大槻玄沢との間にも交わされた。この方は数が多く、全部で六通を数える。

これらのうちの一通（一部欠落のため発信日不詳）について紹介する。

瘤症の治験

二十才の瘤症の患者である。性別はあげられていない。去年麻疹をしてからのちに発症し、上を見ては倒れ、足の指先に何かさわったといっては倒れ、人とちょっと長話をすると倒れるという状態であった。この人は気分がふさいでくると手足がふるえてきたが、その都度虫下しをかけてみると、草蘚の毛のような虫がたくさん下った。そして此の虫がなくなってしまうと諸症は軽減し、たまってくると増悪したが、結局、虫を根絶やしにすることができずに、その後八九日経過した。ほかによい考えもないので沈香天麻湯を『療治茶談』にある通りに使うと非常によくなり、従来冷えていた足も、冷い所に居ても温くなり、夜も熟睡でき、倒れる回数も七八割程度は減った（つまり前の20～30％位になった）。しかし虫を根絶できなかったため全快には至らなかった。先日心痛（胸腹部の痛み）がおこり、呕吐したので甘草粉蜜湯を兼用したところ痛みは忽ち止まったが、その後例の草蘚の毛に似た虫がたくさんでた。この虫を尽くす方法がもしあったら是非御教示願いたい、というものである。

これに対して玄沢は「別紙に認む」と書いてある。問題が問題なので、行間に書き入れをするだけでは不十分とみて、別の書簡で解答したものであろう。現在までのところ、該当する内容の玄沢の書簡には接していない。

ここでやや長文を引用したのは、忠明の臨床家としての態度、また、その漢方、蘭方に対する姿勢がよくしめされてい

ると思ったからである。

文中の沈香天麻湯は李朱学派一方の雄である李東垣の門人である羅天益の著わした『衛生宝鑑』に初めて記された薬方である。従って日本の系統としては、後世方に属する薬方の一つである。

『療治茶談』は白河の人、津田玄仙の著書である。極めて実際に即した書物で、詳しい臨床観察にうらづけられており、オリジナルも多い。問題の沈香天麻湯については、その第二巻中に「沈降天麻湯問証祕事」として記されている。

また甘草粉蜜湯は張仲景の『金匱要略』中にでている薬方である。

杉田玄白の一書簡（八月廿八日付）

この書簡は上杉鷹山侯の膝関節の病気（鶴膝風）の治療に関して、忠明が助言を求めたのに対しての玄白の解答である。病気は膝関節嚢内に水がたまり、痛みを訴える、というもので、一進一退しつつ慢性に経過していた。一度カンフルブラントエンバシリコン類の熱薬の外用により軽快していたが、その後再発し、温泉に行ったり、桂附（桂枝・附子）の入った薬の服用によってほぼ全快に達したが、更に再発の可能性もあり、そうした時の手当の方法を求められたものである。玄白は温める薬として、カルクワーテル加石鹸などはどうであろうかと述べている。しかしながら、「愚老の義度々拝診候ても真実之所は相分らず候義、殊に御容体書ばかりにては猶更のことに御座候。さりながら御尋ねにあずかり拙案申し述べざるもいかが故、御懇意に任せ申し入れ候」と記しており、書簡での診断の難しさを訴えている。更に、「君侯御容体ならびに老侯御病状皆常に主張致し候和蘭医案に候間、御同役中初め御耳馴ならざる事のみ多き事と存じ奉り候」と記しているところは当代の蘭医学を率いる者としての玄白の自覚に充ちた表白とうけとられ、また、その苦労多い立場をもうら書きしている。

カンフルブラントエンバシリコンは Campher brandwijn basilicon で、カンフルブラントエンについては宇田川榛

斎、榕庵の『遠西医方名物考』巻七に羯布羅精として製法、主治が記されている。「外敷シテ滲透開達シ凝血ヲ疏解シ腐敗ヲ遏メ弛弱ヲ強固ス。傷冷毒痛、打撲傷、閃挫、転筋、麻痺ヲ治ス」とある。バシリコンについては、同書巻二に抜実栗格謨膏として製法、主治が述べられている。古来、蘭方の最も基方的な薬物の一つとして重用されたものである。ここでは、この両者を混ぜ合わせたものを外用に供したのである。

カルクワートルは石灰水である。これについては前掲の『遠西医方名物考』巻三十に詳説がある。また石鹸に関しても同書同巻中に述べられている。

小　括

ここでは、忠明の臨床医としての一面を画くように努めた。とりあげた資料は少く、今後の追加によってより完全を期したいが、それでも、なお何ほどがは人間忠明、医師忠明を写し得ているように思う。また杉田玄白、大槻玄沢との往復書簡（ここでは玄沢の解答には接しなかったが）という形式も面白く、またこれらによって今回は特に玄白との交流が述べられ、玄白その人の人物なり思想なりを知る上にも貴重な示唆が与えられた。

はじめに述べたように、忠明の時代は蘭学の勃興期であり、蘭学者といえども、治療医学としての漢方については深い造詣と十分な理解をもっていた。このことは一八世紀蘭学が一九世紀蘭学と相異する最大の点である。宇田川玄随の『西説内科選要』初版（一七九三年刊）に多紀元簡が序を寄せた時代だったのである。

しかし、また蘭学の胎動も強く感じられる。嘗て中国産生薬の代替薬を日本産のものに求めたように、蘭方薬の代替品を探す試みが蘭方医と本草家の提携によって行なわれた。ここではテレメンテーナに関するその試みが記されているが、堀内文書関係では、なお依蘭苔（Cetraria islandica）の代替品をめぐる話が忠明の子、素堂にある。これについては他日記すこととする。

また治療に関しては、漢方で及ばぬところを蘭方に期待している様子が、この書簡の中にはっきりとうかがわれる。そして、杉田玄白ら蘭方の指導的立場にある人々が、強い自覚をもって蘭方の興隆に尽力した姿勢がうかがわれる。こうした努力を土壌として一九世紀蘭学の繁栄をみたのであろうと思う。

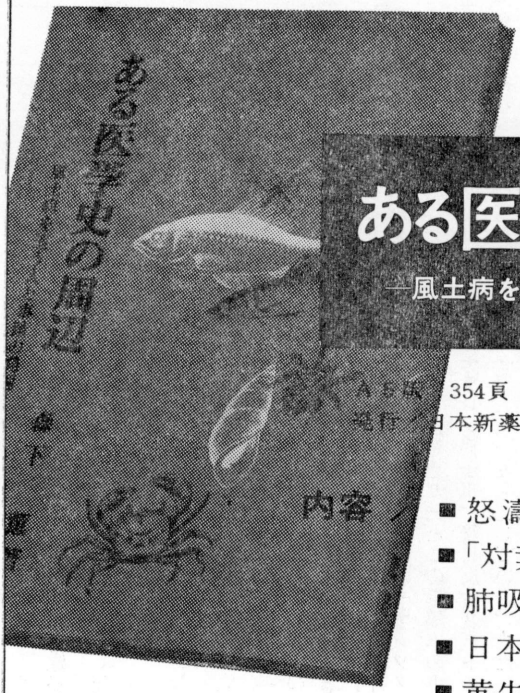
＊ 土岐新甫　八月廿八日付の杉田玄白の書簡には土岐俊甫とみえる。また、これに対する返書の意味もあると思われる十月廿三日付けの忠明の書簡には土岐紅甫と読める。またこの書簡の文面からすると土岐氏から忠明あての書簡がその間に忠明のもとにとどいている。というのは、忠明が土岐氏の署名をみた上で十月廿三日付書簡に紅甫と認めたということである。また、九月廿二日付けの津江柏寿の忠明あて書簡にも土岐紅甫とある。白井光太郎の『博物学年表』の寛政十一年条に土岐新甫を記す。同年渋江長伯に随行して蝦夷地採薬のことにあたったという。国会図書館伊藤文庫に水谷豊文自筆の『鉤致堂随筆』という稿本がある。この旧蔵者伊藤圭介は「錦巣十九才ノ時（文政壬申――大塚曰該当年なし）京師ニ遊学ス。同窓ノ一書生越後ノ産腊葉本数冊ヲ携帯セリ鑒定ヲ乞ヘリ。中ニハ奇品モアレバ京ヨリ尾ニ送リ水谷先生ニモ見セリ。翁一覧シソノ奇遇ヲ驚喜セリ。是往年鑒定セシ土岐新甫ノ腊葉ナリ。再ヒ之ヲ抄セラレタリ。即チ此冊子ニシテソノ自筆ナリ」とこの手稿本の由来を述べている。また圭介は「此草稿写本ハ美濃赤坂駅ノ土岐新甫ノ説ニシテ水谷助六翁ノ筆記セラレシ冊子也。後日反古変紙トナラン様ヲ恐レバ表紙ヲ付ケ製本スベキ事也。新甫ハ海内東西諸国ニ採草シ北海道迄モ渡リタリ。一奇人也」とも記している。また『蝦夷草木図』（栗本昌蔵、坂丹邱考証、栗本丹洲奥書、国会図書館蔵）のクイ条にも「嘗テ土岐新甫ナルモノ彼地随営ノ医タリ。蘭山先生及ヒ渋江西園ニ随テ学フ。諸国ヲ巡テ薬ヲ採ルニ夷地海岸ノ草木ハ富士五合辺ニアルモノナリ」とある。以上のことより、文書中に俊甫、あるいは紅甫とあるものを新甫と同一人物と一応推定し、後考を俟つこととする。

文　献

(一) 堀内亮一編：堀内素堂
(二) 鶴沖元逸著・中西惟仲校補：医断
(三) 津田玄仙著：療治茶談
(四) 宇田川榛斎著・同榕庵校補：遠西医方名物考

（本研究は昭和四五・四六年度文部省科学研究費の助成によった。）

＊新刊書案内



阪大名誉教授
森下　薫　著

ある医学史の周辺

―風土病を追う人と事蹟の発掘―

A5版　354頁　定価／1,000円（送料140円）
発行／日本新薬株式会社

内容

- 怒濤の中の奇病を追う人
- 「対葉館」二階座敷の研究室
- 肺吸虫の秘密をあばく
- 日本に於ける肝吸虫の発見
- 黄牛病の謎
- アクラの野口博士
- ロスのマラリア研究を偲ぶ
- ズビニの鉤虫発見の跡
- 杉山なか女の解剖願書
- ジョセフ・メイステルの生涯
- 日本寄生虫学の夜明けとベルツ博士など16編集録

☞ **ご購入方法**／一般書店及び医学専門書店へお申し込み下さい。
直送ご希望の方は送料を添えて下記へご送金下さい。

〈162〉東京都新宿区市ケ谷佐土原町２の１　保健会館内　予防医学事業中央会
（振替　東京38038）

〈550〉大阪市西区北堀江通５の59　大阪予防医学協会　（振替　大阪64926）

〈601〉京都市南区西大路八条下ル　日本新薬株式会社　（振替　京都3231）

日本医史学雑誌・第十八巻
第一号・昭和四十七年三月　昭和四十七年二月一日受付

▽▽特集：堀内文書の研究

堀内文書関係年譜

酒井シヅ

はじめに

米沢藩の藩医であった堀内家に伝わる文書の調査にあたり、これに関係ある事項を年表にまとめた。資料は時代により、あるいは人により多寡がある。しかし、ここではこれを調整せず採用したため、年表に粗密を生じたが、基礎資料として敢て発表する。

堀内家の系図は慶長年間から判明しているが、ここでは武家より医家に転じた代からのものを採り、終りは堀内家最後の藩医堀内忠淳の歿した後、弟亮之助の家督した年（慶応元年）にとどめた。

堀内家の当主の名前は初めの呼び名と名乗りや襲名した名前があり、混乱するため、ここでは最も区別しやすい名前をとった。

参照資料は終りは挙げたが、堀内文書によるものは各項目の下に分類番号を付けた。

尚、この年表を作るにあたって、小川鼎三、大鳥蘭三郎、大塚恭男、片桐一男、堀内淳一諸先生および米沢在住の今泉亨吉、和田文益、高野繁諸氏に負うところの多かったことを感謝する。

（本研究は昭和45・46年の文部省科学研究費の助成によった）

年　譜

正徳二年（一七一二）
　堀内家の善左エ門の代、実子早世により、元御細工頭金沢彦六の弟が家督相続。堀内直董忠哲、俗名仁右エ門と称し、組外仲間として勤める。[1)]
正徳四年（一七一四）
　直董、若年より飯田忠林につき、蘭方外科を十二、三年修行したことを以って、医家に転ずることを願い出て許される。飯田忠林は幕府医官杉本忠恵法眼につき外科を学ぶ。[1)]
享保元年（一七一六）
　二月十五日　直董、剃髪の上、初めて江戸にお供登。翌年、米沢に帰る。[1)]
享保五年（一七二〇）
　七月、上杉重定生れる。幼名直千代。
享保七年（一七二二）
　正月二十二日、善左エ門直采（直董の養父）の妻歿す。
　五月一日　藩主上杉吉憲、米沢にて歿。
　六月四日　上杉宗憲家督相続。江戸への御発駕に直董、お供して江戸に登る。宗憲、江戸御定府に付、直董、一年交代を命ぜられ、翌年、米沢に帰る。
享保九年（一七二四）
　二月十三日　直董の娘死す。良紅童女。
享保十年（一七二五）
　五月四日　御国御目附として本多兵部、鳥井久太夫両名米沢に下るに付、直董、米沢逗留中の本多兵部付に仰付られる。
　七月、鳥井久太夫付の桑嶋忠仙病死に付、直董、本多、鳥井の両人の逗留中、一人で病用を勤る。
　十一月四日　直董、本多、鳥井両人帰府にお供して江戸に。同二十八日米沢に帰る。
享保十二年（一七二七）
　直董、江戸にお供登。翌年、米沢への帰路、日光参詣にお供、五月米沢に帰る。
享保十七年（一七三二）
　四月、直董、御留学御番転を命ぜられ、江戸に登り、一年勤める。この間、御前様の瘡腫など治療する。
享保十八年（一七三三）
　正月、米沢藩に御堀浚御手伝御普請を命ぜられた為、直董、四月の米沢へ帰ることを差留められ、場所勤を仰付けられ、十月までそこに移り勤める。
享保十九年（一七三四）
　三月、直董、五十九才を以て隠居を願い、嫡子直生忠意に家督を譲る。直生29才。
　五月、藩主上杉宗憲歿。宗房、家督す。
元文二年（一七三七）
　直生、宗房について江戸にお供登。一年、御番転を勤め、

翌年、お供下。
元文四年（一七三九）
十一月三日　堀内直董忠哲歿。享年64才。関忠哲玄居士。
延享二年（一七四五）
直生忠意、御中の間御番医となる。[3]
延享三年（一七四六）
八月十二日　藩主宗房歿。
宝暦二年（一七五二）
二月一日　堀内直生忠意歿。享年47才。意徹忠祖居士。
宝暦七年（一七五七）
堀内易庵（直生の嫡子）の弟、御中間御番医師（鍼医）草刈元民の跡を継ぎ、草刈道格良典と称す。
宝暦八年（一七五八）
十月二十三日　忠哲直董の妻歿す。祖室悉焼大姉。
宝暦十三年（一七六三）
二月八日　米沢藩江戸家老竹俣当綱ら、米沢の二の丸会談所にて、悪評高き郡代森平右エ門を誅殺。
明治一年（一七六四）
十月十六日　松原で解剖、主として骨関節を観察し、「手足骨節之図」を記す（二七七号）
明和四年（一七六七）
藩主重定隠居、治憲家督す。
安永七年（一七七六）
草刈道格、江戸へお供登。[1]
安永八年（一七七九）
八月五日　明和元年の解剖に続き、また解剖が行われ、この時は内臓も調べる（二七七号）。
安永九年（一七八〇）
この頃、堀内直生忠意の嫡子易庵忠知（初め忠意と称す）、外様法体に組入られる。
天明三年（一七八三）
米沢凶荒。領民すべてに粥、糅を用いさせる。六老志賀八右エ門、降旗左司馬は越後、酒田などへ米の購入に遣わされる。[2]
天明四年（一七八四）
米沢藩領内に疫病流行。[4]
天明五年（一七八五）
二月六日、治憲隠居、九月に三の丸御殿（餐霞館）に移る。[2]
二月七日、治広、家督となり、治憲を中殿様、重定を大殿様、治憲の実子顕孝を若殿様と呼ぶ。[2]
易庵、この時すでに治憲の御側医として仕えている。[4]
天明六年（一七八六）
長雨による凶作。この年も粥糅を用いるように命ぜられる。[2]
十二月、赤井専五郎宗峻、堀内の門に入る（門生譜第一

人目)。

天明七年(一七八七)

五月十八日、易庵、治憲の実父秋月長門守種美の病気伺いに江戸に遣わされる[4]。

六月、易庵の嫡子忠意忠明(林哲、号は壷天)、父の留守中、治憲の御薬用を勤める。

六月二十三日、治憲、格外の大倹約を命じる[2]。

八月十七日、治憲、秋月長門守の看病に江戸に出立。香坂右仲、家老代となる。

九月二十五日、秋月長門守歿。

十月十七日、治憲、養父重定の重体の報せに急いで米沢に戻る。易庵、供をして米沢へ。

天明八年(一七八八)

八月六日、易庵の娘死す。卯月禅童女。

寛政一年(一七八九)

四月、林哲、江戸詰となる。この時、大槻玄沢の芝蘭堂に入門。門人帳の三人目にその名を見る。林哲は二年江戸で過し、米沢に戻る。この間、杉田玄白にもついたらしい。

同月、内村洞翁(米沢藩医、初め覚端)、杉田玄白に入門。寄宿修業の上、翌年米沢に戻る。

七月、中津川小屋村疫病流行。

宇津木運蔵、堀内の門に入る(二七一号)。

寛政二年(一七九〇)

五月十八日、米沢大雨洪水[2]。

七月、疫病大流行。貧者に薬代が施される[2]。

九月、斎藤万太郎祐方、林哲に入門(二七一号)。

寛政三年(一七九一)

五月、治広、政費大節減を断行。諸役人の減省、休職を行う[2]。

九月二十六日、易庵の室歿。天相妙然大姉。

寛政四年(一七九二)

五月、寺嶋式次、小池忠伯二名林哲の門に入る(二七一号。

七月、下長井栃窪村疫病流行。

八月十七日、江戸本草家佐藤平三郎を米沢に招く。翌年十月帰府。この間、藩医や修行中のものに本草綱目などの講義を行う。これがのちに発展して、好生堂となる。

八月廿一日、易庵、瘟疫にて卒す。舘山寺に葬る。易山幽庵居士[3]。

十一月、林哲、家督相続。治憲の御薬御用に命ぜられる(五石五人扶持[4])。

寛政五年(一七九三)

米沢国産所内に医学所を設け、好生堂と称す。初代会頭平田道宣。

十月二十五日、杉田玄白宅焼失(二八号)。

この頃、林哲、産科にも通暁していた(三三号)。

桑嶋雲白(米沢藩医、初め貞白)、杉田玄白に入門。[4]

寛政六年(一七九四)

一月、顕孝(治憲実子)、江戸白銀邸で疱瘡にて歿。[4]

二月、治広、疱瘡に罹る。

寛政七年(一七九五)

九月、米沢、痘瘡大流行。

十月、林哲、子供を亡す。霊光童子。

十一月、痘瘡専門医津江栢寿、江戸より招かれ、藩医に教授し、治療を行う。この時、津江栢寿の編になる「疱瘡治療書」を板行、領内に頒布。[2]

寛政八年(一七九六)

一月二十一日、林哲、治憲の御側医となる。[4]

二月、飯田忠林正倫、桂川甫園(周か)に入門。[4]

寛政九年(一七九二)

四月、佐藤秀蔵林庸、林哲の門に入る(二七一号)。

十一月二十二日、杉田玄白宅類焼。[10]

この年、全国各地に痘瘡流行。林哲の子供も罹患(二〇号)。

治広、米沢藩士の屋敷に薬草黄連の栽培を推奨。[2]

寛政十年(一七九八)

大殿様重定歿。享年79才。

寛政十一年(一七九九)

六月、荻金山に疫病流行。[4]

七月、諸士御扶持米、一人扶持一ケ月分一斗三升と定める。[2]

九月、佐藤長吉、林哲の門に入る(二七一号)。

寛政十二年(一八〇〇)

林哲、門人のため「誓誡」を作る(二七〇号)。

四月、米沢藩、合薬売買取締の令がでる。以後、他国の合薬の購入が禁止され、売買には看板、薬袋に「御免」と印すことを必要とする。[5]

五月十八日、林哲の妻歿す。蓮香妙華大姉。

享和元年(一八〇一)

林哲の嫡子、忠竜忠覚(初め忠公と称し、号が素堂、諱は忠寛、字は君栗、忠竜を後に故あり忠亮と称す)、米沢元篭町に生れる。

二月、高橋玄勝(米沢藩医、桂山、後に素堂の岳父となる)、京大阪、長崎に留学。京都で竹中文啓より痔漏の治術を伝授され、長崎では九月、吉雄定次郎に入門、蘭方を修業(二三九号)。翌年六月に江戸に戻る。[4]

四月、飯田幽澗、細井平洲(治憲の師)の治療に遣わされる。[4]平洲、六月に歿す。

十一月、下長に痘瘡流行。[4]

享和二年(一八〇二)

八月、林哲、於克様(重定の次男勝熙の女、後の日野資英夫人)について江戸に登る。[4]

享和三年（一八〇三）
小松村一帯麻疹流行[4]。
十二月二十五日、奉行荏戸六郎兵衛喜政卒す。三日間鳴物を停止[2]。
文化元年（一八〇四）
十二月二十四日、江戸御留居、高橋平左ェ門吉輔歿。俳名を紅二と称す[2]。
この年、林哲、門人戒令を作る（二七二号）。大御門上番脇本友右ェ門他五名、林哲の門に入る（二七一号）。
文化三年（一八〇六）
二月、喜平次（治広の世子後の斎定）疱瘡に罹る[4]。
八月、内村元智直高（初め源次郎、洞翁の嫡子）、杉田玄白に入門。翌年、土生玄碩について眼科を修業[6]。
十二月、米沢、国産役所内の好生館を学館長屋に移転[2]。
総裁飯田幽澗[4]。
文化四年（一八〇七）
六月五日、露西亜船北辺を窺ふ旨の通報あり[2]。
文化五年（一八〇八）
正月、仙台、会津の両藩より蝦夷地守護のため出兵。
六月、治憲、膝痛を患う[4]。林哲、この治療法を杉田玄白に書翰で問う。この頃、治広も足指を患い、玄白の往診を求める（二一号）。
治憲の膝痛につき、隠居後の飯田幽澗（忠林）も相談にあづかるよう命ぜられる[4]（八〇号、八一号）。
十月、上杉岩之助（斎定の弟）、元服。主水勝庸と称す[2]。
文化七年（一八一〇）
三月　飯田幽澗歿。
中山駅疫病流行[4]。
文化八年（一八一一）
正月、林哲、御側医として十六年勤めたことを以て八人扶持五石となる[4]。
閏二月二十三日、林哲歿。舘山寺に葬る。壷天院清亮中明居士[3]。
三月、米沢大火。林哲の嫡子、忠竜忠寛（素堂）、11才にして家督相続。五人扶持五石をもって、組並に相勤めるよう命ぜられる[4]。
文化九年（一八一二）
九月七日、治広、中風のため隠居、兵庫頭と称す。斎定家督[2]。
十一月、江戸大地震。
十二月、林哲の三男死す。天然幼性童子。
文化十一年（一八一四）
幕府、米沢藩に紅葉山御殿の普請手伝金一万八千三百両出させる。そのため藩の財政緊縮の策をとり、好生堂を閉鎖す[5]。
文化十三年（一八一六）

素堂、高橋桂山（玄勝）の門に入り、寄宿修業。[3]

文化十四年（一八一七）

杉田玄白歿。享年85才。

文政三年（一八二〇）

三月、素堂、江戸御番転のお供をして江戸に登る。十二月より、江戸御留守御番詰となり、家芸修業のため杉田立卿の門に入る。[6]

六月、米沢に熱病流行。

冬、治憲の腫物悪化。

文政四年（一八二一）

三月二十七日、素堂の祖母、易庵の妻歿す。永室妙寿大姉。

閏四月、大塚村疱瘡流行。[6]

十月、斎定、病犬を撲殺し、負傷者の治療を頒示することを命ず。[2]

文政五年（一八二二）

二月、素堂、米沢に呼び戻され、斎定の御側医に命ぜられる(22才)。この時、素堂、鷹山（治憲）の元に召され、説諭される。この模様を日渉園随筆の翹楚続貂に記す。[3]

三月、鷹山歿す。

四月、素堂、江戸へ。

九月、前藩主上杉治広歿。

文政六年（一八二三）

二月、伊東救庵祐直（救莽）、江戸で土生玄碩、杉田立卿に入門。眼科と外科を習う。[6]

四月、素堂、米沢へお供入り。[6]

二月、黒沢農輔、素堂に入門（一説に文政三年十月とある）。

文政七年（一八二四）

三月、米沢、好生堂再開。

四月、素堂、江戸へお供登。

同月、米沢大火。麻疹流行。

八月、米沢大雨で洪水。

五月、小池忠郁、素堂の門に入る。

十月、素堂、布連幾の解剖書中骨編を訳す。[3]

文政八年（一八二五）

四月、藩主より、素堂の蘭学に勤勉なることを賞して小判壱枚と蘭書一部を下さる。[6]

五月、素堂、お供下りで米沢へ。

文政九年（一八二六）

三月、素堂お供登で江戸へ。

四月、伊東救庵、長崎へ眼科、外科修業に赴き、シーボルトに入門。翌年五月米沢に帰る。この間、素堂、救庵を介してシーボルトに依蘭苔の鑑定を依頼する。[3] また、シーボルトに米沢の舘山寺裏山のイカリ草と綱木村の竹節人蔘を贈り、これがライデン博物館に残る。[5]

十月、斎定、江戸で大病となり、篠山藩医湊長安が招から治療にあたり、平癒[2]。これより一層、米沢藩の蘭方が盛となる。

八月、素堂の師、神保蘭室歿す。享年84才。素堂「祭先師神保先生」を作る[3]。

三月、大槻磐水歿。享年71才。

五月、素堂、米沢へお供下。

六月、上村玄端（玄立、孝継）他二名、八月に小池忠琢が素堂の門に入る。

この年、素堂「獲依蘭苔記」を著す[3]。

文政十一年（一八二八）

三月、素堂、お供登りで江戸へ。翌年四月お供下りで米沢へ。

この年、素堂「幼々一言」を著す。

十一月、細谷忠貞、素堂に入門。

文政十二年（一八二九）

五月、須階元亮（庄入生れ）と後に坪井信道の門人となった鈴木千里が素堂に入門。六月に飯田有益（邁倫、幽澗の孫）、七月に山口彭水、十月に寺島退葬（後の志田玄策）、十一月に栢倉庄蔵（最上生れ）が入門。合計六名。

天保元年（一八三〇）

三月、素堂、江戸へお供登。

十月、高橋玄勝歿。

天保二年（一八三一）

三月、長崎の通詞吉雄忠次郎、シーボルト事件により、米沢支侯上杉駿河守預けとなる。天保四年二月、米沢で客死。

八月、素堂、六十日の休暇を得て米沢に帰り、十月江戸に登る。

この年、嫡子忠淳生れる。

天保三年（一八三二）

六月、色摩嘉門（後の山田伯竜）、素堂に入門。

天保四年（一八三三）

二月二十二日、青地林宗歿す。

四月、素堂、米沢へお供下り。この年、米沢近辺疫病大流行し、素堂に予防方法を講じるよう命ぜられる。素堂「扶祇蘭度種痘説」を訳す[7]。

五月、山崎周春、素堂に入門。

十月、伊東救庵、塩野村に薬衣米銭を送る[2]。

この年凶作。全国各地で米価騰貴。米騒動がおきる。

天保五年（一八三四）

八月、素堂、江戸へお供登。

十月四日、宇田川玄真歿す。

天保六年（一八三五）

四月、素堂、米沢へお供下。

五月、疱瘡流行、翌年に及ぶ。

この年、佐藤文竜、黒津忠達、大沢忠恪（越後生れ）が素堂に入門。
この年亦凶作[2]。
天保七年（一八三六）
三月、素堂、江戸へお供登。翌年三月、米沢へお供下。
三月、藁科立廸（米沢藩医）、多紀安叔に入門。
この年、村山忠篤（上の山生れ）、三浦有恒が素堂に入門。
この年、冬から翌年秋まで疫病流行（九三号）。
米沢藩、この年も凶作[2]。
天保八年（一八三七）
八月、素堂、一代限り三人扶持加増される。
坪井信道、大病に罹る。この疫病で米沢藩士長井音蔵、長谷川源右エ門が死亡（九三号）。
この年、大貫直章、素堂の門に入る。
天保九年（一八三八）
四月、素堂、江戸へお供登。
六月、湊長安歿す。
八月、素堂、於雍様看病で一本松邸（秋月邸）に詰る。
この年も米沢藩凶作。
この年、伊東文仲、素堂の門に入る。
天保十年（一八三九）
二月、藩主斎定、江戸藩邸で歿す。素堂、御遺骸について米沢に下る処、昌寿院（大夫人）の看病のため江戸に留る。
四月、上杉斎憲、家督を継ぐ。
五月、蛮社の獄事件おこる。小関三英自殺。
この年より素堂「幼々精義」の筆をとる。
四月、松木救庵、素堂の門に入る。
天保十一年（一八四〇）
一月、素堂、昌寿院の侍医となり、五十石となる。
四月、素堂、暇をとり帰省。
五月、蘭書の翻訳を規制される。医書の出版には医学館の許可を必要となる。
この年、林洞海訳「宮篤児薬性論」の訳成るが、出版は安政三年に許可される。この年、素堂の門に山崎春他五名入門。
天保十二年（一八四一）
閏四月、昌寿院急病の報せに、素堂は急いで江戸に登る[6]。
八年、素堂、御前様の御薬用に命ぜられる。
二月、山崎長春（藩医）、竹内玄同に入門。
この年四月までに素堂の門に河内忠逸他二名入門。
天保十三年（一八四二）
この年五月に武田玄幹、六月に鈴木長伯他五名素堂に入門。この年より江戸での入門者の名前を見る。
天保十四年（一八四三）
三月に吾妻千齢、四月に大木忠益（坪井芳洲）、五月に久

保田祐庵が素堂に入門。
「幼々精義」の第一巻から第三巻を第一輯として刊行。
序文坪井信道、跋杉田立卿。
弘化元年（一八四四）
一月、素堂、拾石加増されて六拾石となる。
同月、坪井安貞（信友、信道の長男）、釈観竜の二名、素堂に入門。
二月、志賀青岡（水明楼外史米沢郷土史の著者）歿[2]。
六月、素堂米沢に帰り、八月に出府。
八月、中村玄長、素堂の門に入る。
この年、素堂は黒川良安、青木研蔵（共に坪井塾門人）と共に「医理学源」を訳す。
高野長英、江戸小伝馬町の獄舎の片事のための三日間放免後、獄に戻らず行方をくらます。
弘化二年（一八四五）
正月、素堂、御前様のお産に介助す。
三月、佐々木玄英他一名、素堂に入門。
十一月二日、杉田立卿歿。
年末、高野長英、米沢に現われ、素堂にかくまわれ、後、和田村の医師高橋嘉膳宅の土蔵にかくまわれる。
弘化三年（一八四六）
一月に加藤嶋蔵、五月に森谷直次、七月に鈴木周益、九月に柏倉亮達、冨藤寛司が素堂に入門。
大木忠益、坪井塾の塾頭となる。
この頃、素堂の嫡子忠淳、坪井塾に入る。
弘化四年（一八四七）
八月八日、坪井信道、熱海に療養に出発。
素堂、出発の前日坪井を訪ね、「浴戒五条」と「送浴坪井誠軒熱海の詩一篇を贈る[8]。
十一月七日、素堂の次男亮之輔生れる。
嘉永元年（一八四八）
八月六日、坪井信道、素堂の依頼で日野資英の夫人（於克様）を往診（九九号）。
八月十一日、日野夫人歿す[3]。のちに素堂、観月夫人墓碣銘を作る。
八月十六日、信道発病。十一月八日歿す。翌年素堂「誠軒坪井君を祭するの文」を作る。
この年、日向飫肥の木脇元竜三名、素堂に入門。
「幼々精義」第四巻より第七巻までを第二輯として刊行。
序文は箕作元甫、跋は伊東玄朴。
嘉永二年（一八四九）
長崎で牛痘接種に成功。
嘉永三年（一八五〇）
十一月一日、高野長英自殺。
この年、長州の栗山立孝他十名、素堂に入門。
嘉永四年（一八五一）

この年二宮桂斎、河田養正他二名が素堂に入門。

嘉永五年（一八五二）

夏、素堂、坦斎公の子に供奉して豆相に遊び、「豆相遊記」を書く。[3]

またこの年、「保嬰瑣言」を著し、伊東玄朴らの好評を得る（二四一号）。

大木忠益、芝浜松町に開業。[8]

この年、赤石の松井玄純、天童の奥山雲陵他二名、素堂に入門。

嘉永六年（一八五三）

夏、素堂病み、許可を得て米沢に帰る。[3] この時、忠淳（忠廸）は父に附添うべく江戸に登る。

四年、織田貫斎、伊東玄朴の養子となる。[9]

この年、細野生春、大橋秀□が入門。

安政元年（一八五四）

素堂、正月より病み、三月十八日に歿す。[3] 54才。花仙院殿蘊慶素堂居士。米沢の舘山寺に葬る。

この年、旱天続き凶作。

安政二年（一八五五）

一月、江川太郎左ェ門、伊東玄朴病む（一七一号）。

一月十六日に江川歿す。

三月十二日、林哲の妻、素堂の実母（志賀氏）歿す。寿照院玉底智月大姉。

十月二日、江戸で大地震。

この年、疱瘡流行。

安政三年（一八五六）

二月八日、忠廸の二女死す。梅清妙香嬰女。

十一月二十六日、素堂の二女牧（大竹某の妻）歿。梅含院盛山妙香大姉。

安政四年（一八五七）

堀内忠廸「医家必携」を出版。忠廸にはこの他「扶歇蘭度氏小児病内科篇」「適斎漫録」の著作がある。

安政五年（一八五八）

五月七日、江戸在住の蘭方医の拠金でお玉ケ池種痘所ができる。

この年、コレラ流行。米沢近くの温泉湯治場赤湯にもコレラ流行、忠廸、斎憲御側医の石川欧所の指図で治療にあたる。[2]

伊東玄朴ら幕府の奥医師となる。[9]

安政六年（一八五九）

四月二十四日、忠淳の四女死す。聯室智芳童女。

万延元年（一八六〇）

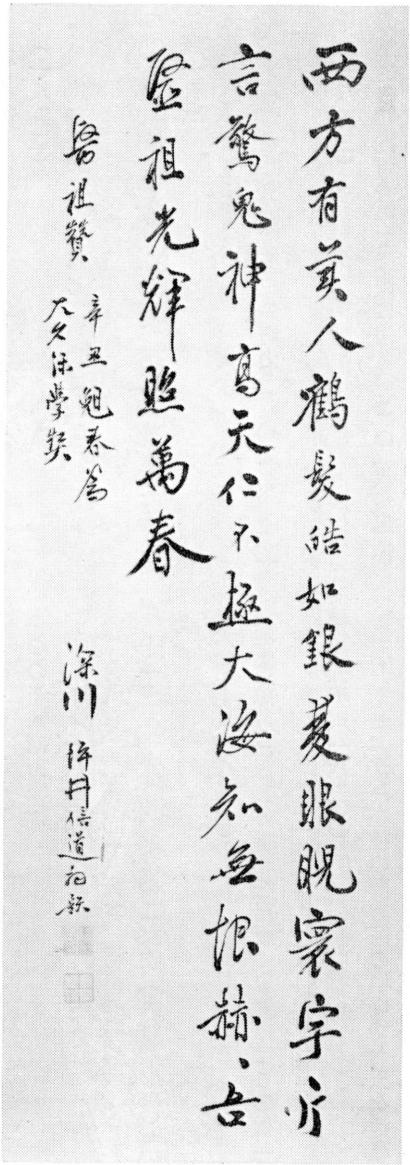
忠廸の長男勝次郎、米沢に生れる。

文久元年（一八六一）

四月、江戸に疱瘡流行。

六月二十九日、忠廸の夫人歿す。深源院桂林妙香大姉。

文久二年（一八六二）
米沢、麻疹流行、物価騰貴。
元治元年（一八六四）
六月二十九日、忠廸歿。享年34才、賢光院学雄適斎居士、舘山寺に葬る。[3]
米沢にコレラ流行。
慶応元年（一八六五）
八月二十八日、忠廸の弟忠世亮之輔、家督相続。忠廸、長男の勝次郎の幼少なるを以って弟忠世を嫡子とし、勝次郎をその順養子としていた。



文　献
1) 米沢藩士先祖書、外様法体、外様外科。
2) 中村忠雄編「米沢大年表」米沢市役所発行、昭和19年。
3) 堀内亮一編「堀内素堂」　昭和7年。
4) 米沢藩々士勤書（天明5年以来代々勤書上）
5) 新野辰三郎他編「米沢医界のあゆみ」米沢市医師会発行、昭和38年。
6) 米沢藩々士勤書（文化14年以来代々勤方書上）
7) 乾々斎架蔵秘書目録、昭和18年。
8) 青木一郎著「坪井信道の生涯」杏林温故会発行、昭和46年。
9) 伊東栄著「伊東玄朴伝」玄文社発行、大正5年。
10) 片桐一男著「杉田玄白」吉川弘文館発行。昭和46年。

日本医史学雑誌・第十八巻
第一号・昭和四十七年三月　昭和四十七年二月一日受付

原著

弘前における渋江抽斎の遺族と伊沢棠軒

——伊沢蘭軒覚之書（二）——

松木　明

一

渋江抽斎の遺族が江戸を引揚げて弘前へ着いたのは、明治元年の五月のころであった。

弘前では富田新町に居住した。富田新町は俗に江戸っ子町と言って、江戸から引揚げた定府の人々の住宅街であった。

家族は戸主成善　十二才、母五百　五十三才、陸（くが）　二十二才、水木（みき）　十六才、専六　十六才、矢島優善　三十四才、の六人である。

優善はその年の十月に周禎の下に居た妻鉄を迎え入れて、土手町に家を持ったが、その間に諍が生じて和解出来ず、優善は十二月二八日に失踪して行方を晦した。

専六は親方町の町医小野元秀に従学したが、あまりこれになじまずむしろ兵士の間に交りを求めて、医者銃隊として山野を跋渉した。しかしそれも永くつづかず、もと津軽家の側用人をした山田源吾の養子になって、明治三年十二月二十九日に青森から船で上京した。

陸は明治二年九月二十三才で矢川文一郎に嫁した。文一郎は江戸定府の矢川宗兵衛の長子である。抽斎の遺族とともに江戸を引揚げ、同じ富田新町に住した。明治五年に帰京し、本所緑町で砂糖店を開いたが、翌年閉店し陸と別れた。

水木は明治三年十八才で弘前藩の馬廻役村田小吉の長子広太郎二十六才に嫁したが、幾許もなく離婚した。五年に母五

百らと帰京した。

成善はのちの保である。弘前で兼松石居に経史を学んだ。明治三年藩学稽古館の助教となった。四年に母五百と水盃をして単独で帰京した。別離の挨拶に廻った際、塩分町に居た平井東堂はもう再び会うことは出来まいと言って、涙を流して最も別れを惜しんだという。

五百もまた翌明治五年帰京し、五月二十日に東京に到いた。一行は水木、それに矢川文一郎夫妻であった。

したがって明治五年帰京の際には渋江家には五百未亡人と村田から復帰した抽斎の六女水木の二人だけだった。

それで抽斎の遺族が弘前に滞留したのは、明治元年五月から五年五月までで、およそ四ケ年の間であった。

二

その間に函館戦争に従軍して油川（青森市）に滞留していた伊沢棠軒が、明治二年三月十五日に弘前の富田新町に、抽斎の未亡人五百を訪ねた。このことは鷗外の史伝「伊沢蘭軒」の中に棠軒の従軍日誌を引用して、次のように述べている。

棠軒は渋江抽斎の師である伊沢蘭軒の養孫にあたる。すなわち蘭軒の長子榛軒の女柏（かえ）の婿で、榛軒の門人田中良安である。当時福山藩の藩主阿部正弘の侍医であった。

明治二年三月

「十日、曇、夕雨雷鳴、広江繁三郎附添且又打撲為養生温泉行御用済、朝より出立、津軽坂にて午飯、夕七時中野村長谷川総右衛門へ著、終日乗輿、津軽坂一名鶴坂、外浜と内郡との界である。

「十四日、雨夕晴、爰許今朝出馬、黒石通り中野村迄帰程様子相寄尋候処、五七日内には出艦手筈難及由に付、午刻よ

り又々弘前行相催す。藤崎村に而継馬、夕七時半時過弘前城下下土手伊勢屋甚太郎方著、直小野氏尋訪行飲」

「十五日、晴、渋江氏行飲。午刻より弘前出立、夕七時頃中野村へ著一泊。渋江氏では抽斎未亡人が棠軒を饗したのである。

伊沢蘭軒　その三百四十一

小野氏というのは親方町の医小野元秀である。

棠軒は二月二十日に右側胸部に打撲傷をうけ、疼痛、咳痰がひどく病臥していた。十日許可を得て温湯村温泉へ行って療養した。十三日には急報が来て、青森港へ軍艦が来たから至急青森へ出向するようにとのことである。いよいよ官軍の準備が整って、函館へ進撃する時が迫ったのである。

しかし十四日になって様子を聞いてみたら、出航までにはまだ多少の余裕があったので、その間を利用して弘前に抽斎未亡人を訪ねた。黒石から藤崎へ馬で行き、そこで馬を乗り継いで弘前へ行った。その日はおそらく下土手町の伊勢屋に宿泊したものであろう。翌十五日に渋江氏を訪ねたのである。

下土手町の伊勢屋へ宿泊したものとすれば、伊勢屋から中土手町へ出て、代官町への十字路から右へ折れ、品川町を通って現在の第二大成小学校の正門の前から、富田新町へ出たものと思われる。

その時は富岡新町には五百末亡人、成善、陸、水木、専六の五人が居った。

棠軒は抽斎の遺族と久し振りに対面し、その久闊を叙し、抽斎の遺族たちは棠軒を手厚くもてなしたことであろう。

棠軒は午後抽斎未亡人の許を辞して、中野村へ帰った。

三

四月五日函館追討軍はいよいよ函館へ向って進撃を開始した。しかし棠軒は藤田松軒とともにそのまま油川に残留する

ことになった。藤田松軒は福山藩の医師である。

四月十七日、官軍は松前を恢復これを占領し、五月十九日榎本武揚らが官軍に降伏し、戊辰の役はここに終了した。

二十四日、棠軒は青森を出航、函館に向い、ここで英船アラビアン号に乗船して函館を出航、二十九日に品川へ着船、上陸した。

ちなみに伊沢棠軒は明治八年四十二才で没した。

書評

浦和市医師会編纂「物語浦和市医師会史」

本書でまず驚かされるのは一地方都市の医師会史が八三七頁からなる大部なものであることであり、次いで、その表題に「物語」とついていることである。それも読むにつれて疑問が解ける。本書は二部に大別され、前編は浦和の宿の時代から終戦までの歴史である。浦和には幸いにして、その地の旧家仲田家や大久保盛次氏宅に豊富な関係資料が残っており、また明治初期からの貴重な資料もあることから、内容が確実な資料によるという強味をみせている。それに加えて編纂委員が史実の羅列を避けるために、労を惜しまなかった結果、通読しても面白いものとなっている。

近年、各県の医師会史の編纂により、これまで知られていた中央の医事制度の移り変りが地方にどのように滲透していったか、また大多数を占める開業医の教育がどう行われてきたかが判りつつあるが、この本でも明治初年の埼玉医学校の実態が明らかにされ、大事な資料を採録されたことは非常にありがたい。また、これに類することは本書のいたるところにみられ、その価値を高めている。一方、浦和の女医第一号の沖田トヨノ氏の回顧談、終戦前後の医師の体験談は大勢の人にある種の感慨をもたらすだろう。

後編は「終戦より健保近代化促進闘争まで」と題されるように、戦後の混乱から、新生医師会が軌道に乗り、幅広く医師会活動が行われるに至った今日まで、その内容の充実されていく過程を克明に記してある。現在の活動が正しく評価するために必要なことである。最後に附属として詳細な年表と物故会員も含めた全会員の略歴のあることも便利な本にしている。

こういう地方史を見るときに、いつも気がかりになることであるが、いわゆる通史に属するところでの誤りが目につく。勿論、編者は充分気をつけていたと思うが、これまで通説になっているものをそのまま採ったり、誤解したまま書いている個所がある。医学史の分野の研究者が少いことや特殊であるため国史学者から敬遠されていることから、無理もないと思うが、印刷になる前に、その部分だけでも専門とする者などに問われればと悔まれる。

（A5版　八三七頁　社団法人浦和医師会発行）

（酒井シヅ）

片桐一男

第八号文書　香坂右仲書状　堀内易庵宛

（端裏）
「堀内易庵殿　　内密用御返報　　香坂右仲　」

長門守様御容子西良仲へ御越可レ及二御熟評一候ハ、当時何なりとも御別条不レ被レ為レ在御容子、宜敷儀ハ各方二而も恐悦、扨又御全躰之儀ハ最前ゟ十目之見上候通御難治之御症、先土用中ハ御無難二被レ成二御凌一候得共、残暑甚ク、又ハ新涼不意二至リ候ハヽ、無二御心許一なと際々御咄合候得者、良仲も内々ハ其儀甚心付居候由、三月ゟ御取扱申上罷在、御内外之儀何彼申上候得とも、先二被二仰付置一候、御自分御出府以来ハ元来同門兄弟之間タ二候へハ、米沢江相聞へ、御療治之事も安心之由申段左も可レ有二御座一候、為二御対顔一御参府可レ被レ遊哉なとも薄々承知、左候ハヽ、当時御床二も被レ為レ附不レ申、御順宜御平二被レ為レ入候へハ、此折御出府被レ遊、可レ然由申談候旨、是又左も可レ有二御座一候事二候、其節御自分も御申候二ハ、成程其儀二甚御苦ミ候、左候て当時宜折二候哉と御申候へハ、良仲申二ハ、此折御出府御対面可レ然由、御家老へも申出候様二良仲も申二付、則其旨御家老へ御申出候由致二承知一候、御急変御大切と申儀二相見、御申出之儀二ハ決而無レ之由、唯末々之御容子無二覚束一御症之事故、左候通御評判尤之事二候、御家老ゟも其元御申出之趣匁々二言上有レ之候、玄永なとハ当月中御別条有二御座一間布事と申候得共、御自分良仲ハ何とも延引二相及兼られ、万一手抜二も相成候節ハ大切と被レ存、良仲江熟談之趣御申越、内々承知置候様委細致二承知一候、誠御存慮之儀尤之至と存候間、何之可レ及二遠慮一儀二無レ之候へハ、有之儘及二御沙汰一候、左候へハ、候御参府二も相移可レ申儀二候へ共、其表米殻不足之処、近年御国許不熟二付而ハ御扶持米皆以御買入と見込候処、急段為二御登一二罷成候得共、駄送相滞、今日詰合之物さへてか〳〵之御渡米、夫々御参府と申時者臨時之御扶持米別二為レ登不レ申不レ叶候処、金橋二而も不レ参此米公儀為二御登一米二而人馬ハ路中二無レ之、又ハ津留なと二而、爰へ御頼、かしこへ御頼と御座候へハ、中々以急之御登二も相成兼候間、専其儀取配之事二候、於二中殿様一ハ疾ゟ御参府候事一時もはやくと被二思召一候へとも、右之通二候へハ、失孤二可二思召一候而も不二相叶一、天命之不レ免処無二御拠一御事二も尤専心遣之事与候へハ、不レ遠相弁申歟二候へ共、何彼一図二被レ存候様二参兼、気之毒千万之御節二御座候、何此節ハ急御変二成二御座一候而ハ矢庭二御立ハ相成不レ申候間、尚此儀ハ此度之便二も奉行中ゟ申参ル筈二御座候、我等ゟ申遣候ハ、誠二御薬功之有躰、御用状二ハ又御大法向宜唱方も可レ有レ之哉、何とも其元江者委細典膳殿

（下ケ札）

へも物語可レ有レ之候間、夫か正ニ御承知、一本松長者丸なとへも御物語之端御心扣ニ可レ被レ致候、右御報旁如レ此御座候、已上、

七月十四日

（下ケ札）

当月中と申儀、甚無二御心元一被二思召一候、若ハ月者年之書違ニも候哉、弥当月中と申候ハ、御急変当月中ニも被レ成二御座一間敷ニも無レ之と、良仲と其丈ハ被レ存候様ニ相聞申、文談申候、さつと見候へ者、余り不レ替事ニ候へ共、御心元なく思召候而、御覧之時ハ少々之事も御心服ニ被レ為レ微申儀ニ候間不審申入候

註

・本状、第一号―第七号と同様、天明七年七月十四日付書状なり。

第九号文書　香坂右仲書状　堀内易庵宛

尚々

長門守様御容躰、去ル七日之夜中迄之御容子、無二御心許一御事ニ候処、八日ニ御平ニ被レ成二御座一、先ツ達而被レ為レ替候儀も被レ成二御座一間敷哉、其表残暑強御座候由、旁無二御心許一御事ニ被レ成二御座一候、且又御参府之儀、御願も罷出候上ハ御遅滞可レ被レ遊様無レ之儀ニ候へ共、又御平之御様躰被レ為レ聞候而ハ、片時も御急キ之事ニも有二御座一間敷候、兎角ハ尚度々御様子御調御申上専一ニ存候、已上

一筆令二啓達一候、残暑候得共、弥御堅固御逗留珍恭ニ存候、将又去ル十四日飛脚便ニ

長門守様御匣物御様子無二御心許一被二思召一候得共、御参府御願取運ハ兎角何彼御見合、追而御下知申参次第、其表ニ而御家老被二取尽一候様ニと被二仰付一儀候処、其表ゟ去ル九日立之飛脚、去ル十五日之晩到着、其元様ゟ御家老江尚御申出之上、弥御参府之御願取運可レ被レ申段、御用状ニ申来、七日八日之御容体書、則結剞ニ而相達候、左候得者此表ゟ申参り候、見合之儀与行違ニ相成候、其上を以、尚更被二思召一候は、此節御登り不レ被レ遊候而ハ、御大法向如レ何敷、又ハ御実儀茂相欠候付而、是非此度御参府之御願取運被レ申候様、今晩態与以二飛脚一早々取急キ御出府被レ成候様ニ取運被レ申様被二仰付一儀ニ此上御願相済次第此表江被レ成候は御用意取調無二間も一御発駕、八月中旬ニは遅く茂可レ被レ遊二御着座一候、此段左様御心得可レ被レ成候、尤被レ遊二御参府一候上ハ、白金御住居之　思召ニ被レ成二御座一候間、其元様ニ茂白金江御越被レ成と存候、十四日飛脚并山岸発足迄之御沙汰と引違、弥御参府之御沙汰ニ相移候間、此段為レ可二申入一如レ此御座候、恐惶謹言

七月十七日　　香坂右仲

堀内易庵様

是迄之返事済

註

・本状も、天明七年七月十七日付書状なり。

第一〇号文書　香坂右仲書状　堀内易庵宛

尚々此度之御逗留痛入申事、第一ハ此度御参府之時節、宜と御請合之上、御家老へ御申出之儀、殊御様躰書も御調方六ケ敷儀、何彼察入之外、御心遣之至り、誠ニ穴のあらハと申儀、無二御余儀一致二承知一候、御同姓も度々御出段々御噂のミニ御さ候、先日之御状共、早速相届ケ申候、此表之儀ハ何成共御留守宅無二御心元一儀無レ之候間、御安慮可レ被レ成候、供々我々も

御上ニ而一時も御安慮之無二御様子一、御平常御様躰書を御例ニ被二差置一、御噂のミニ被レ成二御座一、追々御気之毒成御容子も申来候得者、御痛心御気色も御不例ニ被レ為レ見、御前ニ相詰居候而ハ、御咄も外之事ハ不二罷出一御容子、御申出候事罷出候而ハ、又々御痛心之御様子御座候ゆへ、御用之事さへ申上残し候躰、何共切角之至ニ御座候、先私御供登り之事ハ差置御見合ニ相移候間、此処貴様最前之御仰含ニ相違候事、全以御気之毒不レ被レ存、此上　御家之御為と偏被レ存、宜敷唱方御油断有間敷候、已上

去ル八日付九日便と及二御聞一御状被二差出一候処、最早飛脚差立と有レ之、御残シ同十日付之御状与一同ニ黒井小源太下りニ相達、致二拝見一候、残暑甚敷候得共、弥御平安御逗留珍重之御事候、先以

長門守様御容躰書、毎度御越、則遂二御沙汰一候、詰ル処、御療治之西良仲江も御詰合、一本松御医師中江も御熟談旁、其上中殿様御参府御願取運之時節ニ相至り候付而、段々御申出、御家老御留守居宜取運、去ル十八日御願出、同十九日御願之通被二　仰出一、誠一段成取尽と被二　思召一候、乍レ去中頃御見合と申義も相起り居候付、彼是と御決断被レ成兼候、此間之内狂ひ之事、何とも難レ及二筆紙一事ニ候間、態と致二筆略一候、彼是之儀ニ付而、此度五十嵐弥左衛門方被二指登一候間、委細同人江委敷被二　仰含一候間、何事も御家之御為と被二　思召一候儀ニ候間、宜被二相心得一申唱方無二御違一様専一之儀と存候、兎角書面と弥左衛門方演説と少も引違候而ハ、却而貴様御凝ひも起ル物ニ候間、私方ハ不レ及二細筆一候ハ、五十嵐申分ンニ随ひ御家老御留守居之聞請次第ニ決シ申事ニ候間、右三人衆之談合之趣、得と御承知可レ被レ成候

一、五十嵐登り之上之模様次第御参府之有無決シ申儀ニ候へとも、其内

長門守様御容躰尚更無二御心元一御急変も被レ為レ在候様ニ御見請候ハ、、其旨右三人ニ早々御申達、是又専一ニ御心得可レ被レ成候

一、御発足前御請取物之儀ニ付、御覚書被二差下一致二披見一候、此儀ハ無二御余儀一致二承知一候、早速彼所へも可二差出一儀ニ候処、此間ハ御参府有無之儀ニ付、私儀も一切無レ隙、其上談ニ

御役筋ニ不レ得二寸隙一候砌、何申も行届不レ申候間、先願置申候、相成丈之儀ハ随分遅成候而も、相片付可レ申候間、此段ハ左様御心得当時御問合兼候儀ハ令二先達一候通、其表ニ而御申出御受取可レ被レ成候、右旁乍二早々一如レ此御座候、恐惶謹言

七月廿八日　　香坂右仲

堀内易庵様　御　報

八月六日立御飛脚ニ返事遣ス

註

・本状も天明七年八月六日付書状なり。

第一一号文書　香坂右仲書状　堀内易庵宛

尚々別紙と申処、御台所へ頼ミ之書面ニ候間、折懸二書面御披見一之上、宜御引合被レ下度候、何分ニも頼入申候、以上

一筆致二啓達一候、此間ハ凉気立候得共、弥御堅固御勤之由珍重存候、然者七月晦日八月二日同五日付之御容躰書并私江之御紙面忝拝見、細々之儀不レ及二御報一候処、右書面共　御覧ニ指上置、殊ニ当十六日御立之御唱ニ而、公辺御障日ニ付十七日御発駕、同廿四日其表可レ被レ遊二御着座一旨被二仰出一甚御混雑ニ御座候、貴様御擬熊胆之儀御同姓江申談、栄雪江も被レ及二内談一候上取尽私申立候、何れか十七日前済に可レ有レ之与奉レ存候、たとへ緒口無レ之共、先ツ其表ニ而御引替金三両相渡候段、為二御知一も御座候ハヽ、何と歟当時ハ参ル儀と奉レ存候間、何分ニも御問合可レ然候

一、中殿様御中暑之御気味ニ被レ成二御座一　御参府御見合と申儀ニ候処、段々御順快御参府ニ相成

公辺江被レ為レ対宜儀長者丸江御孝道も相立、此二ツ全ク恐悦只此節之御入料不レ少候処、御表様江被レ為レ対候而ハ御勝手向ニ取り被レ遊二御痛一而己ニ御座候得共、忠孝義三ツ之内弐ツ全壱ツハ御欠キ被レ遊儀と申物ニ候間、無二御拠一事又是も御忠孝御立被レ遊候儀ニ候へハ

御表様達而之御病ニも相成間敷候

一、私儀御供登被二仰付一本意之儀ニ候得とも、内々甚六ケ敷事ニ候、何とか近日罷登可レ得二御意一候、上着之日彼方弐者小屋道具等用意之儀、近頃無心之至ニ候得とも、貴様皆御頼候間、別紙之通御尽被レ下度、慮外千万なから頼入申候、御台所彼方も兼而心安キ者ニも無レ之候へ共相頼申度、家来ゟ頼ミ申遣候、宜御引合可レ被レ下候、貴様者　御着之日御殿ニ御詰合候間も無レ之筈ニ候へとも、着前小屋江も御見廻可レ被レ下候、何被御差図被レ下度頼入申候、待請迚参り居呉候様之心安之衆、桜田ニハ早速心付不レ申候、三潴三折被レ参見尽候も、給候様ニ致度候、麻布ニ而ハ芋川御用人或ハ永井伊助心安ク御座候、御屋敷ニ返候儀ニ候へハ、六ケ敷御座候、殊ニ麻布御用人ハ一入無レ隙候筈ニ候間、自分ハ透と不二申越一候、永井伊助へも不二申遣一候、御面会之儀も御座候ハヽ、御噂可レ被レ下候、是又御門御受取ニ而隙無レ之之儀と存候、細々得二御意一度事共ニ可レ有二御座一候得共、何分不レ得二手透一、

漸此書面も調申候、万事ハ出府之上積事可レ得二御意一、此度も則林哲老江は書状御越候、貴様之御用物も十七日ニハ為レ持可レ申候間、御安慮可レ被レ成候、涼気ニ相移一入御心遣共察入申候、恐惶謹言

八月二日　　香坂右仲

堀内易庵様

人々御中

註

・栄雪＝矢尾板栄雪。初め道有、のち忠秋。米沢藩中之間詰番医で組離に属す。天明七年八月十七日、秋月長門守種美が不例の節、治憲が看病のため出府のときに供を命ぜられ出府。

・三潴三折＝三潴玄寿守行が初名。部屋住中の勤務に、天明七年五月中、中之間の番医としての直勤ならびに留守番を一ケ年勤務。のち寛政四年三月四日家督をつぐ。知行三拾九石四斗七升三合八勺四才。

・本状も天明七年八月二日付書状なり。

第一四号文書　酒井平八郎書状　堀内易庵宛

改年之御慶尽期不レ可レ有二御座一候、弥御揃御清栄御越年別目出度奉レ存候、私義無為加年仕候間、御安慮可レ被レ下候、去冬ハ寒中為二御尋一預二貴札一忝奉レ存候、押詰相届申候故、貴答も不二申上一候、目黒方御書状被レ遣候段相達申候、返書参り次第差上可レ申候、如レ仰之厳寒雲酒ニて防居申計ニ御座候、御令息様江も宜敷被レ仰可レ被レ下候、尚期二永日之時一候、恐惶謹言

正月三日　　酒井平八郎　孝徳（花押）

堀内易庵様

▨▨御自愛可レ被レ下候

註

・目黒＝目黒道琢。

・御令息＝堀内忠明（忠意・林哲）。

第五四号文書　安心院敬寿書状　御姓中林・水間三折・藁科立廸・平田道宣・樫村元龍・堀内林哲・水野元丈宛

尚々各様御家内様其外皆様御序可レ然奉レ希候、兼日乍レ存失敬罷過候段御用捨奉レ願候、以上、今成吉四郎様江是又可レ然奉レ希候

改年之吉賀不レ可レ有二際限御座一万寿申収候、先以百爾君子御挙家弥益御機嫌好被レ成二御超歳一奉二重畳恐悦一候、不斐無二別条一致二加歴一候間、乍レ憚高意易被二思召一可レ被レ下候、右年始之御祝詞申上度如レ此御座候、猶奉レ期二永陽之時一候、恐惶謹言

正月三日　　安心院敬寿　司（花押）

御姓中林様

水間三折様

藁科立廸様
平田道宣様
樫村元龍様
堀内林哲様
水野元丈様
参人々左右

註

・水間三折＝中之間番医の三瀦三折か。
・藁科立廸＝中之間番医藁科立廸玄隆。実は飯田忠林正方が四男なり。
・平田道宣＝中之間番医平田道宣範淑。実は樫村玄龍清方が長男なり。
・樫村元龍＝中之間番医樫村元龍清応で元龍清方が嫡子。
・水野元丈＝中之間番医水野道益秀文。元丈はその初名。

第一一二号　坪井芳洲書状　堀内忠亮宛

（端裏）
「堀内忠亮様　坪井芳洲
貴答」

貴書拝読仕候、然は大島へ参候時日ハ貴示之通承知仕候、当人へ出会之節相談聞合仕掛合扨又、写真鏡之事御尋有レ之承知仕候、右器械ハ心当りも無レ之候、両国薬研堀ニ写真鏡師有レ之、林家之三四軒先キニ御座候、是へ御出ニ相成候へは、器械も一覧出来、何成共御注文相成、宜敷存候、教へ反飛脚ノマヽ申上度候、頓首

九月廿一日　薬研堀　鵜飼　玉川

第一一五号文書　杉田成卿書状　堀内忠亮宛

（端裏）
「堀内忠亮様　杉田成卿」

昨日は途中拝顔大慶奉レ存候、其節鳥渡御話申上候、ヒュヘランドキンデルプードル方左之通りニ御座候

No. 256.
保嬰散
Kinder poeder.
マクネシ入置
R Magnes. carbon. Une. j.
大黄二匁
Rad. Rabarb. Drachm. ij.
竹五分
— Valerian. Drachm. Jemis.
角石四匁
Elaeosacch. Foenicul. Unc Jemis.
M. f. Pulv. J. 1-2 messer=
spitzen vol.

寒暖計之儀も今日序御座候付、問合遣申候、出来次第為レ持差上可レ申候、以上

六月十三日

資料二

戸塚静海より兄柳斎宛の書簡の紹介　二

戸塚芳男

(二)（嘉永元年三月廿五日）

（別筆）〔静海ゟ三月廿五日出四月六日届〕

本月廿日出貴翰昨廿四日夕方到着拝見仕候。如貴翰春色日加候得共晴陰不定不順之時令ニ御座候処益御佳勝被為渡恭喜之至奉拝賀候。然は今般者御両人湯治序御出府被成十七日途中無滞御到着被成候。弥御丈夫に御座候。御省念可被成候。廿一日供両人調物為持帰郷為致候。定而委曲御聞被下候事ニ奉存候。其節柳溪一条御相談申上候。御熟考上貴答被仰下度候。貴答次第浪華へ返書差出度奉存候。柳溪書状入貴覧候積此間失念ニ付此便入貴覧候。尚又御返却被下度候。

一、芝川苔御恵投被下不相替風味宜敷嗜好之品貴味仕候義ニ御座候。扨又書状数通一同落手其々相届申上候。先は右申上度　草々頓首

三月二十五日　　戸塚静海

戸柳斎様

(三)（嘉永元年四月二日）

（封紙）戸塚柳斎様緊要書貴答　戸塚静海

*四月十四日夜記（別筆〔閏四月二日到来〕）

（別筆〔静海四月二日出同十日到来　勘蔵持参ル〕）

尚々一両日者薄暑相催候。時下折角御自愛奉祷入候　草々

廿八日出の華牘今二日到着拝誦仕候。益御清栄奉拝賀候。然バ御両人無事至極丈夫ニ逗留諸所見物ニ被参候。おとへ殿蒐角不快勝に兼々御座候趣此間診察仕候。愚案処法并ニ摂生法篤と相授可申候。左様御承知被下度候。拙宅ニ逗留ニ而ハ長く相成候ても少しも御心配ニ及不申候。又と申候而は容易に出来候間敷折角御出府の序緩々滞留可被成候。扨又柳溪尚又一ケ年も遊学御許容被成下候段難有、左候ハヽ談合相付可申。先日同人書状入貴覧候積失念ニ付廿五日便又々書状一回差出候。定而廿九日の内ニは御落手と奉存候。今般篤と懸合申遣度候。今一ケ年許容いたし可申　依之格別に出精来酉秋帰郷と致可申遣候。且不束之書状等已来申越間敷厳敷可申遣奉存候。白須沢山御恵投被下辱奉拝受候。

貴答　草々　不備

四月三(一)日夜記　　同静海

戸柳斎様

*嘉永元年には閏四月あり　本書発送日が封紙と関連しや、不審の点あり　文末日付も三日を二日と訂正せる如し

(三)（嘉永元年五月十五日）

（封紙）駿府梅屋町

戸塚柳斎様　並序　要用書　　戸塚静海

緘　初夏望前一日（別筆）〔五月十五日〕
（別筆）〔静海ゟ五月十五日出之状同十九日届〕
柳斎先生　侍史　　静海
（別筆）〔五月十五日出同十九日届申候〕

華牘拝誦仕候。梅天益御佳勝奉恭賀候。然はおとへ殿不快追々軽快最早食事大抵平日之体ニ相成申候。薄弱之質少々宛の儀は可有之　急ニ丈夫ニ相成候様ニは蒐ても参り不申候。養生法等愚案之処方等今般相可申　左様御承知可被下候。何れ今月内ニ箱根通抜候様可仕候。其も廿日過頃出発致候様可相成哉　月内か来六月初旬ニ懸ケ帰宅ニ可相成奉存候。殊ニ箱根御関所切手先月出来候ニ付今月中なれハ宜敷　余り延引ニては相済不申候。依之何れ月内近日出立可致左様ニ御承知可被下候。書余後音申上度　草々　不備

五月十五日

（二四）（嘉永元年五月廿六日）

尚々追々暑気相催候間折角御自愛奉祷入候　己上

寸楮奉啓　益御清穆奉拝賀候。然は今日御両人并ニ侍女従僕等壮健ニ□□□□立天気も宜敷　何卒四五日晴続候様致度奉存候。おとへ殿先常丸子之方書差上申候。余症有之熱気□節は丸子見合対症之煎剤等相用可然奉存候。此方ニ而不快中相用候諸薬剤は認不申候。是も跡ゟ認可申哉。扨又御関所切手持参　東海道通行故道中は大案心ニ御座候。扨々御逗留中家内之もの同様存失礼而已いたし申候。とても之事今少し逗留被致候ハ・宜敷奉存候。□□□
後音申上度　草々　不備

五月廿六日
柳斎様　□史　　静海

（二五）（嘉永元年六月廿五日）
（封紙）戸塚柳斎様　　戸塚静海

尚々両三日来暑気甚敷堪兼候程ニ御座候。貴地如何。今数日照続候ハヽ水少く相成可申　呑水払底ニも相成と存候。一両日内十分両降候様致希望候事ニ御座候。

酷暑之節高堂御揃益御安泰恭喜之至奉拝祝候。草屋無異眠食仕候。御省念可被下候。然は先日は貴眷道中無滞御帰郷之趣安心仕奉賀候。扨調物代金取替之分十六両三分弐朱早速御遣被下慥ニ落手仕候。書余後音申述度　草々　不備

六月廿五日
柳斎君　侍史　　静海拝

（二六）（嘉永元年七月晦日）

残暑退兼候処高堂弥御安泰拝賀候。草屋無異眠食仕候。御省念可被下候。然は御両人先日帰郷後弥御無事ニ而おとへ殿病気追々快方之趣　持薬処方中入用之酒石塩御註文被仰越即薬店ニ申付取寄差上可申候。御落手可被下候。先日柳溪子ゟ書状　披見仕候処来秋迄勤学之上帰郷孝養仕候段又々申越候。此段左様御承領可被下候。

扨又拙宅静甫儀嫁貰候積ニ付諸々相尋候得共蒐角相応之者無御座候処　此節田中本多様江戸家老御勤居候岩崎孫太夫娘十九歳ニ而容儀も相応容子宜敷　右孫太夫家中之評判も宜敷由ニ付縁組申入度奉存候。今般掛川へも相談申遣候。貴堂別段思召も無御座候ハヽ早々貴答被仰下度奉願上候。早々及掛合申度候。

右申上度　草々　以上

七月晦日　　戸塚静海

戸塚柳斎様

（七）（嘉永元年九月廿一日）

大槻平次郎仏郎王詞出来候ニ付差上候。時下冷気折角御自愛奉祈入候。乍憚御令閨及おとへ殿にも宜敷御致声奉願上候

以　上

秋冷相募候処益御清寧奉拝賀候。草屋無異御省念可被下候。然は先達而掛川ゟ墓碑金子之義申越鈴木書状も入貴覧候処　其節拙生ゟ返書差出思召次第割合之義ハ如何様ニ而も宜敷先考墓碑之義故何を差置候而も不致候而ハ不相叶義ニ御座候間　台石等代払余次第惣計為御知被下度　尚駿府へ御掛合之上割合之義ハ如何程ニ而も被仰下度申遣候処　今般別紙之通家兄ゟ申越候間左様御承知可被下候。

悴静甫ゟも掛川其節書状遣候由　彼是今般は已前と大相違之書状参候間一寸入貴覧候。御一覧之上近便御返却被下度候。先ニ初被仰越候通之割合ニ而可宜敷奉存候。此段御承知可被下候。

一、柳溪子弥壮健勤学之由大慶ニ奉存候。同人留主ニ付別而御繁用御迷惑奉存候。来春は御呼戻し被成度趣先達而被仰越候。同人へ可申遣候得ども折角修業中ニ付様子次第今一ケ年差置被成候而ハ如何。未た書状差出不申候得共是非今一年遊学致し度返書可参と察候間此段前以御相談申上候。先は後音委曲申上度

草々　頓首

九月廿一日　　静海拝

柳斎賢兄侍史

（八）（嘉永元年十二月廿八日）

（別筆）〔申十二月廿八日　茅場丁状〕

再啓時寒御自愛奉入祷候。頓首拝

浪華へ書状御差出之節柳溪子へ一通

御届可被下候。

華牘拝誦仕候。寒中ニ相成候処存外凌克如春暖ニ御座候。貴地如何。高台各様弥御安泰被為渡恭喜之至奉拝祝候。然は今便蒲鉾二枚御恵投被下難有　風味別而宜敷賞味仕候。尚又寒中御見舞鯛鯆（ママ）（脯の誤）蒲鉾両品内ニ而御送被下候由其内何れ成共好候方可申上被仰下恭奉謝候。然処最早此節之蒲鉾ニ而宜敷御座候。毎度種々御恵贈被下難有　先日は被懸貴意刀掛并ニ針箱御恵投被下二品とも格別上好之品ニ而芳情不浅奉多謝候。令閨令娘へも宜敷御致声可被下候。

一、静甫縁談漸決着来春二月引取候積ニ御座候。先は御省念可被下候。委細油彦ゟ御承知被下候義ニ奉存候。掛川伯兄之大納言様

ニは種々困入候事多く御座候。貴地之義も御察申上候

（九）（嘉永二年正月五日）

再啓余寒折角御自愛奉祈入候。貴堂

各様へ宜敷御致声奉頼上候。己上

新禧奉賀候。高堂益御清寧恭喜之至奉拝寿候。草屋瓦全越年仕候。御省念可被下候。然ハ旧臘例年之通御歳暮御祝儀験まてに鮭ニ本海運ニ而送上仕候。定而最早到着可仕奉存候。鮭其儘一昼夜も塩出し被成能御洗一日風日ニ当其上御用可被成候。将又鱈旧臘入津無之処漸く一両日前入津ニ付壱頭今般陸便送上□仕候。是も一日塩出し被成其上能洗い御用可被成候。

扨又旧臘御恵投之甘鯛風味格別宜敷誠ニ大振ニ而肉厚く日々賞味仕候事ニ御座候。難有奉存候。

一、柳溪義ニ付掛川ゟ書中ニ今一両日浪華滞留遊学為致度様子申越候ニ付直ニ返書差出し当秋は是非帰郷為致候方可然　最早駿府ニ而も老衰病用勤兼候趣ニ付柳溪帰郷企望ニ付既ニ三年之遊学ニも相成帰郷後随分独学ニ而出来可申　養父ニ対し孝道ニも相叶当秋帰京可然掛川ゟも当秋帰郷之義相勧呉候様頼遣し申候。掛川より如何之返書参可申哉未た相知れ不申候得とも定而理之当然逆鱗被致候事も有之間敷奉存候。此段御承知可被下候。先は右申上度草々　不備

正月五日記

柳斎賢兄侍史　　静海

春寒退兼候処貴堂各様益御多祥恭喜之至奉拝祝候。旧臘は不相替興津鯛御恵贈被下辱生賞味仕候事ニ御座候。塩加減至而宜敷実ニ珍味に御座候。将又拙ゟ旧冬例之鮭送上仕候。相達申候哉承度候。当年は延着無之様少し早めニ差出申候。尤鱈差上度奉存候処旧臘

（二）（嘉永二年正月十三日）

（封紙）　酉正月

駿府梅屋町

戸塚柳斎様　并　要用書　　戸塚静海

（別筆）〔駿酉正月十三日年始状　正月晦日着〕

更に入津無之ニ付無拠鮭魚而已差出申候。

一、静甫儀一昨十一日自且那召出御座候而御広敷医師被仰付候。難有仕合ニ奉存候。此段御吹聴申上候。尤至而閑隙之場所ニ而月ニ五六度も当番ニ相成二時程も御広敷詰所ニ罷出居候得は宜敷御座候。依之病用并ニ読書之障りニも相成不申候。難有事ニ御座候。来ル二月中ニは縁女も引取候約定ニ御座候。末た日現（限の誤記）相分不申候。先は右申上度　草々　頓首

正月十三日

（戸）冢柳斎様　　静海拝

（三）（嘉永二年正月廿四日）

正月廿四日燈下書

本月十七日出貴翰今廿三日着拝見仕候。春来益御安泰拝賀候。草

屋瓦全御省念可被下候。然は浪華柳溪子当然帰郷之義昨年約束ニ而定而無相違帰り可申とは奉存候得共　壮年之者念慮易変御座候間尚又近日書状差出帰郷之義可申遣奉存候。且又蘭書求度申越候義拙生返書ニ此方ニ而要用之蘭書見立調可遣候間左様承知可致申遣置候。何れ是ハ三月楢林並ニ品川到着之上蘭書見立可申と奉存候。調次第代金申上候。御承知可被下候。

一、鮭弐頭到着御落手被下候由被仰下安心仕候。今般又々蒲鉾御恵投被下難有賞味可仕奉存候。

一、島津戒了様旧冬帰府之義未た承知不仕御使も参不申候。若御頼御座候ハヽ早々罷出可申奉存候。御娘子は仰之通且那様側女中ニ御座候。外ニ壱人御娘子分家島津淡路守様方ニ老女勤被居候由風聞承候。来二月四日頃旦那当地御発駕ニ而彼是多忙

草々　貴御答如此御座候。頓首

正月廿三日夜記

柳斎先生侍史　　静海拝

(三)（嘉永二年正月廿四日）

（封紙）駿府

戸塚柳斎様　平安　　自江戸戸塚静海

並便り賃銭相済　　正月二十五日出

駿府戸塚柳斎様要用貴答　　東都静海

西正月廿六日出

余寒嵬角退兼候。為国御自愛奉祷候。

令閨并令愛にも可然御致語奉頼上候。

貴翰拝読仕候。春来益御健勝恭喜之至奉拝祝候。草屋無異眠食仕候間御省念可被下候。

然は浪華柳溪ゟ旧臘己来一向書状差上不申候由疎漫之事ニ奉存候。拙生ゟ旧冬十一月頃書状差遣し其節緒方洪庵江も書状遣し候得共未た柳溪ゟ返書参不申掛川へも旧臘柳溪当秋迄遊学来秋之内帰郷之義申遣候間掛川ニ而も其儀申遣呉候様懸合候処　外掛川に自分用向之書状は昨日も参り候得共柳溪之事何共不申越候。柳溪は全く疎漫ニ而書状参不申候事と存候。

一、旧臘は誠に見事之鯛脯被贈下長々賞味仕候。春末尚又蒲鉾御恵投被下是亦難有賞味仕候。春末自此方鱈一頭飛脚便ニ而差上申候。御落手被下候哉。旧冬念八九之頃（廿八九日の頃の意）鱈船入津ニ付春来送上仕候義ニ御座候。先は貴答草々如此御座候。頓首

正月廿四日夜

柳斎先醒（ママ）侍史　　静海拝呈

(三)（嘉永二年二月十五日）

（封紙）駿府梅屋町戸塚柳斎様要用書　江戸八丁堀戸塚静海

賃銭相済　二月十五日　　並便

尚々時下折角御自愛奉祷入候。先日賢閨御不快ニ付処方之義被仰出候処聢と御容躰相分兼其故処方差上不申候。其後貴翰少々宛御快方の趣承知仕候。此節如何御座候哉　万一未た不宜敷候ハヽ御容躰委敷被仰遣可下候。愚案可差上候。早々

以上

爾来御無音打過申候。春寒退兼候処愈々御安泰奉拝賀候。然は兼

而申上候通縁女弥当廿八日引取候積取極申候。此段為御知申上候。扨又浪華ゟ先月書状参候処壮健勤学之様子ニ御座候。御省念可被成候。近日書状差出当秋帰郷之義尚又可申遣奉存候。静甫へ柳溪ゟ書中ニ帰郷之節木曽路ゟ東都へ罷越其上帰郷致度申越候由　是も無益之事に御座候得共様子次第ニ而は其丈之処者当人存寄次第被成候而も可宜敷哉に奉存候。乍然其義は内々静甫迄申越候事ニ而拙生へは未た何とも不申来候まゝ聢といたし候義ニは無御座候。書余後音申上度　草々　頓首

二月十五日　　同静海

戸塚柳斎様侍史

＊以上で廿三通の書簡は終るが巻末に左記の詩三首あり。併記する。

日照風和認瑞光　干門万戸賀新陽
草堂為祝松花酒　一笑挙杯最後嘗

又

夢醒暾光映竹軒　満城笑語送迎繁
老翁不菅人来往　手折梅枝揮瓦盃

又和頌

林鶯竹雀寺朝晴　柳眼梅腮競新清
古人漫謂人心改　今日乾坤自春声
駿地暖元朝聞初鶯之声
故林鶯之事実景

＊（追記）

尚昭和四十六年三月廿七日の医史学会の例会で「戸塚柳溪と静甫」と題し上記書簡の発表をした事があり又三月廿日には蘭研々究報告第二四四号に「戸塚家の人々―文海静甫柳溪積斎」と題し本書簡内容の大意を発表した。併せて参考に供されたい。

日本医史学会例会記事

十二月例会　十二月十八日（土）

於慶応義塾大学医学部北里図書館第一会議室

一　宇田川榕菴の植学独語　矢部　一郎
二　宇田川榕菴と遠西医方名物考　緒方　富雄
三　箕作阮甫の訳語「人口」について　佐藤　良雄
四　坪井信道塾の塾生でつくった二つの医薬品辞典　緒方　富雄
五　オランダの医学切手　古川　明

以上は蘭学資料研究会研究報告第三五三号（一九七一・一二・一八発行）に発表された。

一月例会　一月二十九日（土）

於順天堂大学医学部九号館六階集談室

一　堀内文書にみる蘭学者の生活と思想　小川　鼎三
原著として本号に掲載
二　古川柳からみた医学　山路　閑古
（当日配布された資料をここに転載する。）

古川柳より見たる医学史
昭和四十七年一月二十九日講演要旨
講師　山路閑古　共立女子大学教授
著書「古川柳」（岩波新書）「古川柳名句選」（筑摩叢書）

解説古句出典略号一覧

（六・27）　誹風柳多留六篇二七丁
（安四礼2）　川柳評万句合、安永四年、相印礼二枚目
（宝八・九・五）　川柳評万句合宝暦八年、九月五日披
（拾六・11）　誹風柳多留拾遺六篇十一丁
（末一・22）　誹風末摘花初篇二十二丁

医学各科

本道（内科）

明五　(1)外科の子の本道になる臆病さ（六・27）
宝十二(2)薬箱初に持たせてふり返り（一・40）
安二　(3)ぎざ〳〵のある襟で持つ薬箱（十一・39）
安元　(4)容体を十分聞くと膝を立て（十・40）
安四　(5)襟へ首法眼の目のつけどころ（安四礼2）
宝八　(6)御簾越の脈は病の綱渡り（宝八・九・五）
明八　(7)代脈は若党で来た男なり（八・33）
寛九以前　(8)舟宿へ来て狼も医者に化け（拾六・11）
宝十二(9)脇差を戻せば茶屋はかのを出し（拾八・18）（一・23）
明四　(10)中宿の内儀おどけて脈を見せ（拾七・3）

外料（外科）

宝十二(11)外料を祭のなりで呼びに行き（一・33）
安元　(12)痛いことないと外科殿針を出し（十・17）
天二　(13)そいで取りますと外科殿平気なり（一七・40）
宝十二(14)外科殿の豚は死身で飼はれて居（一・42）

小児医者（小児科）

宝十三(15)小児医者がら〳〵などをふって見せ（宝十三礼2）

明五(16)小児医者赤い紙燭でおくられる（六・7）

寛九以前(17)小児家は虎の脈など取って見る（拾十・22）

目医者（眼科）

宝十一(18)馬島での近付きならばうろ覚え（一・16）

女医者（産婦人科）

安六(19)外科でなし本道でなし不埒なり（安六満1）

明五(20)仲条の静かに暮すおそろしさ（六・20）

明八(21)股倉へ首ごと這入る女医者（末一・22）

安五(22)見せた外科見ると内儀は逃げるなり（一四・7）（末二・10）

御薬園（施療機関）

明六(23)藪医者へ断りいうて御薬園（七・4）

附（時間が余れば）

雨譚註による古川柳研究の例。

小山玄良、雨譚、明和八年より寛政元年までの川柳評万句合の難解句に加註。

眼　科

大丸のけつに大きな目薬屋（天八満2）（二三・25）

雨註　くきの目薬あり

葉桜になって行かうと目をゑどり（安四仁2）

雨註　目病み

役者程ゑどって久喜の玄関にゐ（明三梅3）（拾十・27）

雨註　無し

産婦人科

町内のうちで踊子おろすなり（安七天1）（一五・38）

雨註　橘丁、吉田正琳

食べる程近所であると腰瓦（安九梅2）

雨註　吉田正琳

昭和四十六年度医史学関係文献目録（一）

日本医史学会関西支部

医譚　復刊第43号

幕末の医学教育―「日習医案」に就いて　青木一郎　3～9

ジゲリストからの書翰　津田　安　10～15

ジゲリスト解説　阿知波五郎　16～19

小石元俊の医案　中野　操　20～21

医学史研究　36号　　医学史研究会発行

60年代における保健と医療―要望課題報告の総括―

編集委員会　二七一～二七三

60年代の看護制度―准看護婦制度を視点として―

志摩千代江　二七五～二七九

一九六〇年代における看護教育制度をめぐる論争について―主として日本看護協会の運動を中心として―

木下安子　二八〇～二八三

わが国薬剤師の職業的確立をめぐる二、三の問題　宗田　一　二八四～二八七
異形式抜歯鉗子の歯学史的研究—わが国の鉗・鉈鉗・鉄鉗といわれる抜子鉗子について—　杉本茂春　二八八～二九一
労働組合期成会鉄工組合の救済活動（その一）—日本社会医療史研究(一)　北原龍二　二九二～二九九
室蘭地方の医学史—御用医師野村周甫のことなど　松木明知　三〇〇～三〇二
フランシス・ベーコンの保健思想　汲田克夫　三〇八～三〇六
医療経済学史ノート（その二）　野村　拓　三〇七～三一二
田沢鐐二先生の想い出　田中助一　三一三～三一四

医学のあゆみ　医歯薬出版株式会社発刊

わが国における社会医学百年の歴史　曽田長宗　76巻1号　四三—四八　76巻2号　一〇九—一一三
古典ギリシャにおける生化学思想—ギリシャ本土とその周辺(3)　木村雄吉　76巻4号　二二〇—二二五　76巻6号　五二〇—五二五
来日宣教医の位置と性格　長門谷洋治　76巻6号　五一四—五一九
H・W・マグーン教授の叙勲を祝つて　河村洋二郎　77巻4号　二二六—二二七
近世イタリア医学の人々　斎藤純夫　73巻4号　一九六—一九八
医学史正誤帖—杉田玄白親筆の蘭学事始はなかつた　緒方富雄　73巻4号　一九九
健康の思想—合理主義と健康の価値—プラトンの場合　中川米造　77巻11号　六四七—六五〇
本川学長の追憶　本川弘一君を偲ぶ　若林　勲　78巻1号　37～40
本川生理学について　田崎京二　78巻1号　四一—四五
健康と思想—目的論と中庸—アリストテレスの場合　中川米造　78巻2号　九八—一〇二
医学とは何か　三木　栄　78巻3号　一五四—一五七
小金井良精　小川鼎三　78巻3号　一五七
健康の思想—調理と生理のアナロギー　中川米造　78巻7号　四九五—四九八
モルヒネの発見とその近代薬物史への寄与　宗田　一　78巻10号　六五一—六五六　78巻12号　七七一—七七六
健康の思想—素朴唯物論と死—　中川米造　78巻11号　七一三—七一六
健康の思想—キリスト教と医学　中川米造　79巻2号
健康の思想—中国医学の思想的背景　中川米造　79巻7号　四四一—四四五
インド伝承医学への私の遍歴　丸山　博　79巻8号　四九七—五〇一
自然哲学的生命観—意識と生命　千谷七郎　79巻10号　六〇五—六〇九

健康の思想―インドの宗教と医学　中川米造　79巻11号　六五三―六五六

Dr. Best とその周辺―インスリン発見五〇周年によせて　仁木厚他　79巻13号　七五一―七五四

漢方の臨床

東亜医学協会発行

昭和四十五年度漢方医界年表　矢数道明　18巻2号　一〇六―一一〇

華岡青洲の学説と東洋古代の麻酔薬　高橋道史　18巻2号　一一七―一一九

本居宣長の一面　高橋道史　18巻3号　一七八―一七九

日本における傷寒論の受容―日本漢方の特質―　大塚敬節　18巻4・5号　七―十七

金匱要略の特質とその読み方　細野史郎　18巻4・5号　十八―三一

「傷寒論」と「金匱要略」の特質について　荒木正胤　18巻4・5号　三二―四四

傷寒論の特質・治療方針並びに診療の実際　藤平　健　18巻4・5号　四五―七三

傷寒論の特質と治療方針及びその診療の実際について　相見三郎　18巻4・5号　七四―八四

後世派医学（金元李朱医学）の特質について　矢数道明　18巻4・5号　八五―一一四

「千金要方」について　大塚恭男　18巻4・5号　一一五―一二八

折衷派の本質とその立場　山田光胤　18巻4・5号　一二九―一三八

中国本草の史的展望　岡西為人　18巻4・5号　一三九―一七四

本草の「苗」について　宮下三郎　18巻4・5号　一七五―一七八

東洋医学の特質について―特に神農本草経及び扁鵲伝を中心として―　和田正系　18巻4・5号　一七九―一九二

針灸の史的展望　代田文誌　18巻4・5号　一九三―二一四

古典再検討の必要に思う　柴崎保三　18巻4・5号　二一五―二三七

日本の医療と漢方　伊藤清夫　18巻4・5号　二八〇―二八六

脈診について　小椋道益　18巻4・5号　二九七―三一九

神農本草経は薬医学である　高橋良忠　18巻6・7号　六四九―六七二

アメリカ国立図書館の東洋医学蔵書目録　18巻9号　八三〇―八三六

「東医宝鑑」祕史　韓賛奭　18巻10号　九二〇―九二一

日本医師会雑誌

日本医師会発行

日本医学会総会よもやま　65巻5号　六四三―六五二

病院の歴史　65巻11号　一四四五―一四四六

日本における社会保険の将来　武見太郎　66巻5号　五一五―五一七
医学の理想　武見太郎　66巻5号　五一八―五二〇
病院の起原とその史的考察　大鳥蘭三郎　66巻7号　七五五―七六一
診療科目の国際比較―明日の日本の医療を考える―　浅山　健　66巻7号　七六二―七六九

日本医事新報

日本医事新報社発行

国崎定洞を読んで　小田俊郎　二四三九号　67
音づれ(四)―父の外遊日記から―　大滝紀雄　二四四一号　69～70　二四四三号　72～74　二四四四号　71～73　二四四五号　71～72　二四四六号　72～74
徳川医業三百年の遺産　布施昌一　二四四三号　67～69　二四四四号　66～68　二四四五号　66～68　二四四六号　67～69　二四四七号　71～73
漱石と松岡譲　松本健次郎　二四四五号　61～63
坪井信道の一書翰　青木一郎　二四四五号　63～65
医事に関係ある名将の言行　朝比奈泰雄　二四四五号　72～74
兵部の狂気と甲斐の乱刃　王丸　勇　二四四六号　63～66　二四四七号　66～70
ヒポクラテス像　高橋　功　二四四八号　74
「上医は国を医す」の原典　矢数道明　二四四九号　136
滝沢馬琴の眼疾　村田正夫　二四五〇号　67～69
ジャン・コクトオの阿片中毒　松井好夫　二四五二号　63～65
眼科臨床医報の歩み　三国政吉　二四五二号　66～68　二四五三号　66～68　二四五四号　73～74　二四五五号　67～69　二四五六号　68～69　二四五七号　68～70　二四五八号　73～74
眼耳鼻舌身意（塙　保己一の墓）　安村太郎　二四五四号　63～66
古在由直先生　高村庄太郎　一四五四号　69
漱石と鈴木大拙　松本健次郎　二四五六号　63～65
医聖ヒッポクラテースに関する二、三の疑問　鈴木安恒　二四五六号　66～67
医師としての森鷗外　伊達一郎　二四五八号　61～65　二四七三号　63～67
豊臣秀吉の女狩と荒療治　王丸勇　二四六一号　65～68
「日本におけるヒポクラテス賛美」補遺　緒方富雄　二四六二号　63～66　二四六五号　67～69　二四六五号　67～69　二四七九号　47～49　二四八〇号　67～68
香玉宛ての華山絵手紙土蔵より再発見のこと　折茂六郎　二四六二号　66～67
稲田龍吉先生と直弟子　二四六二号　68～71
橋本宗吉と竹原　阪田泰正　二四六二号　70～71
海馬 Hippocampus の語源　小川鼎三　二四六二号　136
Pneuma についての参考文献　大島蘭三郎　二四六二号　136
チャラカの誓い　松木明知　二四六三号　69～70
偉大なる大森治豊先生　宇留野勝弥　二四六四号　74

狂気の版画家メリヨン　松井好夫　二四六四号　63～66
漱石と良寛　松本健次郎　二四六八号　63～65
音づれ（補遺）　大滝紀雄　二四六八号　74
フランスの医学教育と医師づくりに思う　日野原　正　二四六八号　87～89
ヘミングウエイと三島由紀夫　伊東高麓夫　二四七〇号　63～66
種痘ウィルス・微研池田株の思い出　池田武夫　二四七〇号　67～68
徳川家康の好学と誤診　王丸　勇　二四七一号　43～46
馬賊と軍医　米津和幸　二四七五号　74
曲直瀬玄朔が後陽成天皇に灸治をした始末記　矢数道明　二四七七号　61～63
朮について　清水藤太郎　二四七七号　145
漱石とパトグラフィー　松本健次郎　二四七八号　63～65
井上達也小伝　井上正澄　二四七八号　73～74
蔵志と解体新書の差をめぐつて　布施昌一　二四七九号　43～46　二四八〇号　69～71　二四八一号　65～67
パラケルズス復興　伊東昇太　二四七九号　50～51
福島正則の剛勇と酒乱　王丸　勇　二四八〇号　63～66
仙台医専時代の魯迅　飯野太郎　二四八〇号　72～73
鷗外ある冬の日の感懐　小篠速雄　二四八〇号　74
ベルツと大森先生の写真　宇留野勝弥　二四八三号　65～
安藤昌益における産科学思想　友吉唯矢　二四八三　68～69
阪田氏の「橋本宗吉と竹原」を駁す　中野　操　二四八三号　70～72
柏原学而伝　土屋重朗　二四八四号　61～63　二四八六号　46～48
日本の大学における最初の日本人眼科教授の選定　三国政吉　二四八四号　64～66
陸軍病院　岸田壮一　二四八四号　71～74
漱石と大塚保治夫妻　松本健次郎　二四八五号　63～66号
大阪医学校と教師エルメレンス　中野　操　137～138
淀君の勝気とヒステリイ　王丸　勇　二四八六号　43～45
私の軍歴　寺木　忠　二四八六号　49～50
上顎癌を思わせる徒然草の記載　鈴木安恒　二四八七号　45～47
医史学会　阿知波五郎　二四五七号　45～48
公開講演　大塚恭男　二四五七号　48～49

日本医事新報　ジュニア版　日本医事新報社発行

近世医学史から—近代病理学の発展—　大鳥蘭三郎　九九号　22～23　一〇〇号　20～21　一〇一号　16～17
近世医学史から—眼科学の勃興と発展　大鳥蘭三郎　一〇三号　17～18　一〇四号　17～18　一〇五号　17～18　一〇七号　13～14　一〇八号　19～20

日本東洋医学会誌　日本東洋医学会発行

漢蘭折衷派と解剖学　小川鼎三　22巻2号　1～3

東洋医学用語の研究（その二）募穴の意義について　柴崎保三
22巻1号　17～21

日本歴史　日本歴史学会編集　吉川弘文館発行

ケンペルとシーボルトの故地を訪ねて　沼田次郎　二七四巻
66～75
紅雪という薬　李家正文　二七五号　43～44
曲直瀬道三に関する疑問点　服部敏良　二七五号　44～47
杉田玄白と海外情報　片桐一男　二七二号　69～76

労働科学　労働科学研究所発行

当研究所に所蔵するゲッチンゲン医書文庫について（その13）
高木和男　47巻6号　三三九―三四七

蘭学資料研究会研究報告　蘭学資料研究会発刊

宇田川榕庵の植学啓原(1)　矢部一郎　二四二号　1～8
オランダ正月の盛行　片桐一男　二四二号　9～14
芝蘭堂新元会の西洋人の画像　緒方富雄　二四二号　15～17
種痘法の伝来とお玉ケ池種痘所　小川鼎三　二四三号　1～6
伊東玄朴の人に交友　緒方富雄　二四三号　7～11
戸塚家の人々―文海・静甫、柳溪・積斎　戸塚芳男　二四四号
10～16
「魯西亜牛痘全書」の書誌学的研究(3)―狩野本「遁花秘訳」について―　松木明知　二四三号　19～23
足立左内について　上原　久　二四五号　1～8
小森玄良関係資料（一）　山本四郎　二四五号　15～28
阿蘭陀通詞西雅九郎（荒井庄十郎＝森平右17）補遺　片桐一男
二四七号　1～11
ヒポクラテス画像・賛　研究補遺　緒方富雄　二四七号　13～15
川本幸民の理化学書　宗田　一　二四八号　1～4
日本学士院蔵川本幸民関係資料　片桐一男　二四八号　5～10
川本幸民と蘭学者たち　緒方富雄　二四八号　15～24
明治初期の津軽における罌粟の栽培―日本における罌粟の栽培歴史に関連して―　松木明知　二四九号　15～18
幕末明治初期の病院建築小考　菊池重郎　二五一号　3～6
解体新書を原本と比較して　酒井シヅ　二五一号　6～8
杉田玄白研究補遺　中山　沃　二五一号　8～11
ヒポクラテス画像・賛　研究補遺（その後）　緒方富雄　二五一号　13～17
宇田川榕庵と自然発生説　矢部一郎　二五一号　17～19
山口県三田尻、華浦医学校蔵書目録追補―とくに書誌学からみた蘭学よりドイツ医学への推移―　阿知波五郎　二五一号　26～29
堀内文書に見えるオランダ語について　大鳥蘭三郎　二五一号
29～30
ツューンベリー研究資料補遺　岩生成一　二五一号　30～32
幕末洋学の性格について　田崎哲郎　二五一号　35～36
「毛利藩の蘭学」補遺　田中助一　二五一号　36

衛戍病院という名称について　菊池重郎　二五二号　1～4
適塾門下生大国明二郎について　茅原　弘　二五二号　22～24
宇田川榕庵の植学独語　矢部一郎　二五三号　1～9
坪井信道塾の塾生でつくった2つの医薬品辞典　緒方富雄　二五三号　17～28
オランダ医学切手　古川　明　二五三号　29～38

新刊紹介

森下薫著「ある医学史の周辺」

本書の副題に「風土病を追う人と事蹟の発掘」とある。著者がそのまえがきに書いているように、著者の専門とする寄生虫とその関連領域の微生物による風土病の研究史の周辺に滲みでてくる人間性、ひたむきな熱意、それに研究に協力した人々の美しい気持にひかれて、この一冊の本を作られた。それで「ある医学史の周辺」と題されたが、この内容は著者の専門的知識と労を惜しまぬ資料集めによって立派な風土病研究史となっている。

明治・大正時代の医学雑誌をみれば、日本住血吸虫、肝臓ジストーマ虫、恙虫などの文字がいたるところに目につき、それらの研究に研究者同志の壮烈な闘争心があったのではないだろうかと想像させるものがある。今、ここに一冊の本にまとめられたので、その全貌を知ることができた。また、明治以後のまだ貧弱な医学史の研究に肉附けをしてくれる本でもある。

近年、病理学にしろ、内科の講義にしろ癌が最も華やかなものである。しかし、一時代前までは寄生虫病、わけの解らぬ風土病の解明が脚光をあびたのだろう。この本の中には患者の苦しみから、研究者のひたむきな熱意、その結果、次々に虫体を発見し、その生活環を発見し、予防対策のとられるところまでも記されている。それらの風土病の名と共に、その業績にかかわった多くの人たちが忘れ去られようとしている時に著者はゆかりある地を訪れ、記録されずにあったできごとも発掘し、珍しい写真と共に、一冊の本としたのであった。また、周知の事実となっていたことも、著者の探索の結果、事実は異っていたこともある。野口英世の死んだ病院がそれである。それだけに資料としても価値の高い本である。著者はこの一冊の本で終りでない。続いて探索中であると述べている。続篇のでる日が待たれる。

（A5版　三五四頁　日本新薬株式会社発行　定価千円）（S）

日本医史学会々則

第一条　本会は日本医史学会と称する。

第二条　本会は医史を研究しその普及をはかることを目的とする。

第三条　本会は前条の目的を達成するため、次の事業を行なう。

一、年一回、総会を開く。

二、本会の機関誌として『日本医史学雑誌』を発行し、これを会員にわかつ。

三、随時、地方会、例会を開き、研究発表、展観などを行なう。

四、日本の医史学界を代表して内外関係学術団体との連絡協力をはかる。

五、その他の事業。

第四条　本会の主旨に賛成しその目的達成に協力しようとするものは、理事または評議員の紹介を経て会員となることができる。

第五条　会員は会費として年額二〇〇〇円を前納する。ただし外国に居住する会員は年額一〇ドルとする。

会員は研究発表および本会の事業に参加することができる。

本会に名誉会員と賛助（維持）会員をおくことができる。名誉会員は本会の事業に多大の貢献した者を評議員会の議をへて推せんする。賛助会員は本会の趣旨に賛同し、年額一万円以上を収める者とし評議員会の議をへて推せんする。

第六条　本会に次の役員をおく。

一、役員は理事長、会長、理事、監事、幹事とする。

二、理事長は一名とし理事会で互選し本学会を代表する。

三、会長は年一回の総会を主催し、その任期は総会終了の日までとする。

会長は理事会の推せんにより理事長が委嘱する。

四、理事は若干名とし、理事長を補佐し会務の遂行にあたる。

理事、監事は評議員の中より評議員会の推せんにより理事長が委嘱する。

五、本会の実務を処理するため、常任理事二名、幹事若干名をおく。常任理事は理事より、幹事は

会員より理事長が任命する。

六、役員の任期は二年とし重任を妨げない。（ただし会長を除く）

以上の役員は総会の承認を得るものとする。

第七条　評議員は若干名とし、普通会員の中より理事会の推薦により総会で決める。

評議員会は本会の重要な事項を議決する。任期は役員に準ずる。

第八条　本会の事務所は順天堂大学医学部医史学研究室内（東京都文京区本郷二の一の一）に置く。

第九条　本会は理事長の承認により支部または地方会を設けることができる。

第十条　会則の変更は総会の承諾を要する。

『日本医史学雑誌』投稿規定

発行期日　年四回（三月、六月、九月、十二月）末日とする。

投稿資格　原則として本会々員に限る。

原稿形式　原稿は他雑誌に未発表のものに限る。和文の表題、著者名のつぎに欧文表題、ローマ字著者名を記し、本文の終りに欧文抄録を添えること。

原稿は二百字または四百字詰原稿用紙に縦書きのこと。

原稿の取捨選択、掲載順序は編集委員が行なう。また編集の都合により加除補正することもある。

原稿枚数　表題、著者名、本文（表、図版等を除く）で五印刷ページ（四百字原稿用紙で大体十二枚）までは無料とし、それを越えた分は実費を著者の負担とする。但し欧文原著においては三印刷ページまでを無料とする。図表の製版代は実費を徴収する。

校　正　原著については初校を著者校正とし、二校以後は編集部にて行なう。

別　刷　投稿者には論文掲載紙を五部無料贈呈する。別刷希望者には五十部単位で実費にて作成する。

原稿送り先　東京都文京区本郷二丁目一の一　順天堂大学医学部医史学研究室内　日本医史学会

編集委員　大島蘭三郎（委員長）　石原　明　杉田暉道　大塚恭男　酒井シヅ　沢井貫太郎

日本医史学会役員氏名（五十音順）

理事長　小川　鼎三
会　長　山形　敞一
常任理事　石原　明　大鳥蘭三郎
会計監事　宗田　一
理　事
赤松　金芳　阿知波五郎　石川　光昭
今田　見信　内山　孝一　大久保利謙
大塚　敬節　大矢　全節　緒方　富雄
岡西　為人　蒲原　宏　佐藤　美実
杉　靖三郎　鈴木　正夫　鈴木　勝
宗田　一　竹内　薫兵　津崎　孝道
戸苅近太郎　中野　操　三木　栄
矢数　道明　吉岡　博人　和田　正系
幹　事
大塚　恭男　酒井　シヅ　沢井貫太郎
杉田　暉道　谷津　三雄
酒井　シヅ　佐藤　美実　清水藤太郎
杉　靖三郎　杉田　暉道　鈴木　正夫
鈴木　勝　鈴木　宜民　宗田　一
高木圭二郎　高山　担三　竹内　薫兵
田中　助一　津崎　孝道　津田　進三
戸苅近太郎　中泉　行正　中川　米造
中沢　修　中西　啓　中山　沃
長門谷洋治　中野　操　服部　敏良
福島　義一　藤野恒三郎　丸山　博
松木　明知　三浦　豊彦　三木　栄
三廻　俊一　森　優　谷津　三雄
山形　敞一　矢数　道明　山下　喜明
山田　平太　吉岡　博人　和田　正系
以上

日本医史学会評議員氏名（五十音順）

赤松　金芳　安芸　基雄　阿知波五郎
石原　明　石田　憲吾　石川　光昭
今市　正義　今田　見信　岩治　勇一
内山　孝一　大鳥蘭三郎　大塚　敬節
大塚　恭男　王丸　勇　大矢　全節
緒方　富雄　小川　鼎三　岡西　為人
片桐　一男　川島　恂二　蒲原　宏
金城　清松　久志本常孝　榊原悠紀田郎

編集後記

この号から金原出版の好意により、印刷の雑務を引き受けていただいた。今回は文部省科学研究費を受けた堀内文書の研究を特集した。しかし、内容の豊富な文書は多くのことを物語り、これにとどまらず、次々と原著となってでてくる筈である。また、最近は投稿もふえ、今年中に四号まで出す見通しが立っているのは心強い。科学古関係の定期刊行物で定期的にでているものが少いだけに頑張らなければと思っている。

（S・S）

昭和四十七年三月二十五日　印刷
昭和四十七年三月三十一日　発行
日本医史学雑誌
第十八巻　一号
編集者代表　大　鳥　蘭　三　郎
発　行　者　日本医史学会
代表　小　川　鼎　三
〒二三　東京都文京区本郷二-二-一
順天堂大学医学部医史学研究室内
振替　東京　一五二五〇番
製作協力者　金原出版株式会社
医学文化保存事業部
〒二三　東京都文京区湯島二-三-一四
印　刷　者　五協印刷有限会社
〒一二四　東京都板橋区南常盤台一-二-三

上田三平編　三浦三郎編

増補改訂 日本薬園史の研究

図版43　挿図113　附図3　A5判　五〇〇頁　上製ケース入

六月三十日まで 予約特価四〇〇〇 〒一四〇　定価 四五〇〇

わが国の文化史上、特異の存在である薬園史の研究は、上田三平氏により始めて体系づけられた。再刊に際し長年にわたり日本薬史学会の諸氏が踏査研究した論文や、わが国の伝統殖産に定着していた薬種生産と加工調整法に関する新資料を紹介し、内容全体に本草学的な検討を加え、同物異名の関係も索引に掲げて利用の便に供した。

緒言　江戸時代以前の薬園　江戸時代の薬園総説　幕府の薬園　諸藩の薬園　特殊の薬園　前記以外の薬園　（上田三平）

浜庭薬園考　（安藤菊二）

駿府御薬園と久能山御薬園　（斎藤幸男）

尾張藩の薬園　（水野瑞男）

会津御薬園　須賀川牡丹園　（川上義男）

旧高松藩の栗林薬園　（竹内弔夫）

内野御預地御薬園旧記　（岡西為人）

野州日光の薬用人参史　信州薬用人参と神津家　江戸時代の甘草栽培史　（伊沢一男）

殖産略説　産業漫筆—江戸紫　（三浦三郎）

解説

主要年表　上田三平年譜　旧版に用いられている資料の一部　件名索引

植物名索引

渡辺書店　東京都文京区本郷1－14－4　電話(814) 9739・振替東京25036

〈日本医事新報別刷集シリーズ〉

4 カラーアトラス 皮膚疾患100例〈改訂第2版〉

B 5判　107頁
カラー写真 103葉
定　価　1,800円
送　料　共

千葉大学名誉教授　**竹内　勝著**

日常頻繁にみられる代表的な皮膚疾患約 100例を大判カラー写真によって紹介し、疾患毎に症状、治療法、鑑別のポイントを解説するとともに局所療法を加えたもの。

5 カラーグラフ 外来における簡易検査

順天堂大学教授　**小酒井　望**・同助教授　**林　康之 共著**

B 5判　64頁
カラー写真 124葉
定　価　1,200円
送　料　110円

病態の把握に、正しい治療方針の決定に、臨床検査は今や日常診療上欠くことのできない情報源。外来において最も頻繁に行なわれる尿、血液、便の簡易定性検査を簡潔に要領よく、美麗なカラー写真126葉をもって構成・解説した本書は、他に類をみない“絵でみる臨床検査”の決定版です。実地医家、医学生各位の座右において診療内容の向上、知識の整理にお役立て下さい。

6 カラーアトラス 直腸鏡のみかた

東邦大学教授　**小平　正著**

B 5判　26頁
カラー写真　85葉
定　価　500円
送　料　70円

直腸疾患の増加が注目されています。この時に当り外来診察の実際、器具の操作など直腸鏡使用法の基本からポリープ、ポリポージス、潰瘍性大腸炎、直腸癌など直腸主要病変所見を、病理組織像、摘出標本と対比しながら鮮明カラー写真85葉を中心に解説した本書は、内科、外科、産婦人科臨床医家の必携書と確信します。

日本医事新報社　〒101−91 東京都千代田区神田駿河台 2−9
電話（292）1551（大代表）・振替東京25171

A Chronological History of the Horiuchi Documents

—from 17 12 to 1864—

by Shizu Sakai

This paper is an attempt to bring together in chronological order more or less significant matters chiefly of the Yonezawa Clan for the use of researchers on the Horiuchi documents.

The hereditary court physicians of the Yonezawa clan came from the Horiuchi family. The materials of this description were taken from records of the Yonezawa Clan and from biographies of the Horiuchi family.

The chronology of this paper begins in the year 1712, when Horinouchi Chutetsu succeeded to his father's estate and ends in the year 1864, when Horinouchi Chuteki, the sixth generation after Chutetsu and the last physician of his family in the Edo era, died.

added his own opinions concerning the problems asked.

Horinouchi Tadahiro translated a Dutch textbook originally written in German by Hufeland into Japanese and published it as "Yoyo-Seigi" in 1843. This became famous as the first printed book in Japan of Western pediatrics.

A Study on the Medical Practice in the Latter Half of the Tokugawa Period with Reference to the "Horiuchi Documents" (I)

by Yasuo Otsuka

Horiuchi Chui (?-1811) was an excellent clinician and a successful teacher of medicine. One of his teachings delivered to his pupils in 1800 reveals a clear influence of Yoshimasu Todo upon his thought as a medical practitioner. But he was not satisfied with the methods of Chinese traditional medicine alone and sought acquaintance with some pioneering physicians of the Dutch school of medicine such as Sugita Genpaku, Otsuki Gentaku and others. The author presents some letters between Horiuchi Chui and the above-mentioned famous physicians to show how they thought about medicine and how they treated patients practically. One of the cardinal differences between scholars of the Dutch school of medicine in the 18th century and those in the 19th century lies in that those of the former pariod had sufficient knowledge and understanding of Chinese traditional medicine. At the same time they did fundamental research in connection with the introduction of Western medicine. For instance, they tried to find available substitute materials of some Western drugs such as Terebinthina because of the shortage of imports, and made clinical experiments with them. Such efforts led to the popularity of the Dutch school of medicine in the 19th century.

terminology of that time.

The letter addressed to Horiuchi Tadayoshi from Takeuchi Gendo (Document number 186), for example, arouses the interest of the reader. It is amusing to note that Takeuchi Gendo used Dutch words for very confidencial or private matters. This is even more interesting when we consider that this idea of using foreign words to discuss private matters in public is common practice in present times.

Horinouchi, the attending doctors to the Rulers of the Yonezawa Clan

by Junichi Horiuchi

This is an article concerning the author's ancestors Horinouchi that served as the attending doctors for the old Uesugi Family who had governed the Yonezawa district for over 250 years until the Meiji Government was established in Japan in 1868.

While the Horinouchi family had been working for generations as "Samurai" belonging to the lord Uesugi before 1712, the fifth generation descendant of the first Horinouchi learned medicine and he was appointed a physician for the Yonezawa Clan. About the end of 18th century, Uesugi Yozan, known as a wise and practical ruler, recommended his doctors to introduce European medicine into the province. Therefore, several doctors of the clan including Horinouchi Tadaaki studied in Edo (Tokyo) and learned Western medicine from the then leading and famous scholar, Sugita Genpaku. He later spread its development in his province by educating his pupils after coming back to Yonezawa. His policy and principles of the method of educating his pupils were strict and severe not only in the science but also in human relationship and morality.

At present, we can read several old letters adressed to the teacher, Sugita, written by Horinouchi, in which the latter asked clinical diagnosis and treatment methods for the Ruler's disease. It is quite interesting, that some letters were sent back to Horinouchi after Sugita

composed of Chinese characters; one expressed punishment from the heavenly God, while on the other hand he says he felt easy-minded, rather freedom from heavy burdens. No pessimism is expressed in the letter.

The letter of 1808, dated "night of the 28th, August", is very long. It is a scroll of Japanese letter-paper, measuring 370 cm in length. Sugita, then 76 years old, mentions in this letter among others his own diagnosis of Uesugi Yōzan's disease of the knee joint based on the humoral pathology of the Western medicine. But this diagnosis was made only by reading a letter sent by Horiuchi from Yonezawa, not by his own examination of the patient. Therefore, he states with quite reasonable reservation, that nothing definite can be said on the correctness of his diagnosis under such conditions, and the following sentence is very impressive and important, that "besides, even if he could often examine the patient directly, he would not be able to diagnose it correctly." Here appear very evidently the true scientific spirit and conscience of Sugita Genpaku.

Dutch Vocabulary seen in the Horiuchi Documents

by Ranzaburo Ohtori

Most of the "Horiuchi Documents" are found to be letters of Dutch learning scholars. These letters were of course written in Japanese; however, Dutch words written in Japanese Kana frequently appear in them. In other words, among most of the letters written by scholars in the "Horiuchi Documents", many Dutch terms are found in Japanese Kana. This is material evidence that the scholars of those days used Dutch words in their daily life.

The fact that most of the names of medicine in those letters appear in Kana, transliterated from the original Dutch pronunciation, indicates that those Dutch scholars in Japan were familiar with Dutch medical

Summary

Lives and Thoughts of some of the Japanese scholars of Dutch learning, as seen from the Horiuchi documents

(Part I. Letters of Sugita Genpaku)

by

Teizo Ogawa

These past two years, since the fiscal year 1969, we six - T. Ogawa, R.Ohtori, J. Horiuchi, K. Katagiri, Y.Otsuka, S.Sakai - forming a research group have endeavoured to study the so-called Horiuchi documents, which consist chiefly of about 300 old hand-written letters belonging to the latter half of the Tokugawa period. Our work has proceeded, with financial aid from the Ministry of Education, and at present about halfway finished, but still far from the goal.

In the present article the author comments upon a few letters of Sugita Genpaku sent to his former pupil Horiuchi Tadaaki (Chūi), who was living in his native place, Yonezawa, as an attending physician to the very famous lord of the clan, Uesugi Yōzan. The author considers in this paper five letters of Sugita. None of them has mention of the year, but the author estimates from the contents, that they belong very probably to the years 1793, 1797, 1804, 1808, 1810, respectively.

In the letter of 1797, dated Dec. 12 th, Sugita reports, that his house was nearly completely burned down by the great fire in Edo on the 20th, Nov. of that year. But Dutch books, which he had collected and stored in a fire-proof warehouse, certainly his utmost treasure, were fortunately all safe. And it is interesting to know what Sugita, then 65 years old, thought on the great loss of his family's possessions.

He expressed two different ways of thinking, by writng two poems

beträchtliche Fortschritt der japanischen Medizin stattgefunden hat. Zugleich müssen wir dem sehr guten und immer freuudlichen Lehrer der Medizin, dem deutschen Land, herzlichsten Dank aussprechen.

So sahen wir, wie gut und freundlich deutsche Mediziner während der langen Zeitdauer von drei hundert Jahren, besonders dicht und innig in den letzten ein hundert Jahren uns geführt haben.

(Anschrift des Verfassers : Medizin-historiches Institut, Juntendo Universität, Hongo 2-1-1, Tokyo.)

erste Lehrer der Anatomie kam Wilhelm Doenitz im Jahre 1873, dann als zweiter Hans Gierke 1877, und zuletzt Joseph Disse 1880. Als Physiolog hatten wir Ernst Tiegel während der Zeitdauer von 1876 bis 1883. Tiegel war ein Schüler von F. L. Goltz von Strassburg.

Andererseits, gingen viele junge japanische Ärzte nach Deutschland, um Medizin zu studieren. Die Pioniere waren Sankei Hagiwara und Susumu Sato. Jener fuhr 1868, dieser 1869 ab, um in Berlin Medizin zu studieren. Im Jahre 1870, d. i. vor dem Ankommen von Müller und Hoffmann in Tokyo schickte die japanische Regierung etwa 10 Ärzte zu demselben Zweck nach Deutschland.

Später wurde es Regel oder Routine, dass junge japanische Ärzte nach Graduierung aus japanischen medizinischen Schulen nach Europa, meistenfalls nach Deutschland und Österreich, gingen, um im einzelnen speziellen Gebiete der Medizin tiefer ausgebildet zu werden. Bei Rückkehr nahmen gewisse von ihnen den Sitz des Professors, den bis dahin deutsche Ärzte besetzt hatten.

Im Jahresbuch 1877 der Tokyo Universität sieht man die Namen von 11 deutschen Professoren in der medizinischen Fakultät, dann im Jahresbuch 1882 gibt es in ganzen 7 fremde Professoren, und zwar aus Deutschland 5, Österreich 1, Holland 1. Seit dem Jahre 1886 (in diesem Jahr wurde die Tokyo Universität als Kaiserliche Universität zuerst genannt) blieben vielleicht nur zwei Deutsche, Baelz und Scriba, auf dem Professorsitz der medizinische Fakultät übrig. Nach dem letzten Abschied von Baelz 1902 hatten wir keinen deutschen formellen Professor in irgendeiner japanischen Schule. Nur temporär gab es und gibt es deutsche oder andere europäische sowie amerikanische Doktoren, die über bestimmte Themen für japanische Studenten und Ärzte Vorlesungen hielten oder halten.

Ein gewisser Teil der jungen japanischen Ärzte studierten oder forschten sehr fleissig in Deutschland oder in anderen Ländern, oft mit glänzendem Erfolg, z. B. Shibasaburo Kitasato im Kochschen Institut, Sahachiro Hata im Ehrlichschen Institut usw. Ein etwas komischer Satz "Japanischer Fleiss" war im Auslande geboren. Mit diesem Satz war etwas mit Scherz die ungemeine Fleissigkeit der Japaner gemeint. Aber wir haben diesem "Japanischen Fleiss" zu verdanken, dass der

mester), wurde errichtet, nach dem Typus der deutschen medizinischen Fakultät. Müller legte somit die Basis zum jetzigen medizinischen Unterricht in Japan. Seinem Plan folgend, musste die japanische Regierung viele deutsche Lehrer nacheinander aus ihrem Vaterland rufen, um die medizinische Erziehung möglichst gut auszuführen. Auf der Seite der Studenten wurde Gewicht auf die Erlernung der deutschen Sprache und auch des Lateins gelegt.

Müller-Hoffmannsche Verdienste an Japan sind also sehr gross. Müller veröffentlichte seine Erinnerungen, nach der Rückkehr in sein Vaterland, in der Zeitschrift "Deutsche Rundschau" Bd. 57, 1888 unter dem Titel "Tokyo-Igaku". Der Nebentitel heisst "Skizzen und Erinnerungen aus der Zeit des geistigen Umschwungs in Japan, 1871-1876". Der Inhalt ist für uns sehr interessant. Müller und Hoffmann mussten sehr viele Schwierigkeiten erobern. Im Hongô-campus der Tokyo Universität steht heute die Statue Müllers in der preussischen militärärztlichen Uniform. Er trägt den Helm mit der Spitze. Diese Statue wurde 1895 errichtet, zwei Jahre später nach Müllers Tode in Deutschland; er war in Mainz 1824 geboren.

Als Nachfolger von Müller und Hoffmann kamen Wernich, Internist, und Schultze, Chirurg, 1874 nach Tokyo; ihre Nachfolger waren Erwin Baelz und Julius Scriba. Baelz kam zuerst im Jahre 1876 und lehrte 25 Jahre lang die interne Medizin, während Scriba zuerst 1881 unser Land betrat und als Professor der Chirurgie 20 Jahre lang an der Tokyo Universität arbeitete. Baelz und Scriba waren zwei grosse Figuren in der japanischen Medizinwelt während der Meiji-Zeit und verursachten den beträchtlichen Fortschritt in der Medizin und anderen Naturwissenschaften sowie kulturell. Beide verstanden unser Land tief und sie hatten viel Liebe zu ihm. Scriba starb 1905 und liegt still im Aoyama Friedhof begraben. Baelz starb 1913 in Stuttgart, nahe seinem Geburtsort Bietigheim. Heute stehen im Hongô-Campus der Tokyo Universität Bronzestatuen von Baelz und Scriba nebeneinander. Sie wurden in 1907 von ihren Schülern errichtet.

Ausserdem kamen in unser Land viele deutsche Ärzte um dem medizinischen Unterricht des neuen Japans zu helfen. Ich kann hier nicht alle ihre Namen sagen aber möchte einige angeben. Als der

diesem Zeitpunkt. Johannes Müller(1801-58)und Johann Lukas Schönlein (1793-1864), zwei grosse Sterne der Berliner Universität, waren schon gestorben, aber ihre prominenten Schüler, z. B. Helmholtz, du Bois-Reymond, Brücke, Schwann, Henle usw. standen damals am Gipfel ihrer Forschungsaktivität. Es war die glänzendste Zeit der deutschen Medizin. Virchows Cellularpathologie war 1858 veröffentlicht worden.

Andere Gründe der japanischen Wahl Deutschlands als Lehrer der Medizin waren vielleicht die historischen Tatsachen, dass während der Tokugawa-Zeit, wie oben bemerkt, eine Anzahl Deutscher, wie z. B. Schamberger, Kämpfer, Siebold,als Offiziere der holländisch-Ostindischen Kompagnie Japan besucht und Japanern die europäische Medizin sehr freundlich unterrichtet hatten. Ausserdem waren viele deutsche Bücher auf dem Gebiete der Medizin, wie z. B. Kulmus' Anatomie, Heisters Chirurgie, Hufelands Enchiridion medicum, Mosts Enzyklopädie, auf Umweg der holländischen Sprache ins Japanische übersetzt und übten grossen Einfluss auf die Entwicklung der japanischen Medizin während der Tokugawa-Zeit aus. Am Anfang der Meiji-Zeit kannten gewisse Japaner diese Tatsachen gut.

Den Ruf der japanischen Regierung akzeptierend, kamen Leopold Müller, Chirurg und preussischer Oberstabsarzt, und Theodor Hoffmann, Internist und Marinearzt, 1871, d. h. gerade vor ein hundert Jahren, als Lehrer der Medizin nach Tokyo. Ihre Ankunft war sehr verspätet wegen des französisch-preussischen Krieges.

Die beiden deutschen Ärzte, besonders der ältere Müller, gingen mit Entschiedenheit an die gründliche Reform der staatlichen medizinischen Schule zu Tokyo, der sogenannten "Daigaku-Tôkô" (Universität-Ostschule). Diese Schule war die Fortsetzung der "Igakujo" der Tokugawa-Zeit, die von der Meiji Regierung inhaltlich nur etwas verbessert wurde und als das neue Zentrum der medizinischen Erziehung bestimmt worden war. Die Lehrpläne dieser "Daigaku-Tôkô" waren aber unvollständig und dürftig.

Die Müller-Hoffmannsche Reform war sehr gründlich. Unter etwa 300 Studenten, die bis dahin in dieser Schule waren, wurde nur 59 erlaubt, das Medizinstudium in dieser Schule fortzusetzen. Der 8-jährige Lehrplan, Vorbereitungsklasse 3 Jahre und Akademie 5 Jahre (10 Se-

unserem Lande sehr verändert. In Nagasaki arbeitete damals Pompe van Meerdervoort sehr aktiv an der Verbesserung des medizinischen Unterrichtes für unser Land. Siebold verweilte diesmal etwa zwei Jahre in Japan, teils in Nagasaki, teils in Edo. Er war sicher der Europäer, der vor der Meiji-Zeit den grössten Einfluss auf die Medizin und die übrige gelehrte Welt ausübte.

Ausser den oben bemerkten, gab es noch viele deutsche Ärzte, die als Offiziere der holländisch-Ostindischen Kompagnie nach Nagasaki kamen und Japanern mehr oder weniger europäische Medizin unterrichteten. Hier nenne ich nur einige von ihnen: Bernard Keller (1791-95), Hermann Letzke (1798-1805), Otto Mohnike (1848-51). Mohnike war der erst, der das Sthetoskop in Japan einführte und ausserdem 1849 zuerst die Pockenimpfung mit Jennerschen Vakzinen in Japan mit Erfolg ausführte.

Dann kam 1867 das Ende der Tokugawa-Regierung. Das erneute Inselland Japan stand auf, unter der Regierung von Tenno, dem japanischen Kaiser. Bald veröffenlichte der Tenno fünf Prinzipien zur Nationalpolitik. Eines davon besagte, dass Kenntnisse der ganzen Welt ins Japan aufgenommen sein werden. Daraus konnte man leicht ahnen, dass anstatt der traditionellen chinesischen Medizin, im neuen Japan die abendländische Medizin für die Gesundheit des Volkes gewählt würde.

Am Anfang der Meiji-Zeit stiess sich die Regierung an die vierfach diskutierte Frage, in welchem Auslande Lehrer der Medizin für Japan zu suchen seien. Das Kabinett war im grossen und ganzen geneigt, englische Medizin aufzunehmen. Ein Grund dafür war, dass sich ein Engländer William Willis, Arzt der englischen Gesandtschaft in Japan, im inländischen Kriege von 1868 sehr für die Truppen von Satsuma und Chôshû verdient hatte, und so in der neuen Regierung hoch geachtet war.

Zu dieser Zeit waren zwei japanische Ärzte, Chian Sagara und Jun Iwasa, beide damals 32 Jahre alt, als Intendanten für Medizinpolitik ernannt worden. Die beiden, und zwar eifriger der erstere, empfohlen Deutschland als das beste der ganzen Welt in bezug auf Medizin.

Das war im Jahre 1869. Sehen Sie die Medizinwelt Europas zu

Gempaku Sugita und Ryotaku Maeno sind die zwei am meisten glänzenden Figuren in dieser epochemachenden Arbeit. Diese beiden und weitere Mitarbeiter begegneten furchtbaren Schwierigkeiten, da sie, ausgenommen Maeno, fast keine Kenntnisse von europäischen Sprachen hatten. Es gab damals kein Wörterbuch, kein Buch über Grammatik. Vom Beginn der Übersetzung bis zur Vollendung des Buches bedurfte es dreieinhalb Jahre (1771-1774).

Mit Erscheinen des "Kaitaishinsho" wurde eine ganz neue Bahn für die japanische Gelehrtenwelt eröffnet. Nunmehr konnten Japaner, wenn sie sich darin fleissig bestrebten, das Holländische lesen und bis zu einem gewissen Grade sprechen.

Und 1823, d. i. etwa 50 Jahre später als "Kaitaishinsho" kam der berühmte Philipp Franz von Siebold als Arzt der Ostindischen Kompagnie nach Nagasaki. Er war 1796 in Würzburg geboren und studierte dort; er war bei seiner Ankunft in Japan erst 27 Jahre alt. Einige junge Japaner, die schon damals die holländische Sprache mehr oder weniger gelernt hatten, sammelten sich um ihn. Im Jahre 1824 wurde eine Privatschule, namens "Narutaki-juku", errichtet, wo Siebold für die japanischen Schüler Klinik der Medizin, Chirurgie, Drogenkunde usw. unterrichtete. Sein Name hallte im ganzen Japan wider.

Während seines 6-jährigen Aufenthaltes konnte Siebold nur einmal, 1826, mit dem Kapitän eine lange Reise nach Edo machen. Es war für ihn eine äusserst wichtige Gelegenheit, da er sonst niemals das Innere dieses geheimnisvollen Landes mit eigenen Augen sehen konnte. Er arbeitete sehr viel während dieser Reise. Zweieinhalb Jahre später brach ein unglückliches Ereignis ein. Siebold wurde als Verbrecher von Japan verbannt und viele japanische Freunde und Studenten wurden mehr oder weniger bestraft.

Nach seiner Rückkehr nach Europa wohnte Siebold in Leiden und in Deutschland, studierte die reichen Materialien, die er in Japan gesammelt hatte, und publizierte nacheinander grosse Arbeiten, "Nippon", "Fauna Japonica", "Flora Japonica", usw. Bekanntlich wurde er die grösste Autorität über dieses Inselland.

Dreissig Jahre später, d. i. 1859, bald nach Eröffnung unseres Landes konnte Siebold noch einmal Japan besuchen. Die Situation war in

Dann kam 1690 der berühmte Gelehrte Engelbert Kämpfer als Arzt der holländischen Kompagnie in Nagasaki an. Er war 1651 in Lemgo geboren, studierte Medizin und Naturwissenschaften in Hamburg, Danzig, Königsberg usw., ging dann nach Schweden und reiste als schwedischer Legationssekretär nach Russland und Persien bis 1685. Dann wurde er Offizier der holländischen-Ostindischen Kompagnie und gelangte so zu unserem Lande. Er war ein sehr begabter Forscher. Er lebte zwei Jahre in Desima. Dazwischen machte er zweimal mit dem Kapitän eine Reise nach Edo (1691, 92). Er beobachtete scharf das für Europäer ganz mystische, rätselhafte Inselland.

Nach seiner Rückkehr in die Niederlande publizierte er 1712 das Buch " Amoenitatum exoticarum " und nach seinem Tode (1716) erschien 1727 in England sein grosses Werk " the History of Japan ". Weit später, 1774 wurde das zweibändige Buch Kämpfers " Geschichte und Beschreibung von Japan und Siam " in seinem Vaterland publiziert ; ein sehr wichtiges Buch, dem man damals in Europa genauere Kenntnisse von Japan verdankte.

Zur Zeit Kämpfers und auch noch später konnte kaum ein Japaner eine europäische Sprache verstehen, ausgenommen einige Dolmetscherfamilien in Nagasaki, die als Beruf das Holländische hören und sprechen mussten.

Gewisse Dolmetscher studierten die abendländische Medizin, besonders Chirurgie, von den Europäern in Desima und wurden praktische Ärzte. Ihr neuer Beruf hiess " Oranda-Geka " (Holland-Chirurgie) oder " Kômô-Geka " (Chirurgie des Rothaarigen).

Dann, in der zweiten Hälfte des 18ten Jahrhunderts begann in unserem Lande die Zeit von " Rangaku " (Holland-wissenschaft) mit der Publikation des "Kaitaishinsho" (Neues Buch der Anatomie). Es machte wirklich eine neue Epoche in der Geschichte der japanischen Medizin. Dieses 5-bändige, 1774 in Edo publizierte Buch war eine ziemlich treue Übersetzung aus dem Holländischen der im Originale deutschen, von Johann Adam Kulmus von Danzig verfassten "Anatomische Tabellen".

Die verdienstvollen Übersetzer waren nicht Dolmetscher, sondern einige gelehrte Ärzte, die in Edo wohnten und meistens Leibärzte bei feudalen Fürsten waren.

Japanische Medizin und Deutschland*

von Prof. Dr. Teizo OGAWA

Es ist mir eine grosse Ehre, heute Abend und zu dieser guten Gelegenheit einen Vortrag zum Thema "Japanische Medizin und Deutschland" zu halten. Die wohl bekannten, sehr innigen Verhältnisse zwischen Deutschland und Japan in der Medizin begannen bald nach der Meiji Restauration(1867-68); genauer gesagt in 1871, mit der Ankunft zweier preussischer Militärärzte in Tokyo: Leopold Müller und Theodor Hoffmann, d. h. gerade vor ein hundert Jahren. Heute und Morgen haben wir in Tokyo eine bedeutungsvolle Feier anlässlich dieses innigen Verkehrs während der letzten hundert Jahre. Aber ich möchte hier eine noch längere Geschichte der Verhältnisse zwischen beiden Ländern berücksichtigen.

Bekanntlich hat sich Japan während der Tokugawa-Zeit gegen die Fremden sehr streng abgeschlossen. Die nationale Abschliessung dauerte mehr als zwei hundert Jahre, von 1639 bis 1858. Nur wenige Europäer, nämlich eine bestimmte Zahl Holländer, durften zwecks Handels in Nagasaki verweilen. Sie mussten auf einer kleinen künstlich gebauten Insel, namens Desima, bei grosser Freiheitsbeschränkung sehr unbequem wohnen. Keinem Japaner wurde erlaubt, ins Ansland zu fahren. Zuwiderhandlung des Gesetzes sollte mit dem Tod bestraft werden.

Kurz nach dem Beginn der Abschliessung, kam im Jahre 1649 Kaspar Schamberger, wahrscheinlich ein Deutscher, als Arzt der holländisch-Ostindischen Kompagnie, nach Nagasaki. Er reiste mit dem Kapitän nach Edo, dem jetzigen Tokyo, und blieb da im Jahre 1650 mehr als 6 Monate. Er scheint dabei gewissen japanischen Aerzten die abendländische Medizin, besonders Chirurgie unterrichtet zu haben. Damit begann in unserem Lande die sogenannte "Kasparu-Ryu-Geka", d. h. die Kasparsche Schule der Chirurgie.

---

* Vortrag gehalten im 100-jährigen Jubiläum des deutsch-japanischen Austausches in der Medizin, am 17. November 1971, zu Tokyo.

近時、抗炎症の作用機作の一つとして
注目されている

生体膜安定化作用の強力な

当社研究・創製品

新発売

〈新〉鎮痛・抗炎症剤

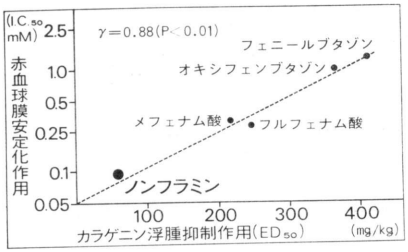
ノンフラミン®カプセル

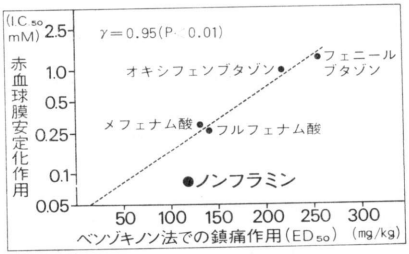
一般名＝塩酸チノリジン

ノンフラミンの生体膜（ライソゾーム※膜赤血球膜、血小板膜など）安定化作用は、抗炎症作用・鎮痛作用と相関関係のあることが、基礎実験で明らかにされています。

※ライソゾームとは…
1955年に発見された生体の防衛機構にあずかる細胞内顆粒で炎症もライソゾーム膜が不安定になりライソゾーム内の水解酵素などが放出されて起こることが明らかになりました。

●生体膜安定化と抗炎症と鎮痛の相関性





〈包装〉 ノンフラミンカプセル（50mg）
100カプセル 500カプセル 1000カプセル

●本品には製品識別コードを採用しています
製品コード番号＝Y-NO50

〈薬価基準新収載〉1カプセル（50mg）￥28.00
昭和47年2月1日実施

製造＝吉富製薬株式会社
販売＝武田薬品工業株式会社

7203-2

NIHON ISHIGAKU ZASSHI

Journal of the

Japan Society of Medical History

Vol. 18. No. 1 March 1972

Special Issue for the Horiuchi Documents

CONTENTS

Articles

Lives and Thoughts of some of the Japanese Scholares of Dutch learning as seen from the Horiuchi Documents Part I Letters of Sugita Genpaku ····· Teizo OGAWA···(1)

Dutch Vocabulary seen in the Horiuchi Documents ····· Ranzaburo OHTORI···(11)

Horinouchi, the attending Doctors to the Rulers of the Yonezawa Clan ····· Junichi HORIUCHI···(17)

A Study on the Medical Practice in the Latter Half of the Tokugawa Period with Reference to the Horiuchi Documents (1) ····· Yasuo OTSUKA···(29)

A Chronological History of the Horiuchi Documents ····· Shizu SAKAI···(39)

Remarks on the bereaved families of Shibue Chusai and Izawa Shoken ····· Akira MATSUKI···(51)

Japanische Medizin und Deutschland ····· Teizo OGAWA···(92)

Materials ····· (67)

Notes from Monthly Meetings ····· (68)

Miscellaneous ····· (74)

The Japan Society of Medical History

Department of Medical History

Juntendo University, School of Medicine

Hongo 2-1-1. Bunkyo-Ku, Tokyo